

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第75集

GO KA MURA
五ヶ村遺跡

OO NO BARU
大野原遺跡

県営広域営農団地農道整備事業西臼杵第3期地区に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2003

宮崎県埋蔵文化財センター

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第75集

GO KA MURA
五ヶ村遺跡

OO NO BARU
大野原遺跡

県営広域営農団地農道整備事業西臼杵第3期地区に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2003

宮崎県埋蔵文化財センター

序

宮崎県教育委員会では、県営広域営農団地農道整備事業西臼杵第3期に伴い、五ヶ村遺跡と大野原遺跡の発掘調査を行いました。本書はその報告書です。

今回の調査では、五ヶ村遺跡から縄文時代と弥生時代の、大野原遺跡から縄文時代の遺構・遺物が検出されました。特に、五ヶ村遺跡では、弥生時代後期頃の竪穴住居跡5軒が、土器や石器を伴い良好な状態で検出され、当時の人々の暮らしを知ることでできる貴重な発見となりました。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場で活用され、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解の一助となることを期待します。

なお、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関をはじめ、御指導・御助言をいただいた方々、ならびに地元の方々に心からの謝意を表します。

平成15年3月

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 米良弘康

例 言

1. 本報告書は、県営広域営農団地農道整備事業西臼杵第3期地区に伴い宮崎県教育委員会が行った五ヶ村遺跡・大野原遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 発掘調査は、五ヶ村遺跡が平成11年8月9日から平成11年11月8日まで、大野原遺跡が平成11年5月6日から平成11年7月5日まで行った。
4. 平成4年度に高千穂町教育委員会が付近を「岩戸五ヶ村遺跡」として調査を行っている。本遺跡と同じ五ヶ村地区内の遺跡であるが、直線距離にして500m程離れた場所関係にあり、区別するために、本報告の遺跡（県教育委員会調査箇所）を「五ヶ村遺跡」・高千穂町教育委員会調査箇所を「岩戸五ヶ村遺跡」と呼称する。
5. 現地での実測・写真撮影等の記録は、主に五ヶ村遺跡を高橋誠・下田代清海が、大野原遺跡を高橋誠・安楽哲史が行った。
6. 空中写真撮影と自然科学分析はそれぞれ次の業者に委託した。
（五ヶ村遺跡）空中写真撮影…九州航空株式会社 自然科学分析…株式会社古環境研究所
（大野原遺跡）空中写真撮影…宮崎県文化財調査サポート協同組合
7. 整理作業は宮崎県埋蔵文化財センターで行った。石器実測の一部は(株)九州文化財研究所に委託し、その他図面の作成・実測・トレースは甲斐貴充・藤木聡・高橋浩子・重留康宏が、石器計測は古屋美樹が整理補助員の協力を得て行った。
8. 本書で使用した第1図「遺跡位置図①」は高千穂町役場発行の5万分の1図を基に、第2図「遺跡位置図②」は宮崎県発行の高千穂町上野村森林基本図を一部改変して作成した。
9. 土層断面及び土器の色調は『新版標準土色帖』に拠った。
10. 本書で使用した方位は、主として座標北（座標第Ⅱ系）を使用している。その他「M.N」と記載しているものは磁北（磁針方位は西偏約6.5°）である。レベルは海拔絶対高である。
11. 本書使用した遺構略号は以下のとおりである。
SA…竪穴住居跡 SC…土坑 SI…集石状遺構
12. 本書の遺構及び遺物実測の縮尺は明記しているが、主なものについては一部例外を除いて以下のように統一している。
竪穴住居跡…1/60 土坑…1/20 集石状遺構…1/15
縄文土器・陶磁器…1/3 弥生土器…1/4 石器…1/2・1/4
13. 本書の執筆は甲斐貴充・高橋浩子・藤木聡が、編集は甲斐が担当した。文責は目次に明記している。
14. 出土遺物・その他諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

第I章 はじめに

- 第1節 調査に至る経緯 (甲斐) 1
第2節 調査の組織 (甲斐) 1~2
第3節 遺跡の位置と環境 (甲斐) 2~5

第II章 五ヶ村遺跡の調査

- 第1節 遺跡の立地と基本層序 (高橋) 6
第2節 調査の経過 (高橋) 7~8
第3節 出土土器の分類 (甲斐) 7~9
第4節 調査の記録 9~32
 1 遺構と遺構出土遺物 (甲斐・高橋・藤木) 9~23
 2 包含層等検出遺構と出土遺物 (甲斐・藤木) 23~32
第5節 5号竪穴住居跡出土炭化材の自然科学分析 33~36
第6節 調査のまとめ (甲斐・藤木) 46~51

第III章 大野原遺跡の調査

- 第1節 遺跡の立地と基本層序 (高橋) 65~66
第2節 調査の経過 (高橋) 66~67
第3節 調査の記録 (甲斐・高橋・藤木) 68~73
 1 遺構 (高橋) 68
 2 遺物 (甲斐・藤木) 68~73
第4節 調査のまとめ (甲斐) 75

挿図目次

- 第1図 遺跡位置図① (1/100,000) 4
第2図 遺跡位置図② (1/2,500) 5
第3図 五ヶ村遺跡 土層堆積状況図 (1/80) 6
第4図 五ヶ村遺跡 地形及び遺構分布図 (1/300) 8
第5図 五ヶ村遺跡 1号竪穴住居跡図 (1/60) 10
第6図 五ヶ村遺跡 1号竪穴住居跡出土遺物 (1/4・1/2) 11
第7図 五ヶ村遺跡 2号竪穴住居跡図 (1/60) 13
第8図 五ヶ村遺跡 2号竪穴住居跡出土遺物 (1/4・1/2) 14
第9図 五ヶ村遺跡 3号竪穴住居跡図 (1/60) 15
第10図 五ヶ村遺跡 3号竪穴住居跡出土遺物 (1/4・1/2) 16
第11図 五ヶ村遺跡 4号竪穴住居跡図 (1/60) 17
第12図 五ヶ村遺跡 4号竪穴住居跡出土遺物 (1/4・1/2) 18

第13図	五ヶ村遺跡	5号竪穴住居跡図(1/60)	20
第14図	五ヶ村遺跡	5号竪穴住居跡出土遺物①(1/4)	21
第15図	五ヶ村遺跡	5号竪穴住居跡出土遺物②(1/4・1/2)	22
第16図	五ヶ村遺跡	5号竪穴住居跡出土遺物③(1/4)	23
第17図	五ヶ村遺跡	1号集石状遺構図(1/15)	23
第18図	五ヶ村遺跡	包含層等出土弥生土器①(1/4)	25
第19図	五ヶ村遺跡	包含層等出土弥生土器②(1/4)	26
第20図	五ヶ村遺跡	包含層等出土石器①(1/2)	27
第21図	五ヶ村遺跡	包含層等出土石器②(1/2・1/4)	29
第22図	五ヶ村遺跡	包含層等出土縄文土器①(1/3)	31
第23図	五ヶ村遺跡	包含層等出土縄文土器②(1/3)	32
第24図	大野原遺跡	土層柱状図	65
第25図	大野原遺跡	地形及び遺構分布図(1/250)	67
第26図	大野原遺跡	1号土坑図(1/20)	68
第27図	大野原遺跡	包含層等出土縄文土器・弥生土器・中世陶磁器(1/3)	69
第28図	大野原遺跡	包含層等出土石器①(1/2)	70
第29図	大野原遺跡	包含層等出土石器②(1/2)	71
第30図	大野原遺跡	包含層等出土石器③(1/2)	72

表 目 次

第1表	五ヶ村遺跡	出土土器観察表①	37
第2表	五ヶ村遺跡	出土土器観察表②	38
第3表	五ヶ村遺跡	出土土器観察表③	39
第4表	五ヶ村遺跡	出土土器観察表④	40
第5表	五ヶ村遺跡	出土土器観察表⑤	41
第6表	五ヶ村遺跡	出土土器観察表⑥	42
第7表	五ヶ村遺跡	出土土器観察表⑦	43
第8表	五ヶ村遺跡	出土石器観察表①	44
第9表	五ヶ村遺跡	出土石器観察表②	45
第10表	五ヶ村遺跡	検出竪穴住居跡一覧	47
第11表	竪穴住居跡	出土弥生土器の組み合わせ	48
第12表	竪穴住居跡	出土石器の組成	49
第13表	磨製石鏃の色	と竪穴住居跡の関係	49
第14表	敲石・磨石	と竪穴住居跡の関係	49
第15表	大野原遺跡	出土土器観察表	73
第16表	大野原遺跡	出土石器観察表	74

図 版 目 次

図版 1	①五ヶ村遺跡出土炭化材の顕微鏡写真	36
図版 2	①五ヶ村遺跡と遠景（西方向を望む）	52
図版 3	①五ヶ村遺跡全景（上から）／②遺構検出状況(1)（北半分）	53
図版 4	①遺構検出状況(2)（南半分）／②遺構検出状況(3)（SA1とSA2）／ ③遺構検出状況(4)（SA3・SA4・SA5）／④SA1検出状況（北側から）／ ⑤SA1主柱穴検出状況（上から）	54
図版 5	①SA2検出状況（北側から）／②SA3検出状況（北西側から）／ ③SA4検出状況（北西側から）／④SA5検出状況（北側から）／ ⑤SA5遺物出土状況（北側から）／⑥SA5遺物出土状況（南側） ⑦SA5炭化物検出状況／⑧1号集石状遺構検出状況（西側から）	55
図版 6	①SA1出土弥生土器(1)／②SA1出土弥生土器(2)／③SA1出土石器(1)／ ④SA1出土石器(2)／⑤SA2出土弥生土器(1)／⑥SA2出土石器(1)	56
図版 7	①SA3出土弥生土器(1)／②SA3出土弥生土器(2)／③SA3出土弥生土器(3)／ ④SA3出土石器(1)／⑤SA4出土弥生土器(1)／⑥SA4出土石器(1)／ ⑦SA4出土石器(2)	57
図版 8	①SA4出土石器(3)／②SA5出土弥生土器(1)／③SA5出土弥生土器(2)／ ④SA5出土弥生土器(3)／⑤SA5出土弥生土器(4)／⑥SA5出土弥生土器(5)／	58
図版 9	①SA5出土弥生土器(6)／②SA5出土弥生土器(7)／③SA5出土弥生土器(8)／ ④SA5出土弥生土器(9)／⑤SA5出土弥生土器(10)／⑥SA5出土弥生土器(11)／ ⑦SA5出土弥生土器(12)	59
図版 10	①SA5出土弥生土器(13)／②SA5出土弥生土器(14)／③SA5出土弥生土器(15)／ ④SA5出土弥生土器(16)／⑤SA5出土弥生土器(17)／⑥SA5出土弥生土器(18)／ ⑦SA5出土弥生土器(19)／⑧SA5出土弥生土器(20)	60
図版 11	①SA5出土石器(1)／②SA5出土石器(2)／③SA5出土石器(3)／ ④包含層等出土弥生土器(1)／⑤包含層等出土弥生土器(2)／ ⑥包含層等出土弥生土器(3)／⑦包含層等出土弥生土器(4)／	61
図版 12	①包含層等出土弥生土器(5)／②包含層等出土弥生土器(6)／ ③包含層等出土弥生土器(7)／④包含層等出土弥生土器(8)／ ⑤包含層等出土弥生土器(9)／⑥包含層等出土弥生土器(10)	62
図版 13	①包含層等出土弥生土器(11)／②包含層等出土弥生土器(12)／ ③包含層等出土弥生土器(13)／④包含層等出土弥生土器(14)／ ⑤包含層等出土石器(1)／⑥包含層等出土石器(2)／⑦包含層等出土石器(3)／ ⑧包含層等出土石器(4)／⑨包含層等出土石器(5)	63
図版 14	①包含層等出土石器(6)／②包含層等出土石器(7)／③包含層等出土石器(8)／ ④包含層等出土縄文土器(1)／⑤包含層等出土縄文土器(2)／ ⑥包含層等出土縄文土器(3)／⑦包含層等出土縄文土器(4)	64

図版15	①大野原遺跡と遠景（北方向を望む）	76
図版16	①大野原遺跡（西半分）／②包含層等出土縄文土器(1)／ ③包含層等出土縄文土器(2)	77
図版17	①包含層等出土石器(1)／②包含層等出土石器(2)／ ③包含層等出土石器(3)／④包含層等出土石器(4)／ ⑤包含層等出土石器(5)／⑥包含層等出土石器(6)	78

第 I 章 はじめに

第 1 節 調査に至る経緯

宮崎県では、西臼杵地域の基幹産業としての農林業の各種整備の一環として、県営広域営農団地農道整備事業を進めている。

県文化課では、平成10年度以降の西臼杵第3地区事業予定地内において遺跡が影響を受ける可能性が考えられたため、平成10年6月4日・同年6月18～19日・同年7月24日に大野原遺跡と五ヶ村遺跡の試掘調査を実施した。試掘調査の結果、大野原遺跡ではチャート製石器や縄文時代早期土器片が、五ヶ村遺跡ではチャート製石器と土器片が出土した。試掘の結果を受けて県文化課と埋蔵文化財センターは西臼杵支庁土木課と協議を行い、平成11年度に発掘調査を実施した。

整理作業は、平成12～14年度、報告書作成は平成14年度に行った。

第 2 節 調査の組織

(平成11年度) 五ヶ村遺跡・大野原遺跡 調査

宮崎県埋蔵文化財センター

所 長	田中 守
副 所 長	江口 京子
庶 務 係 長	児玉 和昭
調査第二係長	青山 尚友
同 主 査	谷口 武範 (調整担当)
同 主 事	高橋 誠 (調査担当)
同 調査員	下田代清海 (大野原遺跡調査担当)
同 調査員	安楽 哲史 (五ヶ村遺跡調査担当)

(平成12・13年度) 五ヶ村遺跡・大野原遺跡 整理

宮崎県埋蔵文化財センター

所 長	矢野 剛
副所長兼総務課長	菊地 茂仁
副所長兼調査第二課長	岩永 哲夫
総 務 係 長	亀井 維子
調査第二課調査第三係長	菅付 和樹

(平成14年度) 五ヶ村遺跡・大野原遺跡 報告書作成

宮崎県埋蔵文化財センター

所 長	米良 弘康
副所長兼総務課長	大藪 和博
副所長兼調査第二課長	岩永 哲夫
総 務 係 長	野邊 文博
調査第二課調査第三係長	菅付 和樹
同 主任主事	甲斐 貴充

第3節 遺跡の位置と環境 (第1図・第2図)

五ヶ村遺跡は西臼杵郡高千穂町大字岩戸字中ノ迫上618-1他, 大野原遺跡は西臼杵郡高千穂町大字三田井字大野原4910-3他に所在する。両遺跡間は直線距離にして約1.6kmである。

両遺跡の所在する高千穂町は, ほぼ九州中央部, 宮崎県北西端部に位置し, 熊本県と大分県と県境をもって隣接している。また, 高千穂町は, 九州山地中にあり, 北方から東方にかけての祖母山系・西方の阿蘇外輪山・南方の椎葉連山に囲まれ, 盆地を形成している。そのため, 平地に乏しく, 遺跡の殆どが急峻な傾斜面に位置する。盆地には, 北西から南東にかけて横断貫流している五ヶ瀬川が流れ, 五ヶ瀬川に向かって周辺山地の分水嶺を水源とする大小多数の河川が注ぎ込んでいる。五ヶ村遺跡(第1図-1)・大野原遺跡(第1図-2)は, 五ヶ瀬川支流の一つである岩戸川右岸, 天香具山(標高606m)から派生する丘陵東斜面上(五ヶ村遺跡370m・大野原遺跡345m)に位置する。

遺跡の周辺は, 発掘調査例こそ少ないが, 以前から数多くの遺物が表採され, 幅広い時代の遺跡が多く確認されている。以下, 簡単ではあるが, 本報告書に関連する遺跡周辺及び高千穂町の旧石器時代～古墳時代の遺跡概要を年代順に概説する。

■旧石器時代～縄文時代

旧石器時代の遺跡は, 付近ではナイフ形石器が出土した宮ノ前第2遺跡(第1図-3)と細石核・細石刃が出土した阿蘇原上遺跡(第1図-4)の調査例しかないが, 同じ五ヶ瀬川流域において, 出羽洞穴遺跡(西臼杵郡日之影町見立)・岩土原遺跡(西臼杵郡北方町笠下)・蔵田遺跡(西臼杵郡北方町辰)・矢野原遺跡(西臼杵郡北方町辰)などで旧石器時代の遺跡が確認されている。

縄文時代において, 爪形文土器が出土した阿蘇原上遺跡・石槍が出土した岩戸五ヶ村遺跡(第1図-5)などの草創期遺跡をはじめ, 表採資料であるが押型文土器が出土した薄糸平遺跡(第1図-6)・押型文土器や集石遺構3基が確認された阿蘇原上遺跡・押型文土器が出土した岩戸五ヶ村遺跡・南平第4遺跡(第1図-7)の早期遺跡, 轟B式土器の出土した押方遺跡C地点(第1図-8)や陣内遺跡(第1図-9)の前期遺跡など, いくつかの遺跡の存在が確認されている。五ヶ村遺跡は, 縄文時代早期の押型文土器が出土し, 新たな調査資料として追加されることとなった。

縄文時代後期～晩期の遺跡は, 岩戸五ヶ村遺跡・薄糸平遺跡・陣内遺跡・宮ノ前第2遺跡・城ノ平遺

跡（第1図-10）・吾平原第2遺跡（第1図-11）・梅ノ木原遺跡（第1図-12）・セベツト遺跡（第1図-13）・南平第3遺跡（第1図-7）・中ノ原遺跡（第1図-14）・神殿遺跡（第1図-15）と数多い。特に陣内遺跡は、西平式・三万田式・御領式土器の他、土偶・石棒といった呪術具なども出土しており、当地の先進性が伺える。五ヶ村・大野原の両遺跡からは、包含層からではあるが、縄文時代晩期の土器群が出土した。

■弥生時代

当地の調査例は中期以降のものが多い。中期から後期にかけて遺跡数は増加し、押方遺跡C地点（第1図-8）・薄糸平遺跡・吾平原第2遺跡・南平第3遺跡・神殿遺跡で確認されている。特に南平第3遺跡では、中期末～後期にかけて26軒の竪穴住居跡が確認された。五ヶ村遺跡は、弥生時代中期末～終末期の土器・石器と竪穴住居跡5軒が検出された。

■古墳時代

古墳時代における当地方の墓制は、丸山石棺群（第1図-16）など箱式石棺も見られるが、横穴墓が主流である。横穴墓は、高千穂地方全域に分布し、田原地区・上野地区・三田井地区・押方地区・岩戸地区など合計120基以上が確認されている。遺跡のある岩戸地区でも徳法師横穴墓群（岩戸5号・6号横穴墓）（第1図-17）・岩神上横穴墓群（岩戸2～3号横穴）（第1図-18）・向久保横穴墓（岩戸1号横穴墓）（第1図-19）・板木横穴墓群（第1図-20）・中ノ谷横穴墓（岩戸4号横穴墓）（第1図-21）が確認されている。また、生活遺構としては、宮ノ前遺跡・神殿遺跡C地区などで竪穴住居跡が確認されている。

【引用参考文献】

高千穂町 1973『高千穂町史』

宮崎県 1997『宮崎県史』通史編 原始・古代1

九州前方後円墳研究会 2001『九州の横穴墓と地下式横穴墓』

宮崎県埋蔵文化財センター 1997『広木野遺跡 神殿遺跡A地区』

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第7集

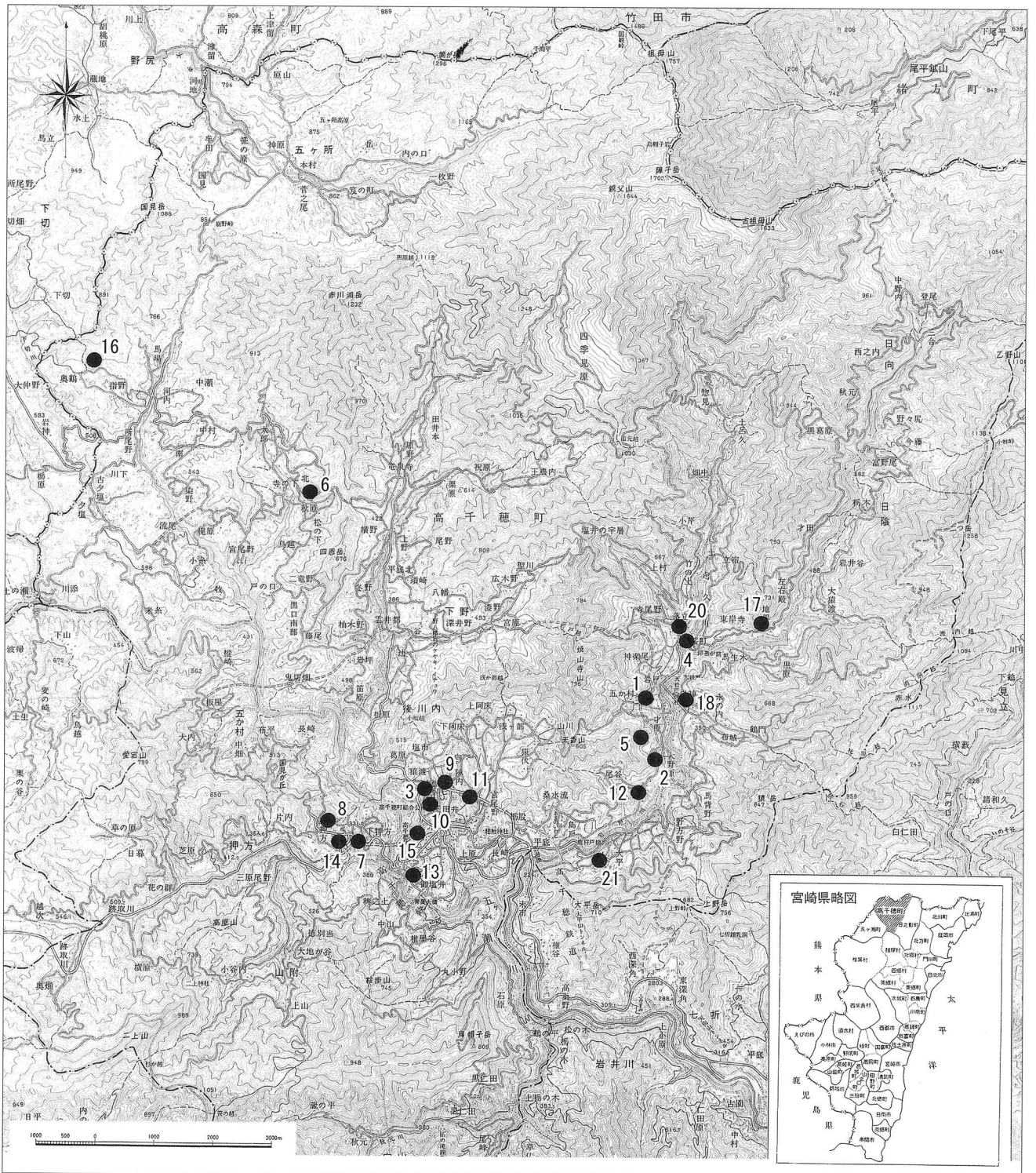
宮崎県埋蔵文化財センター 1999『神殿B・C地区 南平第3遺跡 南平第4遺跡 中ノ原遺跡』

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第17集

高千穂町教育委員会 1983『高千穂町遺跡詳細分布調査報告書（三田井・押方・向山地区）』

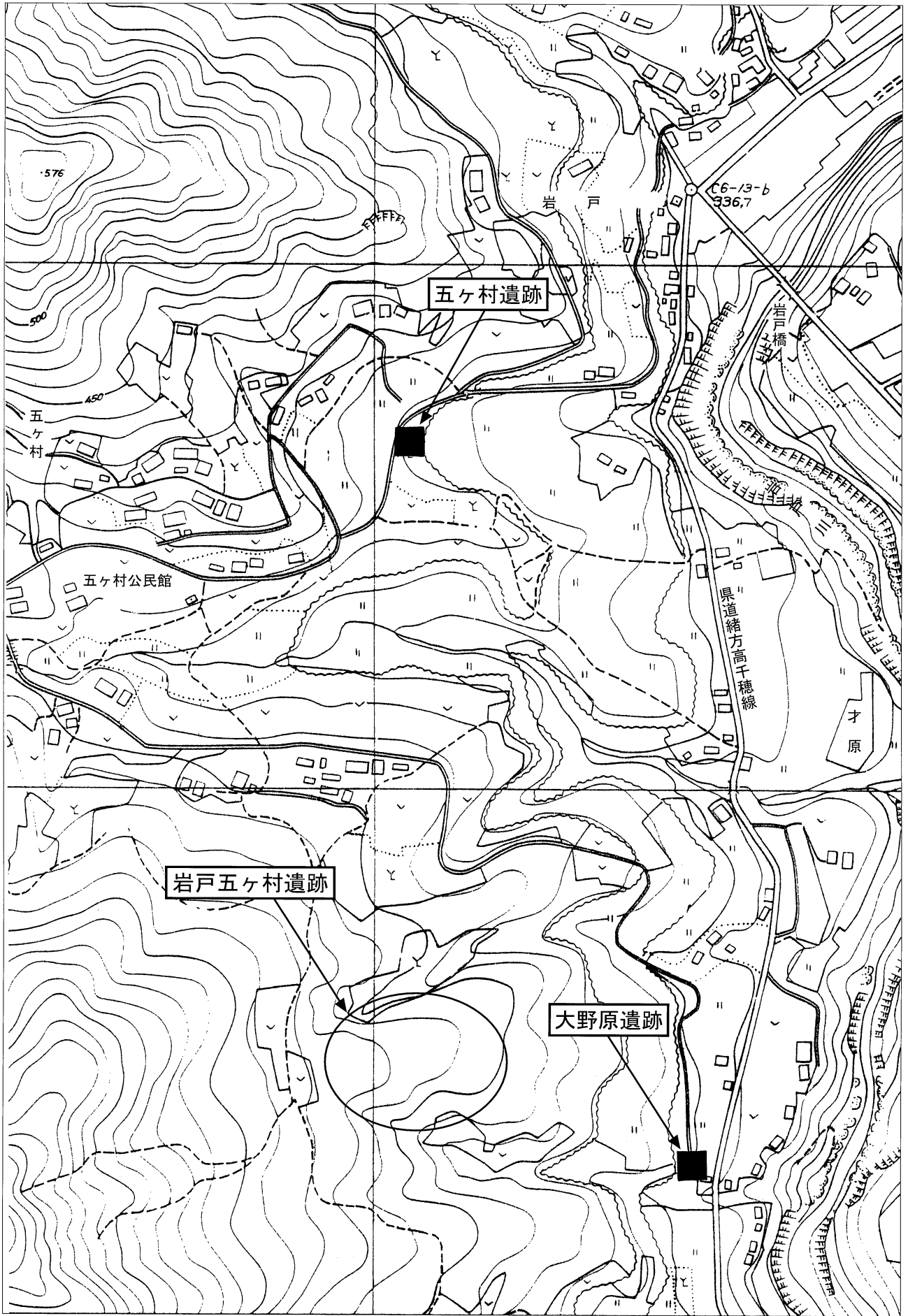
高千穂町教育委員会 2000『岩戸五ヶ村遺跡』高千穂町文化財調査報告書第12集

高千穂町教育委員会 2002『高千穂町遺跡詳細分布報告書（町内全域編）』高千穂町文化財調査報告書第14集



- | | | | | |
|------------|------------|------------|-----------|-----------|
| 1 五ヶ村遺跡 | 2 大野原遺跡 | 3 宮ノ前第2遺跡 | 4 阿蘇原上遺跡 | 5 岩戸五ヶ村遺跡 |
| 6 薄糸平遺跡 | 7 南平第4遺跡 | 8 押方遺跡C地点 | 9 陣内遺跡 | 10 城ノ平遺跡 |
| 11 吾平原第2遺跡 | 12 梅ノ木原遺跡 | 13 セベット遺跡 | 14 中ノ原遺跡 | 15 神殿遺跡 |
| 16 丸山石棺群 | 17 徳法師横穴墓群 | 18 岩神上横穴墓群 | 19 向久保横穴墓 | 20 板木横穴墓群 |
| 21 中ノ谷横穴墓 | | | | |

第1図 遺跡位置図① (1/100,000)



第2図 遺跡位置図② (1/2,500)

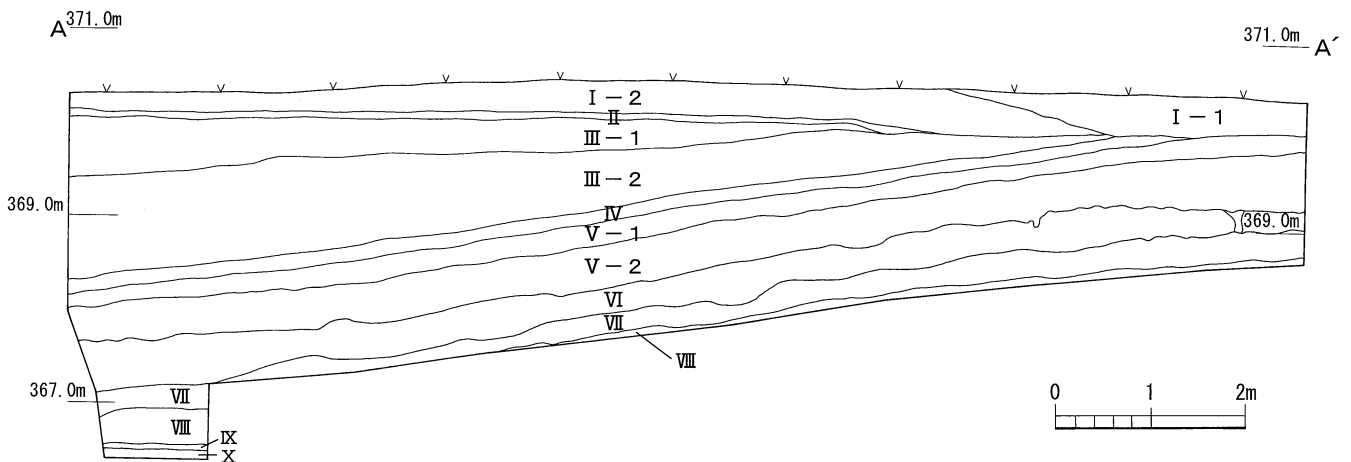
第II章 五ヶ村遺跡の調査 (第3図～第24図)

第1節 遺跡の立地と基本層序 (第3図)

五ヶ村遺跡は、標高796mの焼山寺山から派生する弓状に湾曲した丘陵の東斜面に立地する。斜面には棚田が弧状に綿々と営まれており、調査地はその最上位(標高約370m)に位置する。調査地の西側上方には市道が隣接し、眼下には深い谷を開析する岩戸川が南北方向に貫流している。

遺跡が傾斜地に位置するため、土層堆積は若干不安定であるが、基本土層は以下のとおりである。

第I層は耕作土で、30cm程の堆積が見られる。2層に分かれ、I-1層はにぶい黄褐色(10YR4/3)弱粘質土で、水田基盤ブロックを多く混入し、若干しまりがある。I-2層は暗褐色(10YR3/3)非粘質土でしまりがない。第II層は水田基盤層である。第III層は西から東に傾斜する谷を埋め立てた造成土で、東側の一番深い所では180cm程の堆積が確認できる。造成土は大きく2層に分かれ、III-1層はしまりが弱い暗褐色(10YR3/3)弱粘質土、III-2層は灰黄褐色(10YR4/2)弱粘質土でしまりがある。第IV層はしまりが弱い黒褐色(10YR3/2)非粘質土で、遺構・遺物は見られない。第V層は弥生時代を中心とする遺物包含層である。2層に分かれ、V-1層は若干しまりがあるにぶい黄褐色(10YR4/3)弱粘質土で、2mm程の炭化物粒がまばらに混在する。V-2層は黄褐色(10YR/)弱粘質土で、この面で遺構検出を行った。第VI層はしまりが弱い褐色(10YR4/4)シルト質土で、アカホヤ火山灰が混じる。第VII層はしまりが弱い暗褐色(7.5YR3/3)粘質土で、第VI層と第VIII層の漸移層である。5～10cm大のチャート角礫が多く混入している。第VIII層は黒褐色(10YR2/2)粘質土でしまりがあり、2～3cmのチャート角礫が多く混じる。第IX層はしまりのある暗褐色(10YR3/3)粘質土で、第VIII層と第X層の漸移層である。第X層はにぶい褐色(7.5YR5/4)粘質土の地山で、硬くしまる。



第I層…にぶい黄褐色～暗褐色土。耕作土(30cm) / 第II層…水田基盤層(5cm) / 第III層…暗褐色～灰黄褐色土。造成土(0～180cm) / 第IV層…黒褐色非粘質土(15cm) / 第V-1層…にぶい黄褐色弱粘質土(20cm)。遺物包含層 / 第V-2層…黄褐色弱粘質土(40cm) 堅穴住居跡検出面 / 第VI層…褐色シルト質土(50cm)。アカホヤ火山灰土の二次堆積 / 第VII層…暗褐色粘質土(30cm) / 第VIII層…黒褐色粘質土(40cm) / 第IX層…暗褐色粘質土(5cm) / 第X層…にぶい褐色粘質土。地山

第3図 五ヶ村遺跡 土層堆積状況図 (1/80)

第2節 調査の経過（第4図）

調査対象地は、東に張り出す尾根間の谷、標高370mの東向き斜面に形成された水田耕作地である。調査区周囲は、東側隣接地に水田が耕作され、西側には用水路が設置されていたため、水田と構造物への影響を考慮し、1m前後の余裕幅を設け約990m²の調査区を設定した。調査区は南北に約75m、東西に約15mの逆ノの字形を呈する。排土を調査区外に持ち出すことが不可能であったため、調査区を南北に分け反転調査を実施した。まず、東側隣接地の収穫前水田への排土流出を防ぐため、北側から調査を開始した。

平成11年8月11日に事務所等の設置、器材搬入を行い、翌12日に調査区北側に2m×6m、2m×8mの2本の土層確認用トレンチを開削した。8月16日から重機による第Ⅰ層の耕作土及び第Ⅱ層の水田基盤層の除去を開始した。第Ⅱ層直下で精査を行ったところ、調査区北端の西壁寄り第Ⅴ—2層面で、北西隅に突出壁を持ち、弥生土器を包含する1号竪穴住居跡を検出した。この住居跡は第Ⅱ層の水田基盤層直下の検出であるが、斜面上位一帯は耕作地造成に伴う削平のため第Ⅲ層（造成土）・第Ⅳ層（黒褐色非粘質土）・第Ⅴ—1層（にぶい黄褐色弱粘質土）の堆積は無く、第Ⅴ—2層（黄褐色弱粘質土）が露出していた。人力による第Ⅲ層の掘り下げを行い、この段階で座標北に合わせた10mグリッドを設定した。さらに第Ⅳ層上面の精査及び第Ⅳ層の掘り下げを行った。第Ⅳ層では遺構の確認はできなかったが、中世陶磁器を若干出土している。9月上旬に第Ⅴ—1層の掘り下げを開始した。第Ⅴ—1層は弥生時代の遺物包含層で、遺物の取り上げと精査を繰り返し行い、遺構検出に努めた。9月14日に第Ⅴ—2層上面で2軒目の竪穴住居跡（2号竪穴住居跡）を検出した。1号竪穴住居跡の約5m南に位置し、弥生土器が出土している。第Ⅴ—2層上面で地形測量を行い、第Ⅵ層（褐色シルト質土：二次アカホヤ）まで2m×10mの範囲でトレンチ調査を行って北側半分の調査を終了した。

10月5日に調査区南側の調査を開始した。第Ⅲ層まで重機で除去し、第Ⅳ層から人力で掘り下げを行った。第Ⅴ—1層上面で精査し、遺構検出に努めたが、遺構の確認ができなかったため、掘り下げと出土遺物の取り上げを行った。第Ⅴ—2層上面で精査を行うと、調査区西壁寄りに3軒の竪穴住居跡（3・4・5号竪穴住居）を検出した。いずれも弥生土器を出土している。この他、10月21日に3号竪穴住居跡の北東約1mのところに集石状遺構を検出した。検出遺構の掘り上げ、図面作成等を行い、10月29日に委託による空中写真撮影を実施した。その後、第Ⅴ—2層上面で地形測量を行い、2m×10mのトレンチを第Ⅵ層上面まで開削した。第Ⅵ層上面で精査を行ったが、遺構の確認はできず、平成11年11月5日に全ての調査を終了した。

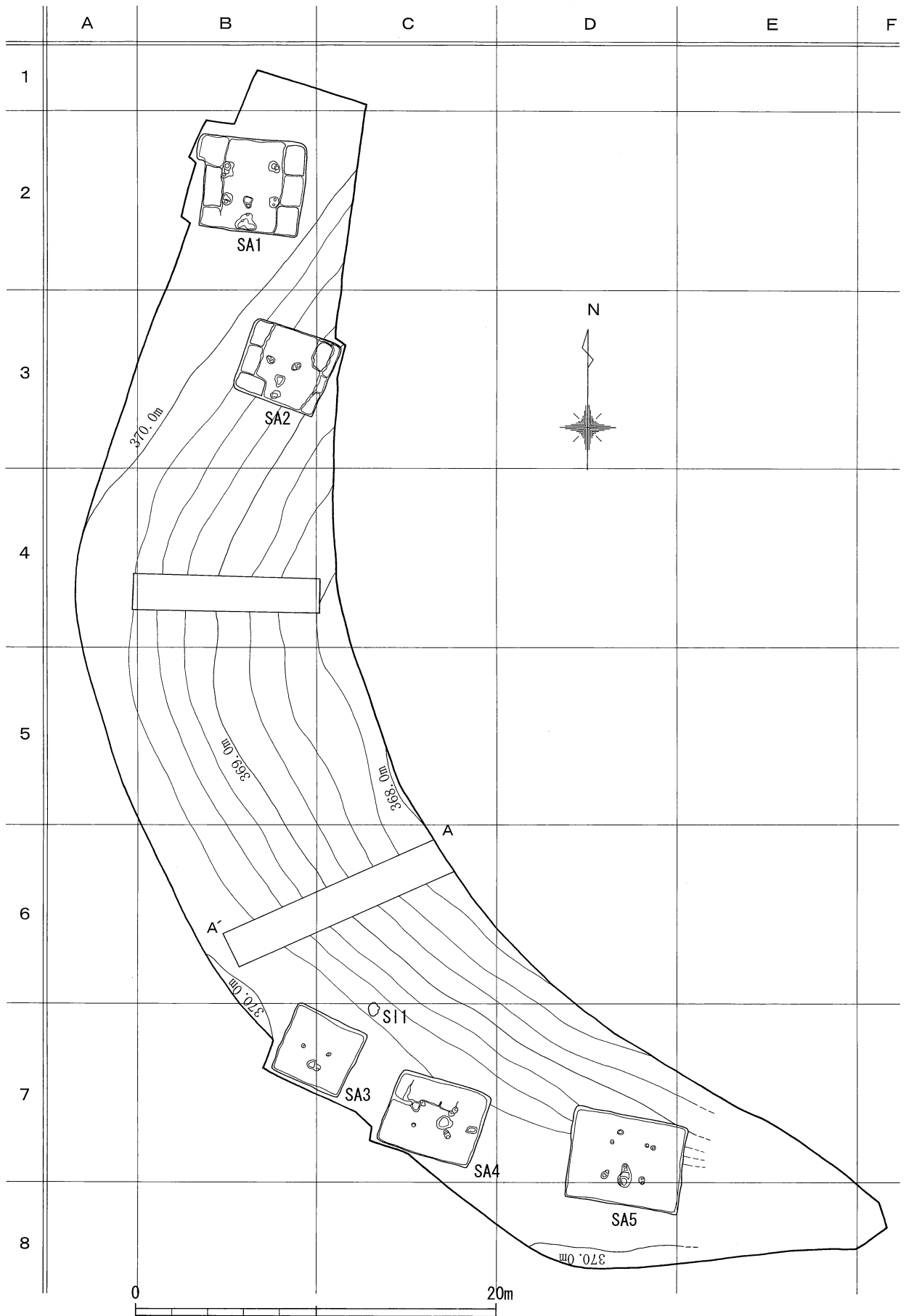
第3節 出土土器の分類

五ヶ村遺跡では、縄文土器・弥生土器・石器などの遺物が遺構内外より多く出土した。後に出来るだけ簡素に記述するため、出土土器の分類を行った。なお、石器については、器種別に分類したので、ここでの分類は割愛する。

■ 縄文土器

大きくⅠ～Ⅲ類の3類に分類する。

Ⅰ類：押型文土器を一括する。外面施文によって（A）楕円形（B）山形（C）格子状（D）撚糸・縄文（E）条痕：柵状文の5類に細分できる。



第4図 五ヶ村遺跡 地形及び遺構分布図 (1/300)

Ⅱ類：黒色磨研系土器。口縁部を玉縁状に肥厚させたものが多い。

Ⅲ類：無刻目突帯文土器。厚手の器壁に、凹面状に窪んだ1～4cm程度の突帯をもつ。外面調整はナデ調整によるものが多く、条痕が強く残るものもある。

■ 弥生土器

(1) 甕：大きくA～E類に分類する。

甕A類：短い逆L字状口縁をもつ粗製の甕。胎土に黒色透明角閃石を多く含み、ザラザラした手触りをもつ。口縁部下に、(1) いわゆる工字突帯をもつもの(2) 無文のもの、がある。

甕B類：口縁が斜方向に折れて外反する粗製の甕。口唇部は、丁寧なナデによって、平坦もしくは凹面状にくぼむ。口縁部下は、(1) いわゆる工字突帯をもつもの(2) ミミズ腫れ状工字突帯をもつもの(3) 櫛描き文を施すもの(4) 無文のもの、がある。胎土に黒色透明角閃石を多く含み、ザラザラした手触りをもつ。文様・胎土などから甕A類との強い関連が想定される。

甕C類：口縁が斜方向に大きく直線状に開く甕。(1) 「く」字状に明確に屈曲するもの(2) 明確な変換点をもたず緩やかに屈曲するもの、の大きく2種類ある。口唇部は、他の甕と異なり、ナデ等の調整が粗く、不揃いで凸凹している。口縁部径 \geq 胴部径である。器面調整はハケ目もしくはタタキを施している。胎土に小礫を多く含む。

甕D類：黒髪式系の土器群。鋤先状の口縁を有する。口唇部は、丁寧な横ナデを施し、断面形は舌状を呈する。口縁部上面の形態(1) 凹面状にくぼむ(2) 平坦もしくは凸面状に膨らむ、の大きく2種類がある。胎土は他の甕類に比べて混入物が少なく、焼成は堅緻である。底部は上底を呈する。

甕E類：下城式系の土器群。若干肥厚させた口唇端部に刻目を入れ、口縁部下に刻目のある多条の突帯をもつ。口縁部形態は(1) 緩やかに外反するもの(2) 直立気味に立ち上がるもの、の大きく2種類がある。口唇部は、丁寧なナデによって、平坦もしくは凹面状にくぼむ。胎土は、小礫を含むもの、黒色透明角閃石を含むものがある。

(2) 壺：大きくA～Cに分類する。

壺A類：二重口縁のタイプである。二次口縁部に(1) 櫛描き波状文を施すもの(2) 無文のもの、がある。安国寺式の範疇に入ると考えられる。

壺B類：単口口縁のタイプである。

壺C類：長頸のタイプである。薄手の器壁、ミガキによる器面調整を特徴とする。

第4節 調査の記録

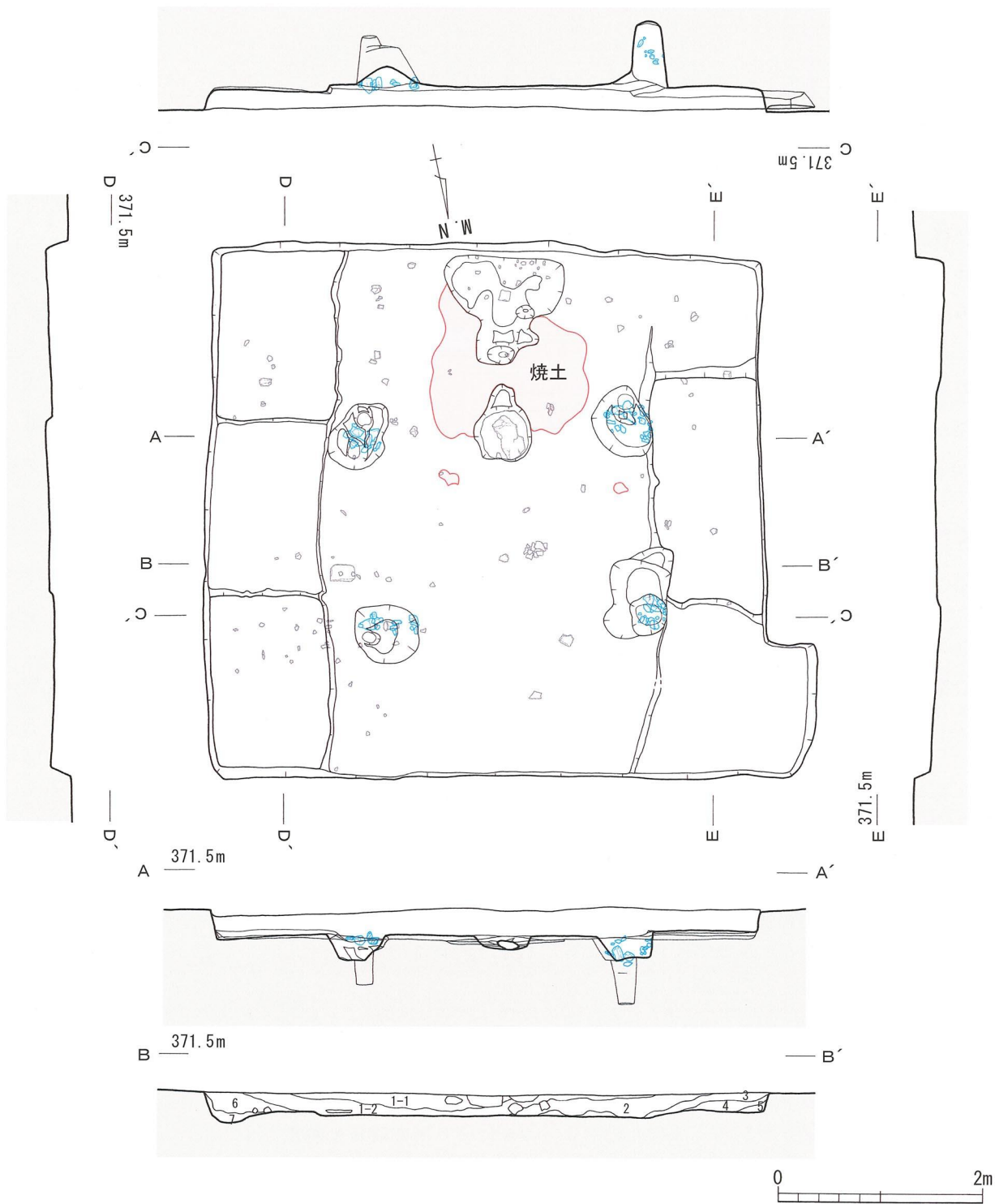
1. 遺構と遺構出土遺物(第5図～第17図)

第V層から弥生時代の竪穴住居跡5軒と弥生土器・石器等が確認された。

(1) 竪穴住居跡

1号竪穴住居跡(SA1)

■遺構(第5図)…調査区北端に位置する。主軸方位はN-13°-Eを指す。平面の規模は長軸550cm、短軸530cmの方形プランを呈し、斜面上位の西壁北端に135cm×50cmの長方形の張り出しを持つ。東西の壁際にはベッド状遺構があり、西側は断面形凸型を呈し、検出面から一段目の深さは約20cm、一段目と



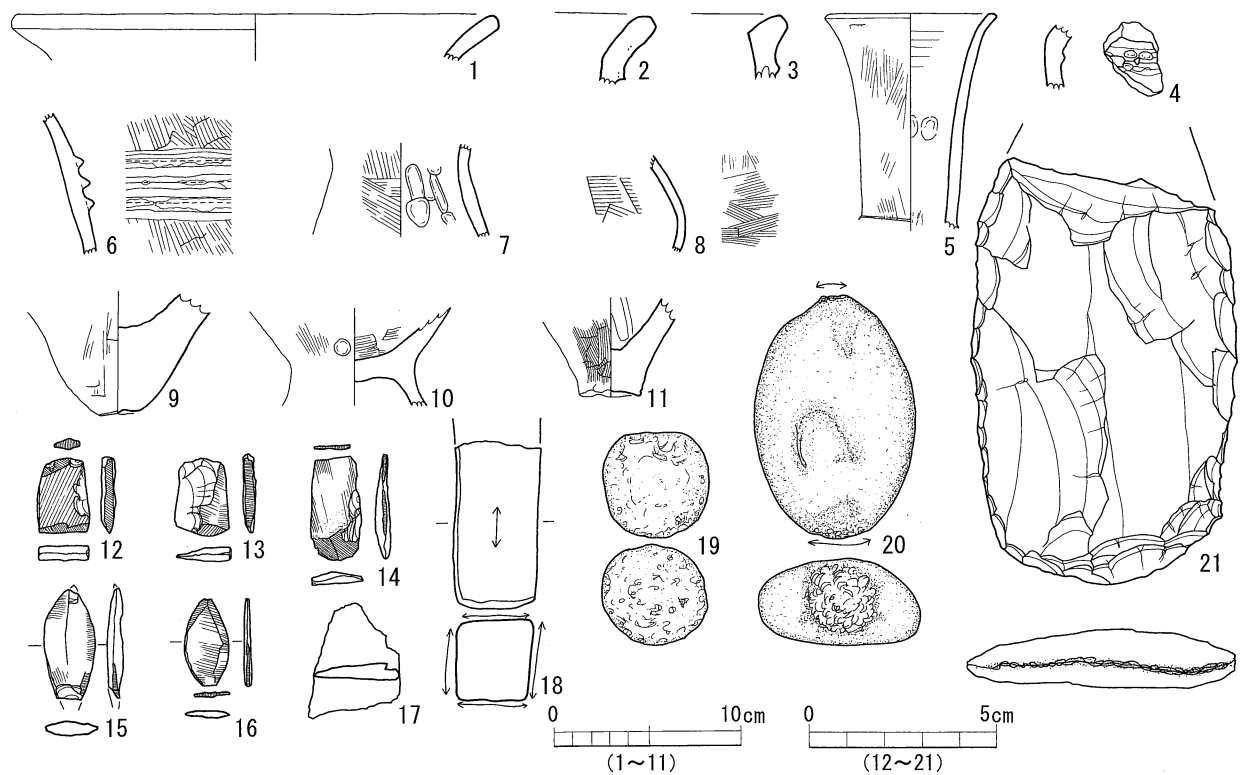
- 1-1 にぶい黄褐色 (10YR5/4) ～非粘質。しまりなし。
- 1-2 にぶい黄褐色 (10YR5/4) ～弱粘質土。しまり若干あり。
- 2 黒褐色 (10YR3/2) ～弱粘質。しまりあり。5～10mmの明黄褐色 (10YR7/6) 粘質土ブロックをまばらに、2～5mmの炭化物粒をわずかに混入。
- 3 明黄褐色 (10YR6/6) ～非粘質土。しまりなし。
- 4 にぶい黄褐色 (10YR5/4) ～粘質土。しまり若干あり。1～2cmの明黄褐色 (10YR7/6) 土ブロックをまばらに混入。
- 5 にぶい黄褐色 (10YR5/4) ～粘質土。しまりなし。
- 6 暗褐色 (10YR3/3) ～非粘質土。しまり若干あり。5mmの炭化物粒をわずかに混入。
- 7 褐色 (10YR4/4) ～粘質土。しまりあり。2～5mmの明黄褐色 (10YR7/6) 土ブロックをわずかに混入。

第5図 五ヶ村遺跡 1号竪穴住居跡図 (1/60)

二段目の比高差は約5～10cmを測る。東側は断面形凹型で、検出面から一段目の深さは20cm前後、一段目と二段目の比高差は約5cmを測る。ベッド状遺構間中央部床面の検出面からの深さは約30cmである。支柱穴は4本で、ベッド状遺構に沿って配置されている。規模は長軸約70cm、短軸約50～60cm、床面からの深さ50～65cmを測る。柱間は南北210～215cm、東西260～275cmで、4本とも埋土中に根固めの小角礫が混在する。床面南側中央部に炉跡と推定される窪みが確認できる。中央寄りに55cm×70cm、深さ12cm程のピットがあり、炭化物を含む黒色土と礫が見られる。礫は、長軸40cm、短軸20cm、厚さ8cmの扁平な凝灰岩である。その南側に105cm×120cm、深さ5～10cmの不整形の窪みがあり、その北側に焼土が広がる。遺物は住居の北東部及び南側中央土坑に集中し、ほとんどが床面から10cm程浮いた状態で出土した。

■遺物（第6図-1～21）…1～3は甕の口縁部である。1は甕D類、2・3は甕A類である。2は、明確な逆L字状ではなく、屈曲しながら外反するタイプであり、甕B類との中間形態的要素を含む。4は甕の胴部である。ミミズ腫れ状の突帯をもつ。5～8は壺である。5は壺C類（長頸壺）の頸部である。緩やかにラップ状に開く器形で、外面にミガキを施す。6は、壺の肩部であり、3条の突帯をもつ。甕D類と同型式だと考えられる。7・8は小形壺の頸部と胴部である。9～11は底部である。形態や胎土状況から、9は尖底で甕B類、10は上底で甕D類の底部だと考えられる。

12～14は小形のノミ状をした石器である。磨製石鏃と同質の石材が用いられ、色は緑である。刃部は両刃であり、両側辺と頭部は平坦に研磨される。形状は、12・13は非常に酷似しており、14は縦に長い。彫刻刀の平刀のような使用方法が想像される。15・16は磨製石鏃赤・緑、17はその素材剥片赤である。



第6図 五ヶ村遺跡 1号竪穴住居跡出土遺物（1/4・1/2）

磨製石鏃はいずれも紡錘形で、比較的分厚い。18は角柱状の砥石である。19・20は敲石である。19は全面に、20は両端に敲打痕がみられる。21は打製石斧で、頭部を欠損する。刃部と側縁の稜は使用によるためか摩滅している。

図示資料以外に、6.0cm×5.7cm×4.0cm角のチャート原石が1点、磨製石鏃の素材剥片緑が数点出土している。原石には、礫面表面に数発の小さな剥離とわずかな光沢がみられ、粗砥石として利用された可能性も考えられる。色は黒色系。

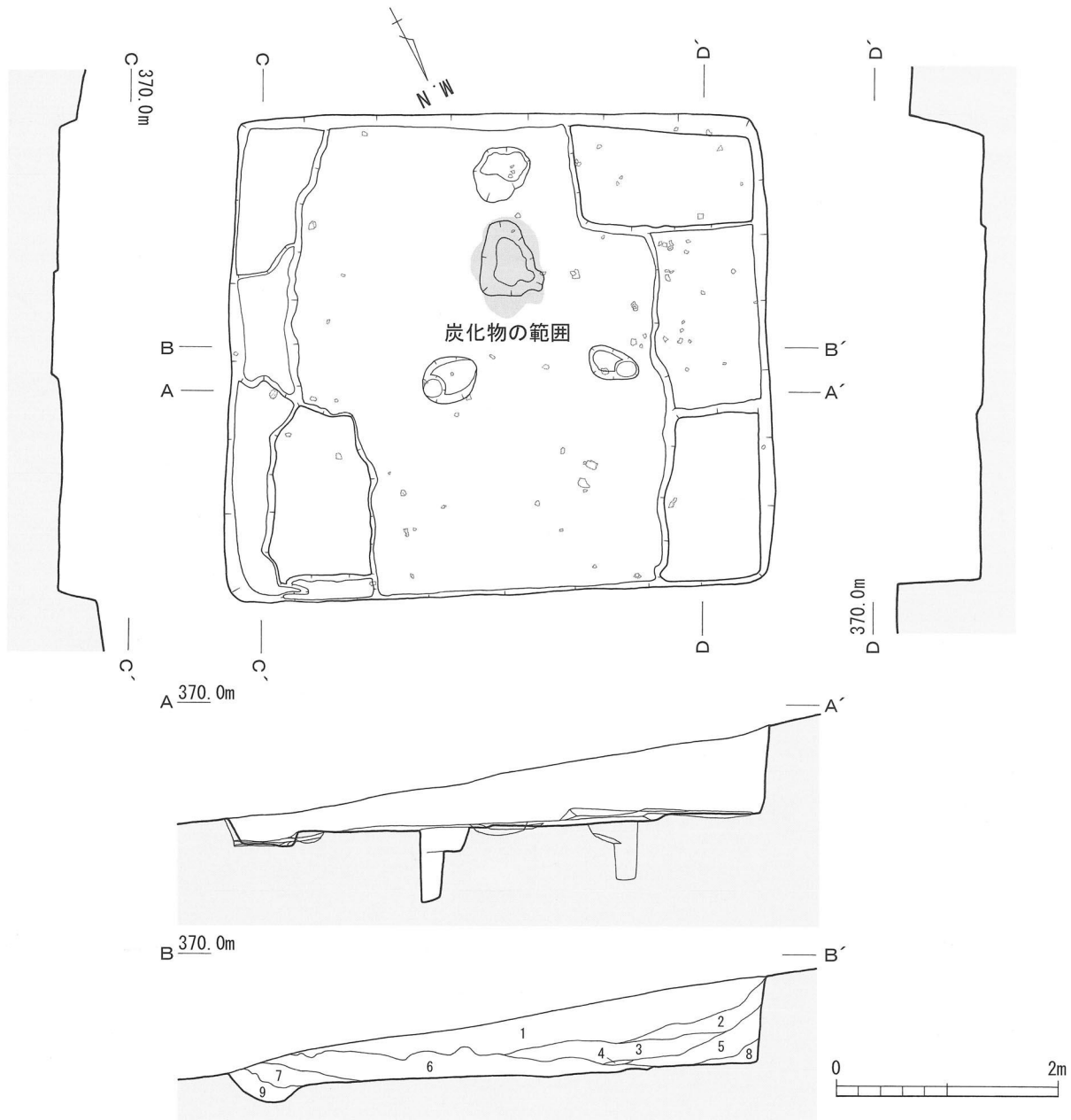
2号竪穴住居跡（SA2）

■遺構（第7図）…1号竪穴住居跡の約5m南に位置する。主軸方位はN-28°-Eを指す。平面の規模は長軸500cm、短軸440cmで、方形プランを呈する。住居は斜面に立地するため西側壁ほど深くなる。西側壁際にL字状を呈する断面凹形のベッド状遺構を検出した。検出面から一段目の深さは約70cm、一段目と二段目の比高差は約5cm、二段目と中央床面の比高差は約5cmを測る。東側壁際は、中央床面より一段低くなり、その底面は断面凹形を呈する。中央床面と一段目の比高差は約10cm、一段目と二段目の比高差は5cm前後を測る。また、北東コーナー寄りには長軸150cm、短軸90cm前後の島状のベッド状遺構が見られる。支柱穴は中央の2本で、それぞれ中央寄りにテラスをもつ。規模は長軸約50cm、短軸30~40cm、床面からの深さ55~65cmを測る。柱間は180cmである。床面南側中央部に炉跡が推定できる。不整形のピットが2基並び、その内中央寄りのピットは炭化物を含む黒色土を覆土としている。規模は中央寄りのものが長軸70cm、短軸約50cm、床面からの深さ5cm、壁寄りのものが直径約50cm、床面からの深さ10cmを測る。遺物は、西側ベッド状遺構中央部に集中し、中央より東側では床面近く、西側では20~30cm程浮いた状態で出土した。

■遺物（第8図-22~33）…22~23は甕の口縁部であり、甕C類である。24は壺の口縁部である。24は、壺B類の短頸壺であり、内外面に丁寧なナデを施している。26は、壺A類の二重口縁壺であり、二次口縁部には櫛描波状文が施されている。25は碗の口縁部であり、僅かに内傾しながら立ち上がるタイプである。27は胴部片である。2条の横突帯を結ぶ縦突帯、いわゆる「工字突帯」が確認でき、甕B1類と考えられる。28は、小礫を多く含む胎土状況などにより、甕C類の底部であると考えられる。

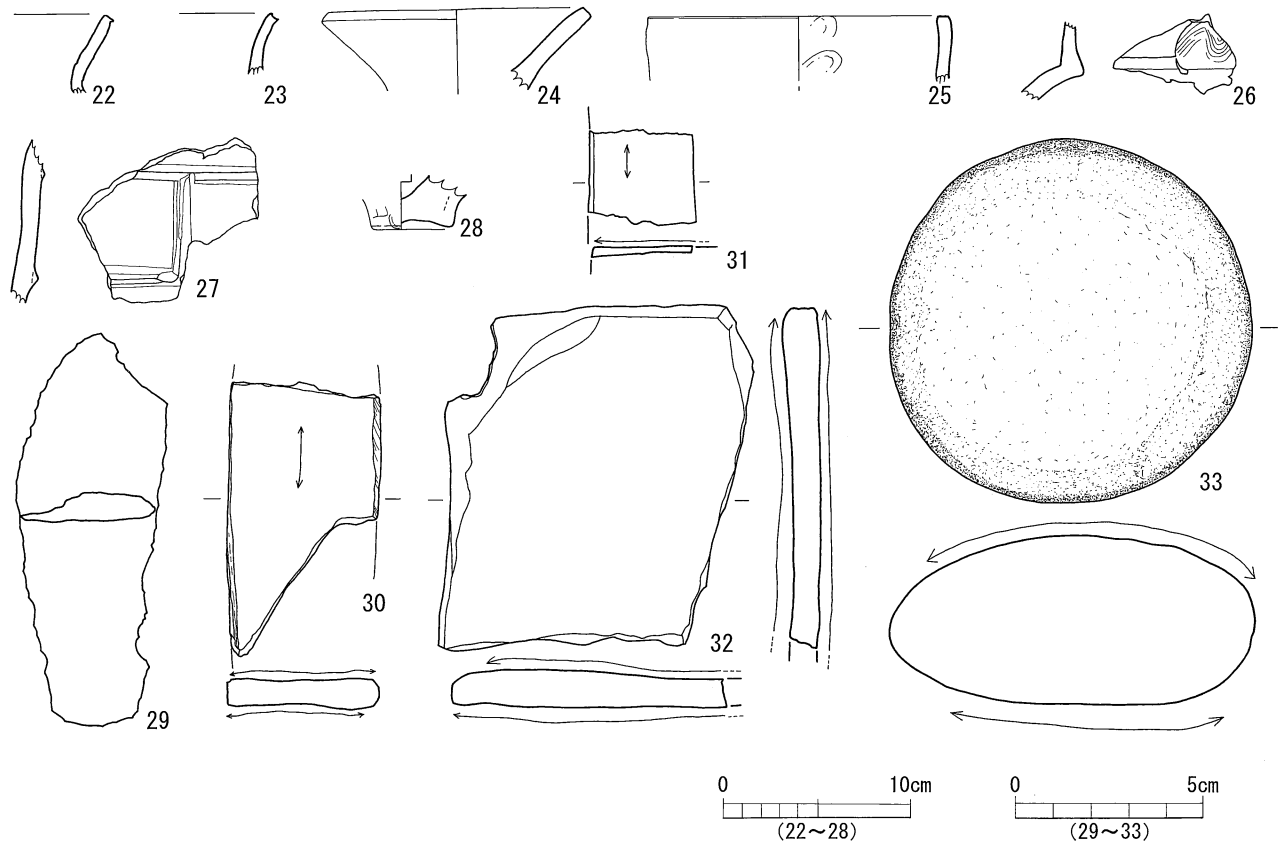
石器の出土量は、他住居に比較して少ない。29は磨製石鏃黒の素材剥片である。30~32は砥石である。30・32はともに板状の砥石であり、31も同様、板状の砥石であったと推定される。32の砥面には鉄錆と推測される黄燈褐色の付着物がみられる。33は磨石で、表裏両面ともに磨面が残される。

図示資料以外に、磨製石鏃の素材剥片緑やチャート製の二次加工ある剥片などが出土している。



- 1 暗褐色 (10YR3/3) ~非粘質土。しまりなし。1 mm程の黄褐色 (10YR5/8) 粘質土をわずかに混入。
- 2 にぶい黄褐色 (10YR4/3) ~弱粘質土。しまり若干あり。3 mm程の炭化物粒及び黄褐色 (10YR5/8) 粘質土粒をわずかに混入。
- 3 暗褐色 (10YR3/2) ~非粘質土。しまりが弱い。5 ~ 10mmの炭化物粒をまばらに、3 mm程の黄褐色 (10YR5/8) 粘質土粒をわずかに混入。
- 4 暗褐色 (10YR3/3) ~非粘質土。しまり若干あり。7 cm程の炭化物ブロック及び5 mm程の炭化物を混入。
- 5 にぶい黄褐色 (10YR4/3) ~弱粘質土。しまり若干あり。5 mm程の炭化物粒及び2 mm程の黄褐色 (10YR5/8) 粘質土粒をわずかに混入。
- 6 にぶい黄褐色 (10YR4/3) ~弱粘質土。しまり若干あり。1 ~ 7 mmの黄褐色 (10YR5/8) 粘質土粒をまばらに混入。
- 7 暗褐色 (10YR3/3) ~非粘質土。しまり若干あり。2 mmの炭化物粒を極わずかに混入。
- 8 にぶい黄褐色 (10YR4/3) ~弱粘質土。しまり若干あり。1 ~ 3 mmの黄褐色 (10YR5/8) 粘質土粒を混入。
- 9 暗褐色 (10YR3/3) ~非粘質土+にぶい黄褐色 (10YR4/3) 弱粘質土~しまり弱い。混入物なし。

第7図 五ヶ村遺跡 2号竪穴住居跡図 (1/60)



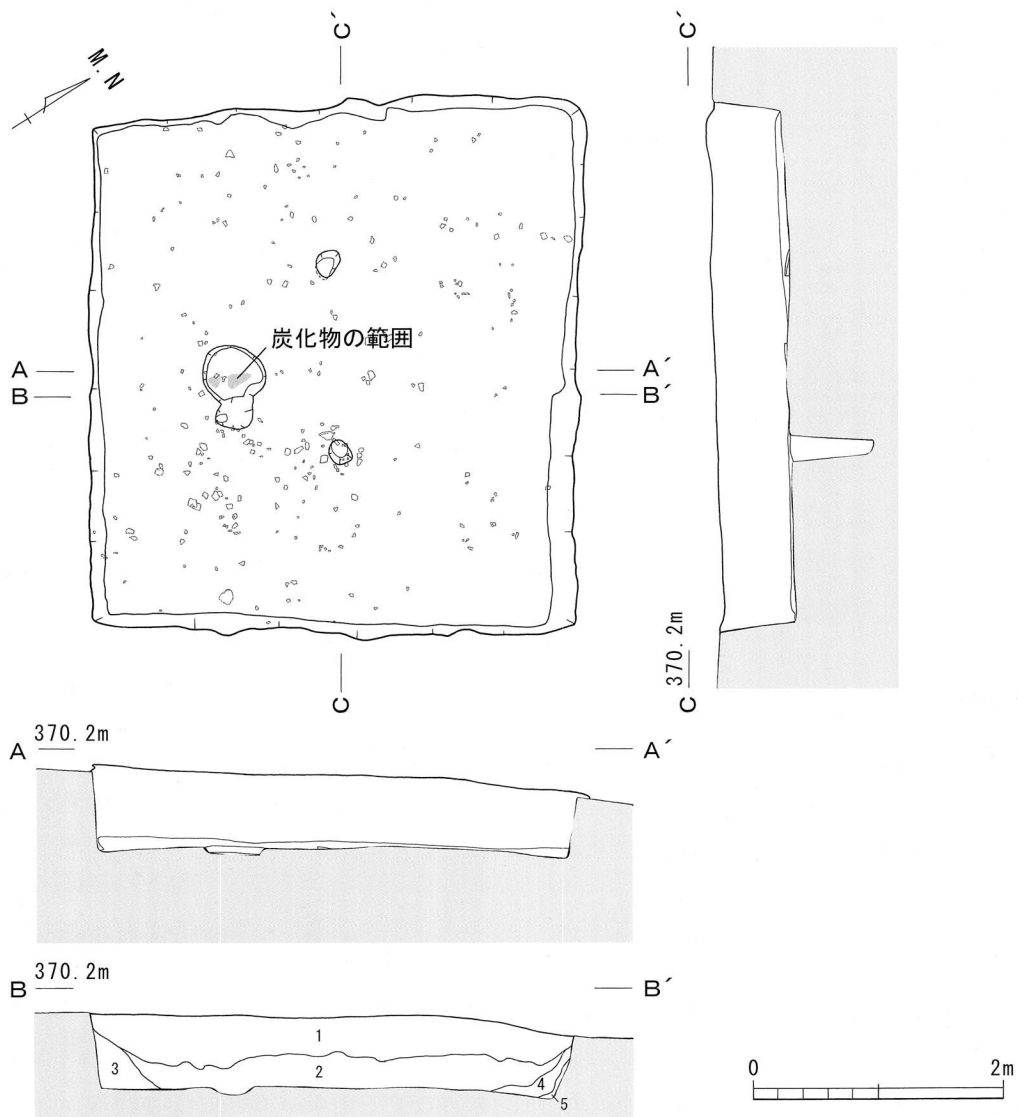
第8図 五ヶ村遺跡 2号竪穴住居跡出土遺物 (1/4・1/2)

3号竪穴住居跡 (S A 3)

■遺構 (第9図) …調査区南側に3～5号の竪穴住居跡が並んで検出されている。3号竪穴住居跡はその一番西端に位置する。主軸方位はN-32° -Eを指す。平面の規模は長軸430cm, 短軸395cmで, 方形プランを呈する。床面の検出面からの深さは55cmを測る。支柱穴は中央の2本で, 径が20cm, 床面からの深さ70cm, 柱間は150cmを測る。支柱穴と南西壁の間に, 平面形鍵穴状を呈した連結する大小2つのピットを検出した。大きい北西側ピットは径52cm, 深さ8cmの皿状を呈し, 小さい南東側ピットは径30cm, 深さ22cmを測る。北西側ピットには炭化物の堆積が見られ, 炉跡の可能性が考えられる。遺物の集中は鍵穴形ピット周辺に見られるが, ほとんどが床面から10～20cm程浮いた状態で出土した。

■遺物 (第10図34～49) …34～41は甕の口縁部である。34は口唇部と口縁部直下の2条の突帯を, 35は口縁部直下に2条の突帯をもつ甕E類の口縁部片である。36・37は, 口縁が斜方向に折れて外反する甕B類の口縁部片である。36は口縁部下に突帯が1条確認できる。38は, 断面形舌状を呈する厚手の甕の口縁部である。黒色角閃石を多く含む胎土は甕A・B類に類似しているが, 口縁部形態やナデ調整の方法は甕D類にも類似している。40・41は鋤先状口縁をもつ甕D類の口縁部片である。42は, 壺A類であり, 二次口縁部には外面全面に細かい櫛描波状文が施されている。43～45は甕の胴部片である。43・44は, ミミズ腫れ状の貼付の工字突帯が確認でき, 甕B2類である。45は, 櫛描文よる工字文が確認でき, 甕B3類である。46は, 縦位刻文をもつ1条の貼付突帯が確認でき, 甕E類であると考えられる。47は壺A類の胴部片である。3条の貼付突帯の下に, 横位の爪形を入れた円形浮文が確認できる。48は底部である。下部が張り出す上底になっているが, 黒色角閃石を多く含む胎土などから甕A・B類の底部片であると考えられる。

49は角礫のチャート原石である。礫の稜は全体によく摩滅しているものの, 図上側の割れ口の稜のみ

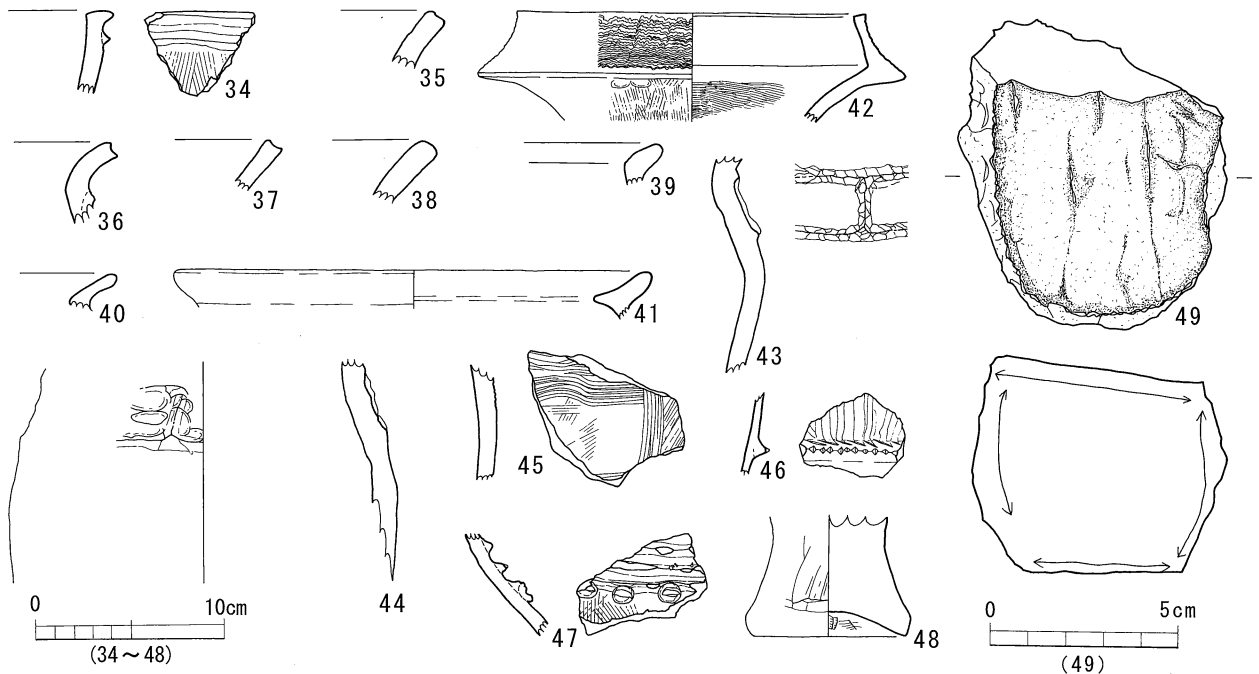


- 1 暗褐色 (10YR3/4) ~弱粘質土。硬くしまる。
- 2 暗褐色 (10YR3/4) ~弱粘質土。しまりなし。0.1~3cmの褐色 (10YR4/4) 弱粘質土ブロックを混入。
- 3 褐色 (10YR4/6) ~弱粘質土。しまりなし。1~3mmの明黄褐色 (10YR6/8) 土を混入。
- 4 褐色 (10YR4/6) ~弱粘質土。しまりあり。
- 5 褐色 (10YR4/6) ~弱粘質土。しまりなし。

第9図 五ヶ村遺跡 3号竪穴住居跡図 (1/60)

摩滅が認められない。図上側は新しく割れたものと推定される。色は赤色系。

図示資料以外に、打製石鏃・石匙・スクレイパー・二次加工ある剥片などの剥片石器、打製石斧などが多数出土している。これらの中には、異形局部磨製石鏃なども含まれることから、縄文時代の石器群が一定量混入していると判断される。剥片石器の石材はチャートで占められ、少量、黒色黒曜石・水晶製の打製石鏃がみられる。

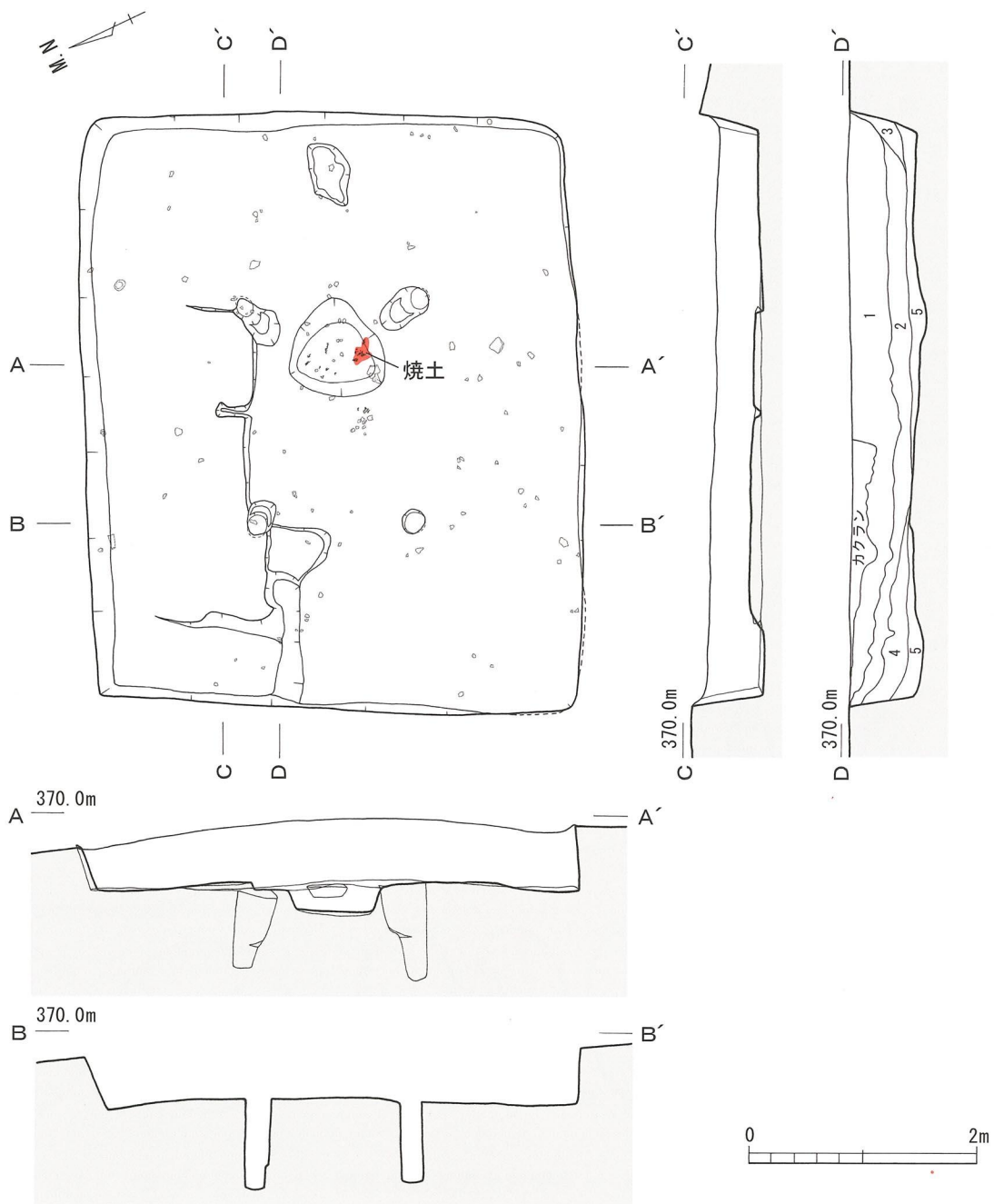


第10図 五ヶ村遺跡 3号竪穴住居跡出土遺物 (1/4・1/2)

4号竪穴住居跡

■遺構 (第11図) … 3号竪穴住居跡の約2.5m南東に位置する。主軸方位はN—65°—Wを指す。平面の規模は長軸530cm、短軸440cmで、長方形プランを呈する。床面の検出面からの深さは55cmを測る。北東側壁際の中央から西側に長さ280cm、幅120cm、床面との比高差が10cm前後のベッド状遺構がある。ベッド状遺構の南辺、東から3分の1程の位置に長さ30cm、幅10cm程の切れ込みが見られる。支柱穴は中央の4本で、柱穴の平面形は長軸30~50cm、短軸20~25cmの楕円形や径が20cmの円形を呈し、床面からの深さ70~90cmを測る。柱間は南北140~150cm、東西200cmを測る。東側支柱穴2本は、掘形が中心に向かって若干内傾し、それぞれ内側にテラスをもつ。西側の支柱穴間に一辺が90cm程の隅丸三角形の土坑があり、埋土中には炭化物や焼土が含まれている。土坑の深さは約25cmである。南東側壁際中央部には長軸60cm、短軸35cm、深さ10cmのピットが確認できる。遺物は散在し、床直上及び床面から20cmの間に出土した。

■遺物 (第12図—50~62) … 50は小型甕の口縁部である。口縁は逆L字状であり、口縁部下に3条の貼付突帯をもつ。小型であるが、器形や胎土などは甕A類の粗製甕に類似する。51は壺の口縁部である。口唇部は棒状工具によって2段の刺突文をもち、口縁内部には円形浮文をもつ。52は甕の胴部である。細片であるが、工字突帯の一部が確認でき、甕A・B類の胴部であると考えられる。53は高坏の脚裾部である。櫛描きによる縦と横方向の細線文が確認できる。文様の特徴から凹線文土器の類と考えられる。

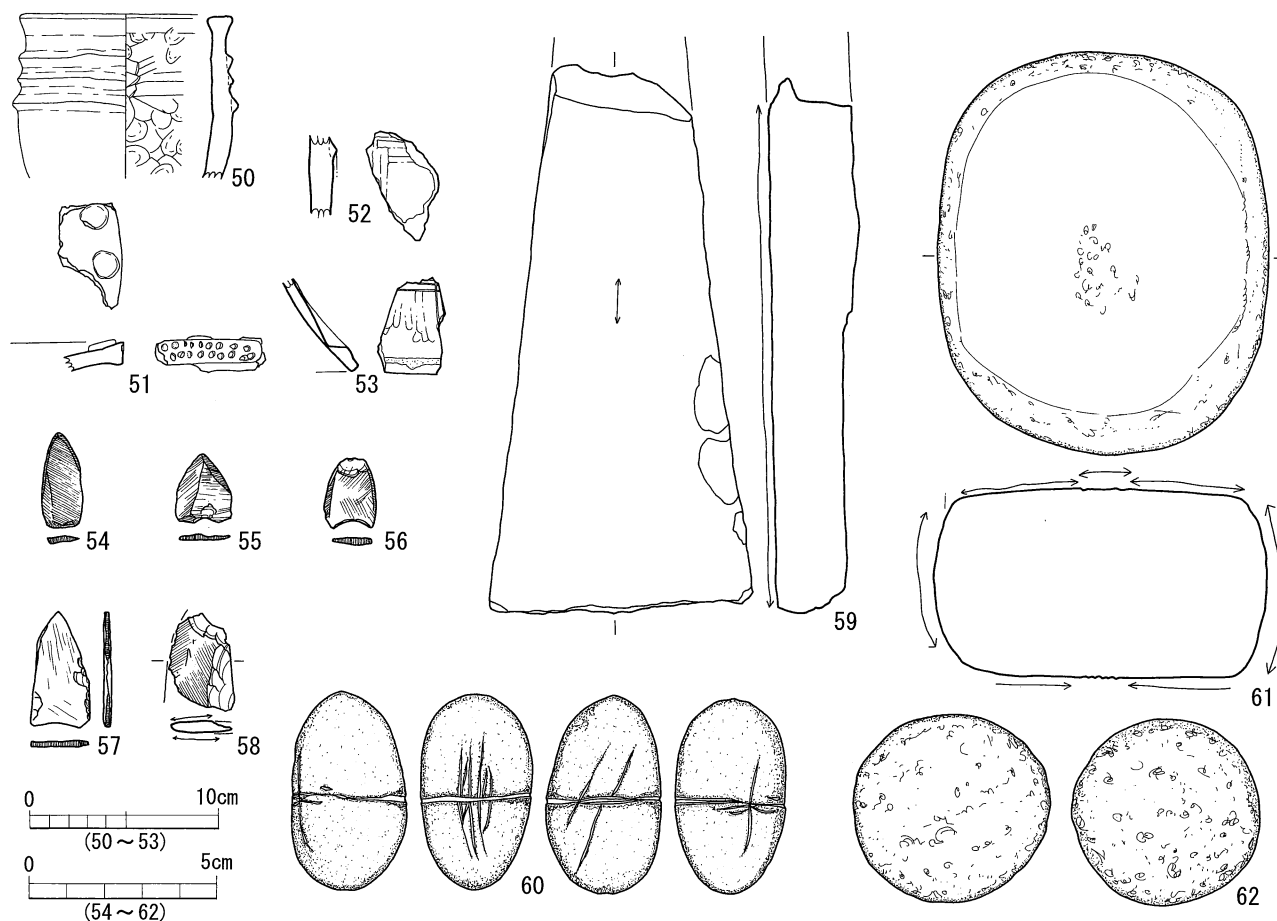


- 1 にぶい黄褐色 (10YR4/3) ~弱粘質土。しまり若干あり。2mm程の炭化物粒をまばらに混入。
- 2 灰黄褐色 (10YR4/2) ~粘質土。しまり若干あり。5~10mmの炭化物粒をわずかに混入。
- 3 黄褐色 (10YR5/6) ~粘質土。しまりあり。
- 4 黒褐色 (10YR3/2) ~非粘質土。しまり弱い。10mmの黄褐色土 (10YR5/6) 粘質土粒及び1mm程の炭化物粒をまばらに混入。
- 5 にぶい黄褐色 (10YR5/4) ~粘質土。しまり若干あり。

第11図 五ヶ村遺跡 4号竪穴住居跡図 (1/60)

54～56は磨製石鏃黒，57・58はその未製品黒である。黒以外の色はみられない。54は砲弾形，55・56は五角形に近い寸詰まった形をしている。各磨製石鏃の側縁は，先端近くまで平坦面を持つことから，未製品の可能性もある。59は板状の砥石であり，磨痕は表面のみにみられる。60は線刻のある礫である。礫の長軸方向に沿って複数の線刻があり，それに重なって礫中央の最大厚のあたりを線刻が一周する。礫端部にはとくに線刻などはみられない。61は磨石，62は敲石である。61の側面は全周にわたって細かな敲打痕に覆われ，すべらかな面をなしている。石器正面・裏面は光沢のある磨痕があり，正面中央部には磨痕を切って敲打痕がみられる。62は球状で，全面に敲打痕がみられる。

図示資料以外にチャート製の打製石鏃，同未製品，石錐，石核などが出土している。剥片石器の石材はチャートで占められ，剥片に少量の黒色黒曜石がみられる。



第12図 五ヶ村遺跡 4号竪穴住居跡出土遺物（1/4・1/2）

5号竪穴住居跡

■遺構（第13図）…4号竪穴住居跡の約5m東南東に位置する。主軸方位はN-10°-Eを指す。平面の規模は長軸640cm，短軸490cmで，長方形プランを呈する。南から北に傾斜する地形に立地するため，住居の壁は南側ほど深くなる。床面の検出面からの深さは20～90cmを測る。主柱穴は4本で，柱穴の平面形は長軸45～60cm，短軸30cmの楕円形や径が約20cmの円形を呈し，床面からの深さ85～100cmを測る。柱間は東西175cm，南北210cmを測る。南東側の柱穴は深さ45cmの柱穴と重なりが見られるため，建て替えあるいは主柱穴の補強材としての機能が考えられる。南側主柱穴間に南北両端がピット状に落ち込む

土坑を検出した。土坑は長軸128cm，短軸68cmで，深さは北側ピット65cm，南側ピット40cmを測る。支柱穴に囲まれた範囲の床面には，炭化材と焼土が出土しており，炭化材の向きにやや求心性が認められる。炭化材の年代測定と樹種同定を行ったが，結果については後述する。遺物は，中央より西側に多く分布し，特に北西側支柱穴周辺に集中する。出土レベルは，床直上のものはまばらで，多くは床面から20～40cm程浮いた状態で出土した。

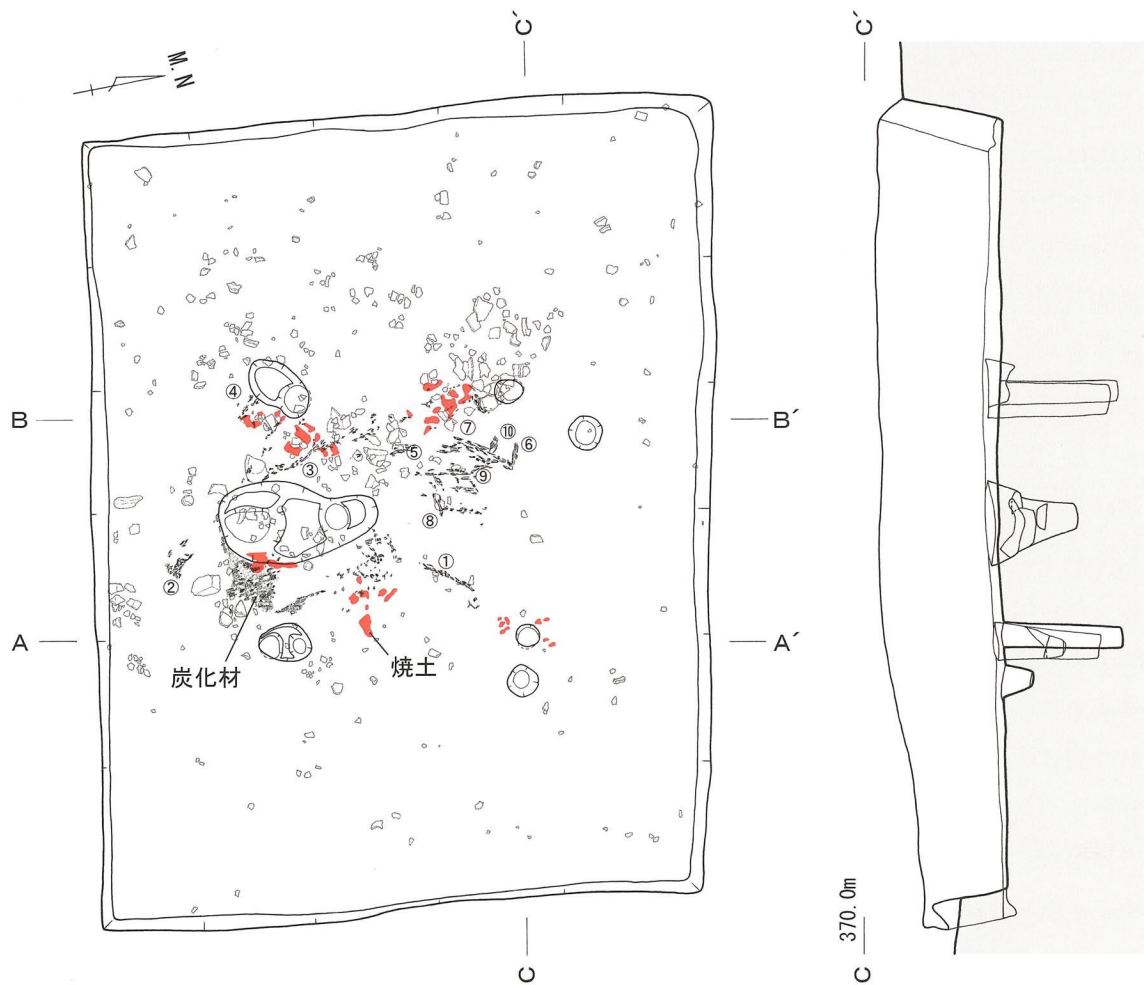
■遺物（第14図～第16図－63～117）…63～95は甕である。63は甕B 4類である。64は，頸部附近に櫛描波状文をもち，甕B 3類に該当すると思われるが，口唇部を平坦状に整える甕B類に比して舌状に尖らせ，甕C類の特徴を併せもつ。65～73は甕C類（C 1類…66・67・68・72・73 C 2類…63・64・65・69・70・71）である。外面調整は，72・73が平行タタキを，その他がハケ目とナデを施している。74～78は甕A類の口縁部片である。74～76には突帯が確認できる。72は，甕A類に分類したが，口縁部が逆L字から斜めに伸びてきており，甕B類との中間形態ともいえる。79は甕D類である。このタイプはSA 5からはこの1点のみである。埋土中出土であり，他の場所からの流入物である可能性がある。80～86は甕B類である。80～84は口縁部片であり，80はミズ腫れ状の工字突帯，83・84は櫛描き波状文が確認できる。81・82は無文である。85・86は胴部片であり，頸部付近に櫛描き波状文を施している。87～91は甕E類である。口縁部下に1～2条の縦位の刻目をもつ貼付突帯をもつ。92・93は甕C類である。外面にハケ目による調整を行っている。

94～100は壺である。94・95は短頸壺の一種であると考えられる。94の口縁部は，指で摘み上げたように小さく短く外反する。95の口縁部は，頸部でわずかながら緩やかに外反する。94・95は，胎土にいずれも小礫を多く含み，甕C類との関連が想定される。96は直口壺の口縁部である。97～100は二重口縁壺である。97は，二次口縁部に櫛描き波状文を，頸部に格子状の刻目をもつ突帯をもつ。98・100の二次口縁部には1～2条の櫛描き波状文をもつが，99の二次口縁部は無文である。

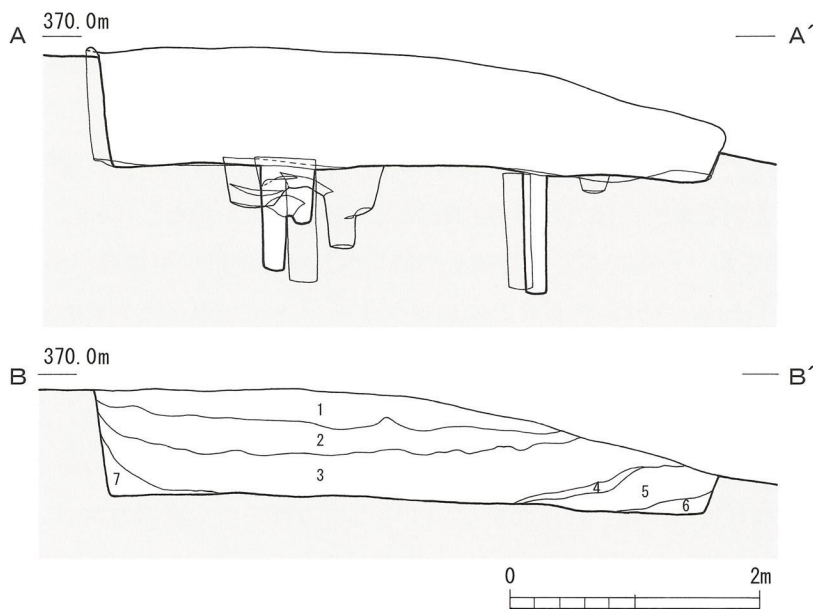
101～102は鉢である。101・102は，ともに内湾しながら立ち上がる口縁部をもつ。器面調整は，101がナデ，102がミガキである。102は，尖底であり，108と器形・調整の点で類似している。

103～108は底部を一括して扱う。103～105は，わずかに平底を残す尖底であり，胎土に黒色透明角閃石粒を多く含み，器面調整に丁寧なナデを施す。甕A・B類の底部であると考えられる。106は，103～105同様わずかに平底を残す尖底であるが，小礫を多く含む胎土や薄手の器壁などに大きな違いがある。おそらく甕C類の底部であると考えられる。107は脚台状の平底を呈する。内面に木口によるナデ調整が確認できる。108は鉢の底部である。102同様，内湾しながら立ち上がる器形，内外面にミガキを施し，わずかに平底を残す尖底をもつ。

109は棒状礫の端部に敲打痕のある敲石である。110は磨石である。石器正面・裏面は光沢のある磨痕があり，側面は全周にわたって細かな敲打痕に覆われ，面をなしている。石器正面・裏面の剥離は，側面を覆う敲打に伴うものであろう。111・112は磨製石鏃赤，113は磨製石鏃黒，114は素材剥片黒である。磨製石鏃は砲弾形であり，111・113とで基部形態が異なる。111の先端は使用の結果か，欠損する。115は角礫のチャート原石である。色は白色系。

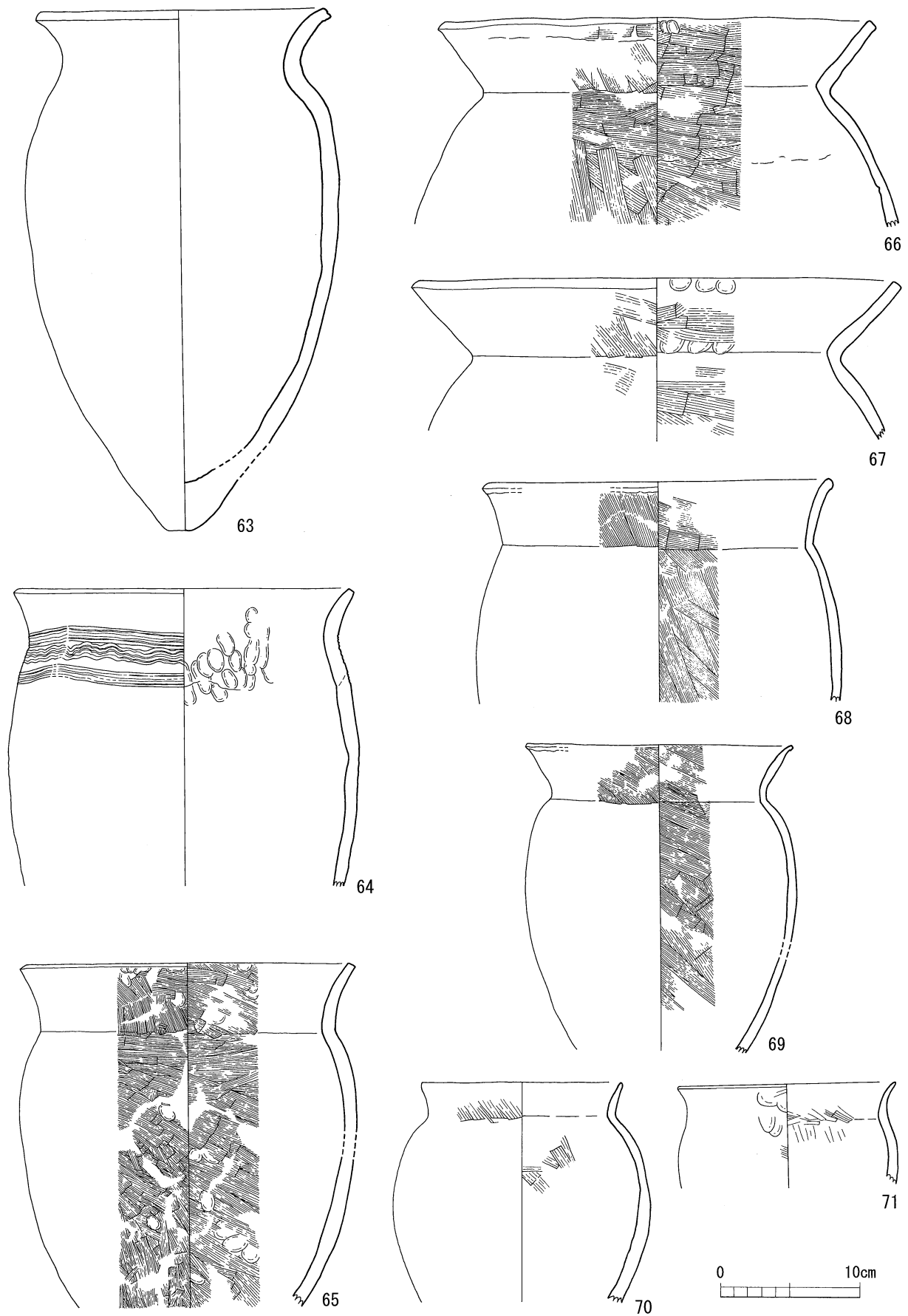


※①～⑩は自然科学分析資料No1～10

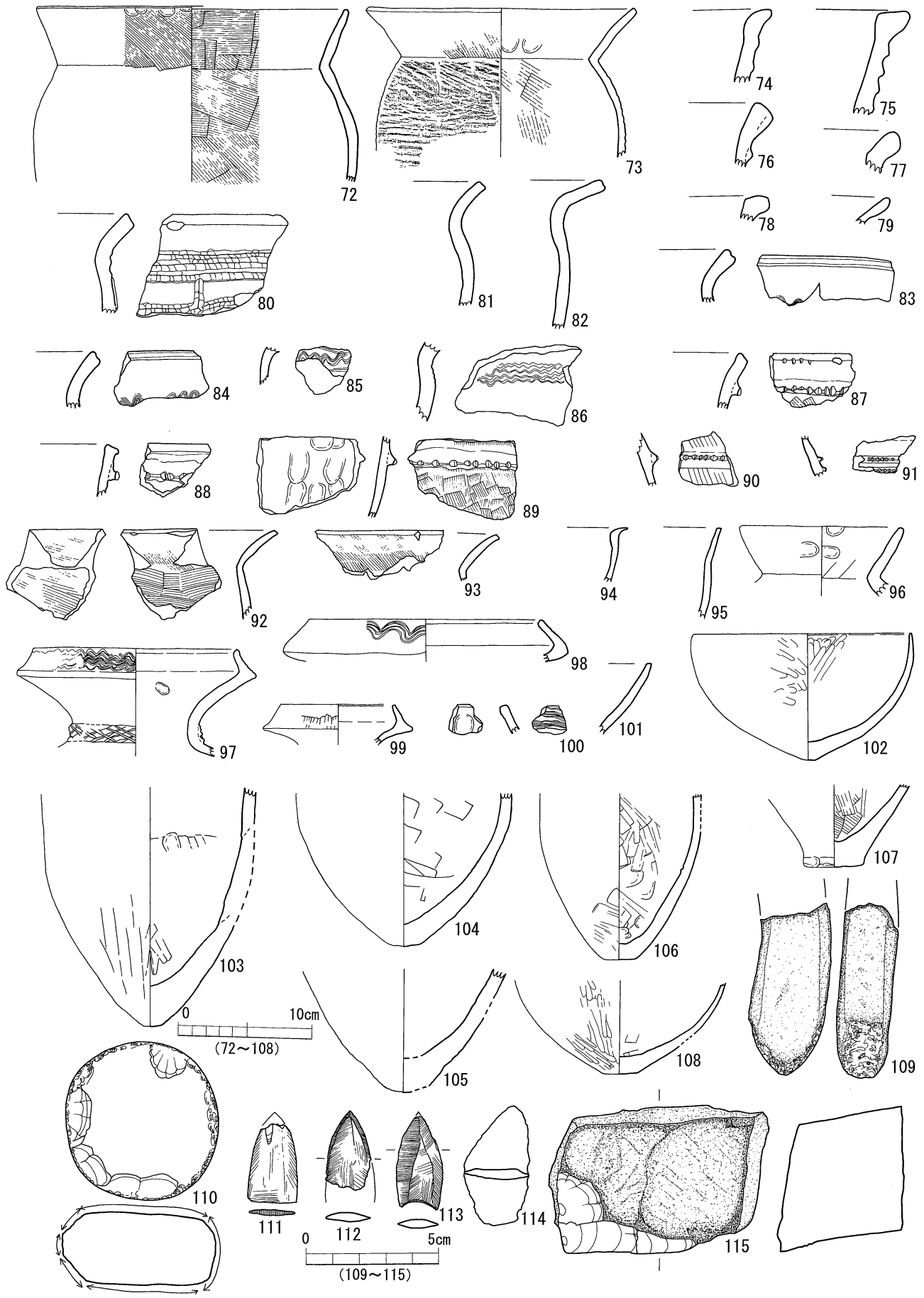


- 1 にぶい黄褐色 (10YR4/3)
～非粘質土。しまりあり。
- 2 褐色 (10YR4/4)
～弱粘質土。しまり若干あり。
1～3mmの炭化物粒をまばらに混入。
- 3 褐色 (10YR4/4)
～弱粘質土。しまり若干あり。
- 4 にぶい黄褐色 (10YR4/3)
～5cm程の木炭と明褐色 (7.5YR 5/8)の焼土ブロックをまばらに混入。
- 5 にぶい黄褐色 (10YR4/3)
～非粘質土。しまり若干あり。
- 6 灰黄褐色 (10YR4/2)
～弱粘質土。しまり弱い。
- 7 暗褐色 (10YR3/3)
～粘質土。しまり弱い。

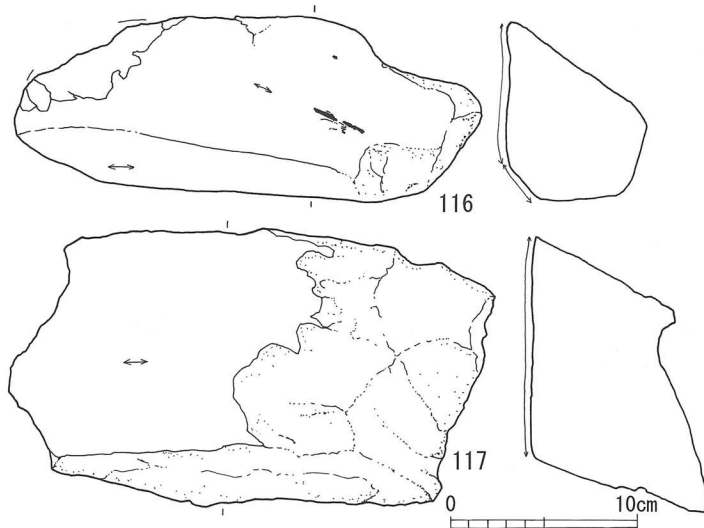
第13図 五ヶ村遺跡 5号竪穴住居跡図 (1/60)



第14図 五ヶ村遺跡 5号竪穴住居跡出土遺物① (1/4)



第15図 五ヶ村遺跡 5号竪穴住居跡出土遺物② (1/4・1/2)



116・117は砥石である。116はきめの細かい砂岩の塊石が利用され、顕著な砥面が2面残される。砥面には鉄錆と推測される褐色の付着物が部分的に残される。付着物には縦方向のスジが入っており、植物質のものが錆に取り込まれて付着している可能性も考えられる。117は116に比べやや粗質の、砂岩の塊石が利用される。顕著な砥面が1面残される。図示資料以外に、チャート製打製石鏃・二次加工ある剥片、姫島産黒曜石製の剥片、砂岩製の敲打痕をあわせもつ磨石などが出土している。

第16図 五ヶ村遺跡 5号竪穴住居跡出土遺物③ (1/4)

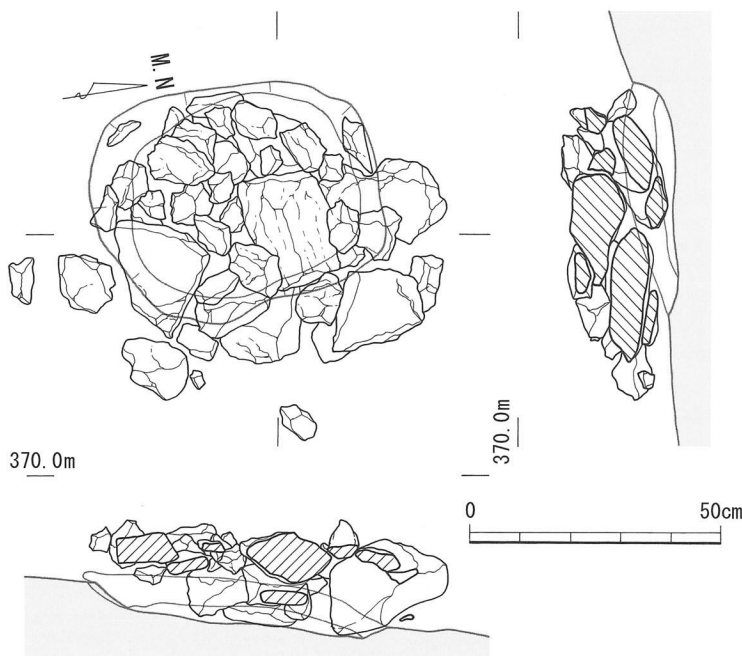
2. 包含層等検出遺構と出土遺物 (第17図～第23図)

■集石状遺構 (S I 1) (第17図)

その他、同じ第V層上面より時期を比定できない集石状遺構を1基確認した。

調査区の南西寄り、3号竪穴住居跡の北東約1mの緩斜面に位置する。竪穴住居跡の検出面と同じ第V—2層上面で検出した。遺構は15～25cmの礫7個、5～10cmの角礫38個が、長軸60cm・短軸45cmの範囲に集中するものであり、傾斜の高い位置ほど小礫が多く分布する。礫の下部には長軸50cm・短軸40cm、検出面からの深さ15cmの不整形土坑が検出された。10cm以下の礫は約半分に赤化が認められるが、15cm以上の礫はほとんど赤化していない。小礫の赤化は破損面に及んでいるものも多く、被熱により破損した後も繰り返し使用されたものと思われる。

大きい礫は、扁平気味でほぼ同じ大きさを呈しており、掘り窪めた土坑に配石したものとも考えられるが、石の配し方に規則性を欠く。縄文時代の集石遺構に似ているが、検出面が弥生時代中心の包含層であり、集石遺構とは考えにくく、ここでは「集石状遺構」と呼称することとした。



第17図 五ヶ村遺跡 1号集石状遺構図 (1/15)

■遺物（第18図～第23図－118～301）

遺構以外の基本層序の第V層を中心とする包含層からは、縄文時代から中世にかけて幅広い時代の遺物が出土した。出土した遺物は、主に縄文土器・弥生土器・陶磁器・石器である。簡単ではあるが出土した遺物の特徴を述べることにする。

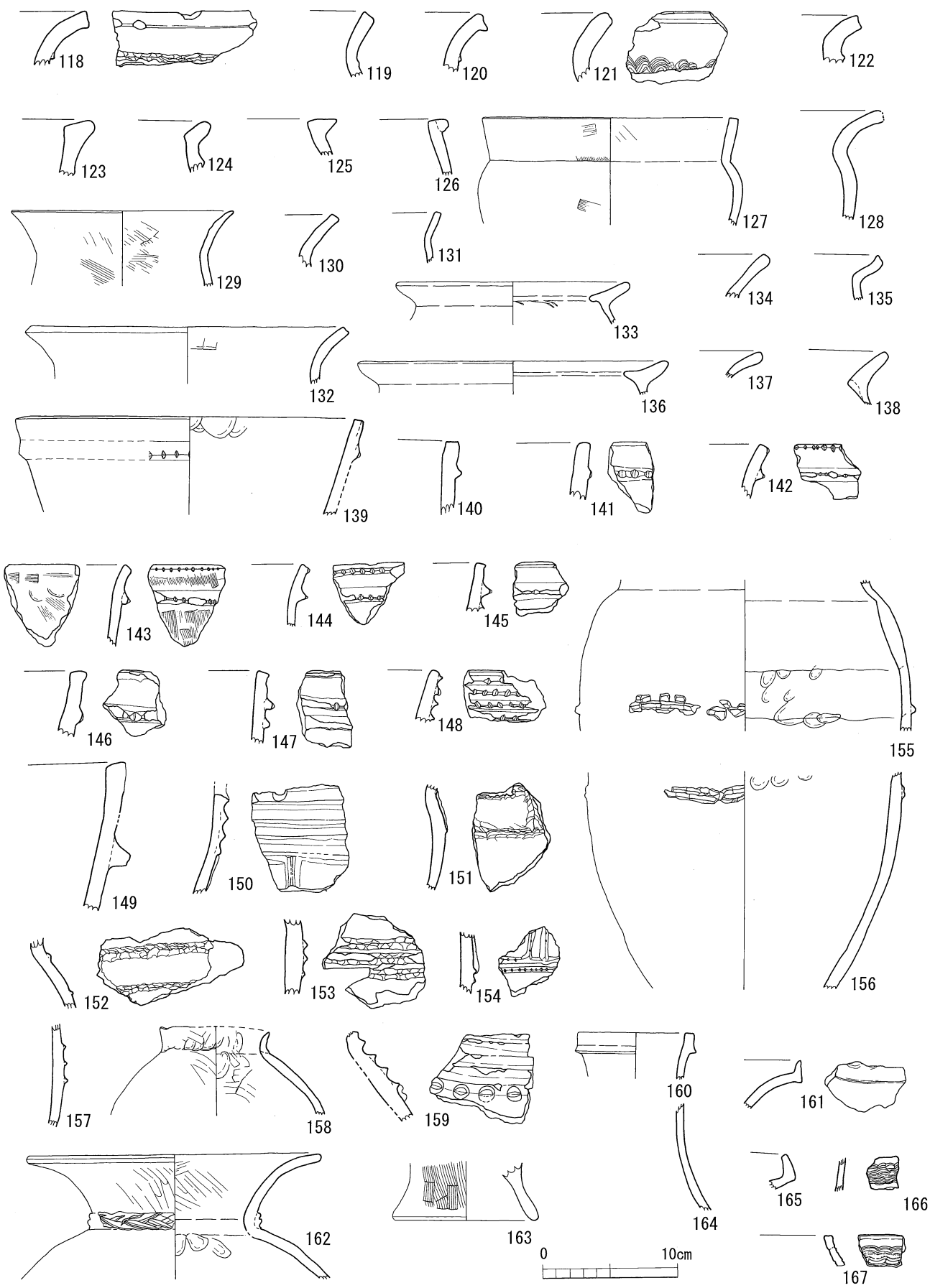
①弥生土器（第18図・第19図－118～186）

118～149は甕の口縁部である。123は、逆L字状の口縁をもち、甕A類である。118と119は口縁部下に突帯をもつ。118～126・128は甕B類である。122～124はミミズ腫れ状突帯を、125は櫛描波状文を、126は貼付突帯をもつ。128は、通常櫛描き文や突帯文を施すべき口縁部下に施文も無いことから、無文だと考えられる。127・129～132は甕C類である。127・132は比較的大型であり、129～131は比較的小型の甕である。いずれも胎土に小礫を含み、器面調整にハケ目を施す。133～138は甕D類である。133～136は口縁部上面が凹面状に窪む甕D 1類であり、137～138は口縁部上面がわずかに凸面状に膨らむ甕D 2類である。139～148は甕E類である。139～141は、口唇部に突帯はもたず口縁部下に1条の縦位の刻目突帯のみを施す。142は、口唇部に突帯はもたない縦位の刻目と口縁部下に1条の縦位の刻目突帯を施す。143・144は、若干突帯状に肥厚させた口唇部に縦位の刻目と口縁部下に1条の縦位の刻目突帯を施す。145～147は、若干突帯状に肥厚させた口唇部と口縁部下に1～2条の縦位の刻目突帯を施す。148は、口縁部直下に4条以上の縦位の刻目突帯を施す。149は、わずかに内湾しながらちあがる口縁をもち、口縁部下に台形の突帯を1条施す。甕E類と類似しているが、大きさや器壁の厚み、突帯形状などから、同類とは考えにくい。

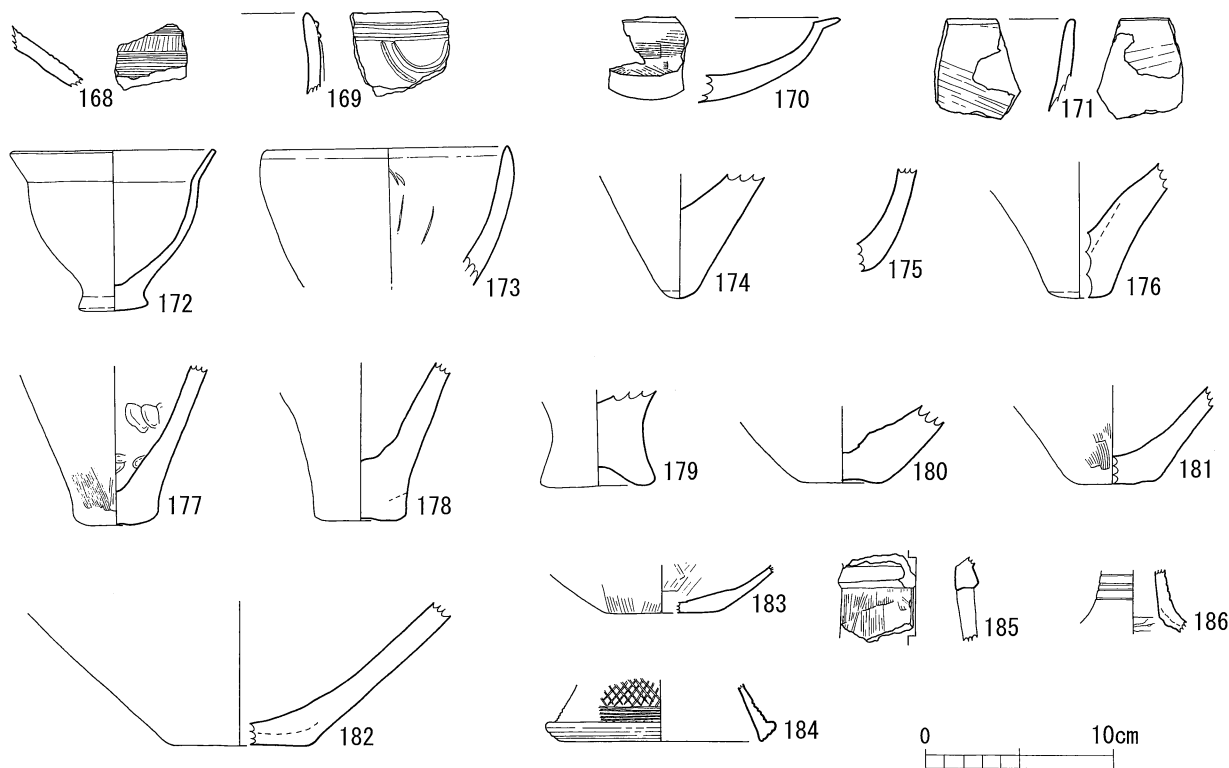
150～157は甕の胴部片である。150・154は、工字突帯をもち、甕A類か甕B類である。154は、工字突帯の縦位突帯が2条であり、その上突帯に刻目をもつ。151～153は甕B類である。151～153はミミズ腫れ状突帯をもつ。そのうち151はミミズ腫れ状の工字突帯を施している。155・156は、同一個体であり、胴部にミミズ腫れ状突帯に似た豆粒状の突帯が確認できる。甕A類か甕B類の類である。157は甕E類と考えられるが、細片であるため壺の可能性もある。163は甕D類の底部である。外面は丁寧な斜方向のハケ目を、内面は丁寧な横ナデを施している。

158～162・164～168は壺の一部である。158は短頸壺の口縁部～胴部片である。別造りした口縁部を胴部に付着させるために指でつまみ上げている痕跡が明瞭に残る。159は壺A類の頸部～肩部である。4条の貼付突帯の下に、横位の爪形を入れた円形浮文が確認できる。161は、一見ラッパ状に開く口縁部にも見えるが、よく観察すると口唇部だと考えられていた部分には折れたような痕跡がある。おそらく二重口縁壺である。頸部には羽状の刻目をもつ突帯が貼り付けられている。160・164は長頸壺の口縁部片と頸部片であり、同一個体と考えられる。外面全面に丹塗りされており、口縁部下には1条の突帯が貼り付けられている。161・165～167は壺A類の口縁部片である。166・167には二次口縁部に櫛描きの波状文を施す。165の二次口縁部には櫛描き文が確認できず、無文である。168は横走する多条の凹線文が施された壺の肩部片である。

169～173は鉢の一部である。いずれも緩やかに内湾しながら立ち上がる口縁をもつ。169の外面には、横走する2条の突帯と半円状にめぐる2条の突帯の組み合わせによって文様が構成されている。170の口縁部は口縁端部付近で短く外反する。172は口縁部が大きく外反する口縁部をもつ小型台付鉢である。



第18図 五ヶ村遺跡 包含層等出土弥生土器① (1/4)



第19図 五ヶ村遺跡 包含層等出土弥生土器② (1/4)

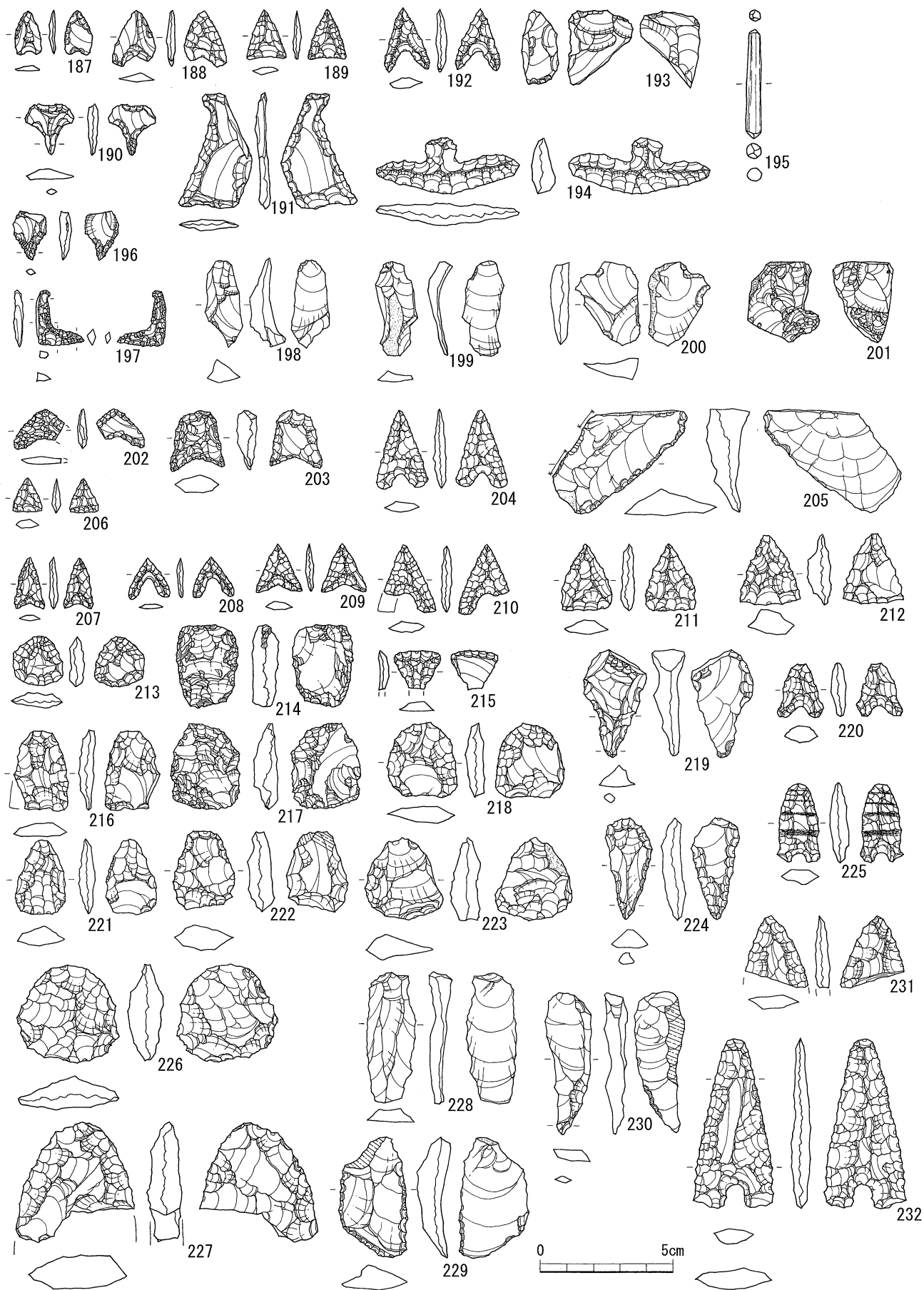
174~179は甕の底部である。174・175は尖底，176~178は径の小さい平底である。いずれもわずかではあるが黒色透明角閃石を含み，甕A・B類の底部である。179は，端部がわずかに張り出す上げ底であり，黒色角閃石を含まない黄褐色系の胎土である。甕D類の底部である。180~183は壺の底部である。180は，小礫を多く含む胎土と外面の不定方向のナデを特徴とし，甕C類に準じる壺の底部と考えられる。181・182は，大きく開く器形，厚手の器壁，外面の丁寧なナデ調整を共通の特徴とする。183は，大きく開く器形，薄手の器壁，外面のハケ目をもつ。

184~186は高杯の脚部である。185の外面両端は透かしの痕跡だと考えられる。184は，裾部であり，上部には細線による横走文と格子文を，下端には凹線文を施している。186は，裾部付近であり，外面には細線による横走文が施されている。

②石器 (第20図・第21図-187~254)

サヌカイト製石器群 187~189は打製石鏃である。187・188は素材剥片の稜を石鏃の稜に取り込んだものである。石器表面の風化具合は比較的新しい。190は石錐である。錐部の断面は菱形，稜の摩耗などは特に認められない。191は異形石器である。右側縁上部は欠損あるいは切断ののち細かな剥離で成形される。

姫島産黒曜石製石器群 192は打製石鏃である。背面右側に素材面がわずかに残され，また基部は深く抉られる。193は石核である。打面は一定しておらず，ある程度連続して不定形剥片を剥離したのち，古い剥離面を打面として新たな剥片剥離がなされる。194は石匙で，全体的に分厚い。



第20図 五ヶ村遺跡 包含層等出土石器① (1/2)

棒状石製品 195は棒状石製品である。石材は、調査中であるが、光沢のある乳白色である。マッチ棒大程の大きさで、側面には面取りが、両端には面的な摩滅が確認できる。一見石筆にもみえる。「擦る」「搔く」といった機能が想定され、土器の施文具・調整具などの用途が考えられる。

黒色黒曜石製石器群 196は石錐で、錐部は断面菱形である。197は異形石器である。全形はL字に近く、内側の整形は細かい。上部は小さく抉られる。右側面は切断により成形されたのち、切断面から押圧剥離によって整形される。198～200は剥片である。いずれも打面のバルブの発達が弱く、パンチを用いた剥離が想定される。打面は198に細かな調整がみられるが、199は単一の剥離面、200は礫面であり、打面調整はあまり頻繁でない。剥片剥離は、縦長剥片の獲得を目的におおむね上下両方向から進行したとみられる。201は石核である。礫面の残存状況から3 cm角程度の原石と推定される。剥片剥離は礫面を打面として、上下両方向から進行している。

水晶製石器群 202・203は打製石鏃で、ともに裏面に素材剥片面が大きく残される。203は厚みを減じきれなかった未製品であり、先端も加撃のためか潰れている。

安山岩製石器 石質はサヌカイトに近いものの、風化により表面が淡黄色であるため、区分した。204は打製石鏃である。

流紋岩製石器 205は削器である。素材剥片裏面は石器正面左側にあたる。右側縁は表裏両面に平坦で細かな剥離が施され、鋭角な刃部となっている。左側縁には微細剥離がみられる。

チャート製石器群 206～212は打製石鏃である。206は平面三角形で、平面長に対しやや厚いか。207は粗い整形ののち、周縁を細かな剥離で整形する。208の抉りは深い。209の両側縁は細かな鋸歯に整形される。210は鋏形鏃で左脚を欠損する。211・212の整形は粗い。平面三角形で、212は表面中央にこぶが残るため未製品の可能性がある。

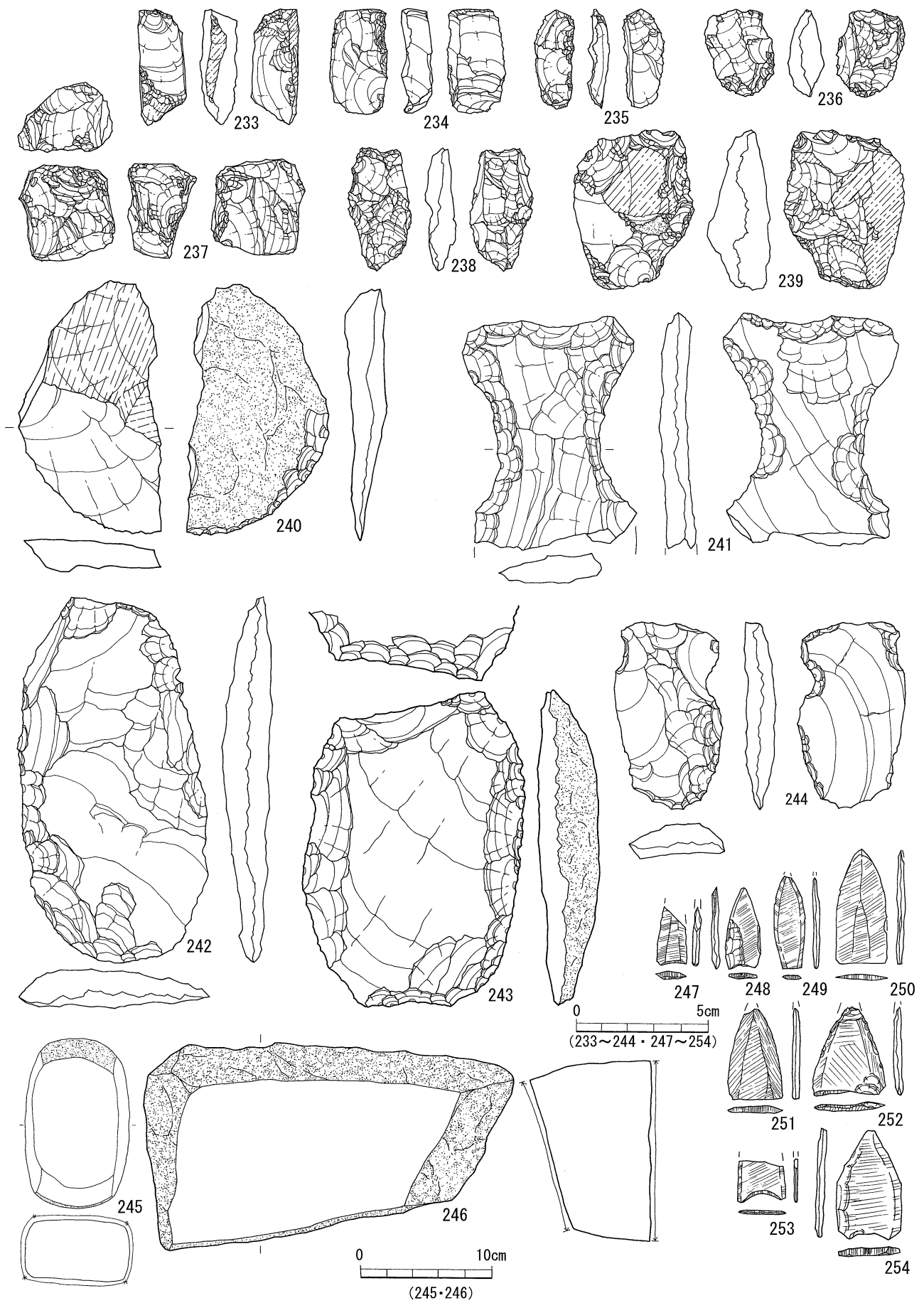
213はスクレイパーで、全周に細かな剥離が施される。214は楔形石器である。左側面は平坦面が残され、他側縁には細かな剥離がみられる。216～218・221・222・226は打製石鏃未製品である。いわゆる楔形石器に相当するものもあるが、それは打製石鏃製作にあたって楔様の整形手法を採用したためであろう。223は打製石鏃未製品と考えられるが、楔様の整形手法は採用していない。226は成形の早い段階で廃棄されたものと考えられる。石核である可能性も残される。

215・219は石錐である。215は錐部を欠損する。219の錐部断面は三角～四角形で、先端が丸く摩耗する。224は石錐あるいはその未製品であろう。錐部断面は三角形である。

220・225・232は異形石鏃である。220はその脚部・先端部の平面形が225に類似する。225の石色は乳白色で、黒色の縞を意図的に取り込んでいる。明確な磨痕はみられない。232は先端に丸みを持たせている。227・231は尖頭器である。227は大形の尖頭器を製作途中に、節理で欠損したものである。231は先端か基部か判然としない。素材剥片の厚みが生かされ、尖頭部は周縁への粗い加工で作出される。

228は剥片、230は二次加工ある剥片である。いずれも一定の大きさを持つ面的な打面から、単一方向に連続して剥離された縦長剥片を素材とする。230の二次加工は剥片末端に集中しており、その周辺の突出部は緩く摩滅する。229は削器で、205と形態的・技法的に類似する。

233～239は石核である。233～235は厚手の横に広い剥片を素材とし、縦長剥片あるいは寸詰まりの不定形剥片が剥離される一群である。237は多方向より剥離され、残核がサイコロ状を呈するものである。



第21図 五ヶ村遺跡 包含層等出土石器② (1/2・1/4)

236・238は楔様に剥片剥離されたものである。239は厚手の剥片に周縁から不定形剥片が剥離されるものである。図示資料以外にも多数のチャート製石核が出土している。

珪質岩製石器 240は大形の削器である。礫面を取り込んだ剥片素材で、右側縁から下縁にかけて弧状に刃部が設けられる。左側縁は折れ面のままである。

砂岩・玄武岩・凝灰岩などその他の石材製石器群 241・242は打製石斧で、241は有肩のものである。周縁は粗い加工ののち、細かな加工で調整されている。242の刃部周辺は使用のためか突出部を中心に緩く摩滅している。243・244は二次加工のある石器である。243は礫面の緩やかな局面を生かした石器で、石器周縁から粗く加工されたのち、細かく整形されている。上下端の短辺はやや抉りの入ったような格好となっている。244は横長剥片素材で、抉りが作出される。石器左側縁は素材剥片末端の鋭い縁辺を残しており、右側縁は鈍角の加工が入っている。

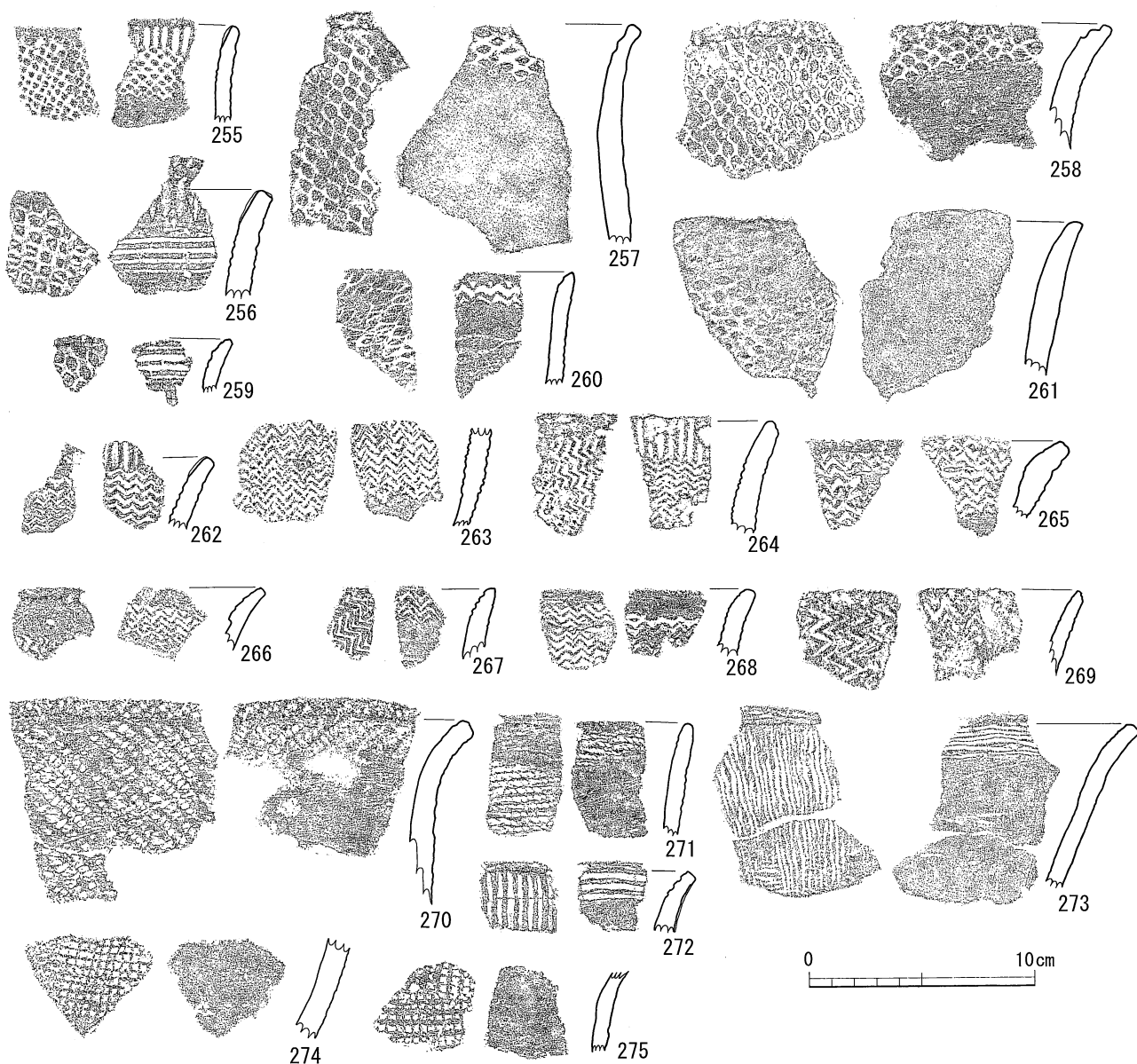
245は磨石、246は砥石である。245は箱石鹼様であり、整形された磨石の可能性はある。長軸側面には緩い磨面が、表裏面には顕著な磨面がみられる。246は表裏面ともに砥面が残される。

磨製石鏃・磨製石鏃未製品 247～249は緑、250は赤、251・252・254は黒、253は緑～黒のものである。緑には細身の砲弾形のものが多い。赤の250・黒の251は緑に比べ幅のある砲弾形のものであり、252・254はこれらの未製品であろう。247も先端付近の側縁が丸みを帯びる、あるいは平坦面を残しており、これも未製品の可能性がある。

③縄文土器（第22図・第23図—255～290）

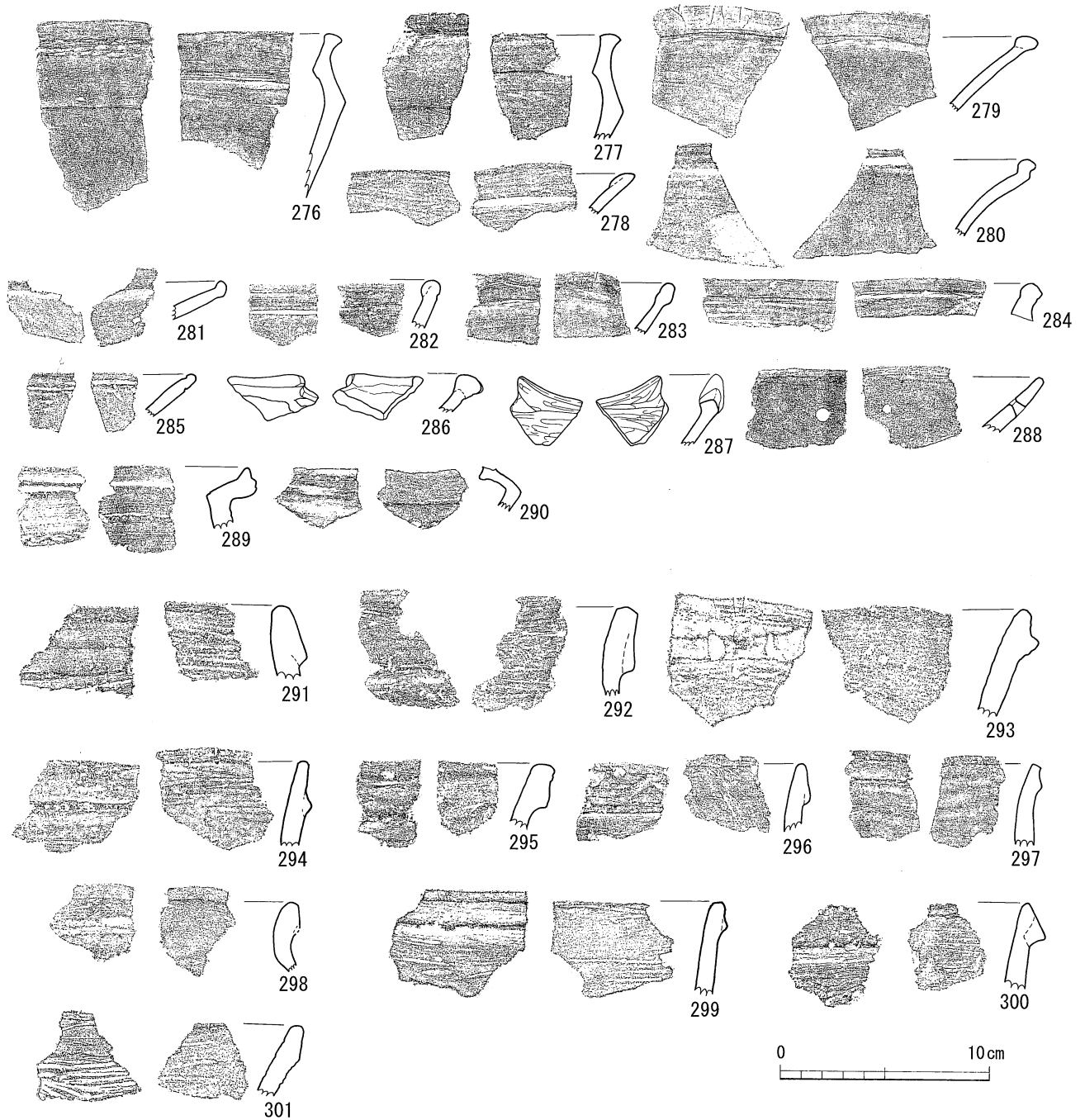
第Ⅱ章—1に分類内容を記したが、出土した縄文土器は大きく第Ⅰ～Ⅲ類に分類される。

第Ⅰ類（255～275）…押型文土器である。外面施文方法によって更に5類に分類できる（第Ⅱ章 第3節参照）。255～261はⅠA類（楕円形押型文）である。253は、薄手の器壁・縦位の原体条痕と横回転の楕円形押型文の内面施文を特徴とする。256は、やや厚手の器壁に短く外反する口縁、内面に縦位の原体条痕と横回転の楕円形押型文を施す。257・258は、やや厚手の器壁に短く外反する口縁、内面に横回転の楕円形押型文を施す。259は、薄手の器壁に横走する多条条痕文の内面施文を施す。260は、薄手の器壁に横回転の山形押型文を施す。261は、器形等が257・258と類似しているが、内面が無文である。262～269はⅠB類（山形押型文）である。262・264は、縦位の原体条痕と横回転の山形押型文の内面施文を特徴とする。263は、口唇部付近が欠損して状態が不明であるが、内面に横回転の山形押型文を施す。262・263は、他のⅠB類に比べて薄い器壁・良好な焼成・間隔の狭い押型文を特徴とし、相対的に古い様相を呈するものと考えられる。265～269は、内面に横回転の山形押型文を施す。270・271は、ⅠD類であり、回転縄文を施す。270は、ⅠA類の257・258・261などと器形等が類似している。外面全体と内面口唇部付近に斜回転の縄文を施す。271は、外面全体と内面口唇部付近に縦回転の縄文を施す。薄い器壁・良好な焼成を特徴とし、相対的に古い様相を呈するものと考えられる。272は、ⅠE類であり、外面に縦回転の柵状文・内面に外面と同じ施文具での文様を施す。273は、ⅠD類であり、外面に一部横回転・主に縦回転の撚糸文、内面口唇部付近に横回転の撚糸文を施す。器形はラッパ状に開く形態を呈する。274・275はⅠC類の格子状押型文である。



第22図 五ヶ村遺跡 包含層等出土縄文土器① (1/3)

第Ⅱ類 (276~290) いずれも黒色磨研系土器である。276・277は、同一個体の可能性がある浅鉢形土器の口縁部である。口縁を肥厚させ、頸部で「く」字状に屈曲する器形を呈する。内外面には横方向のミガキが施される。外面に丹塗りが認められる。278~285は、全体的なプロポーシオンは判別できないが、外側に大きく開く浅鉢の口縁部である。いずれも口唇部内面を玉縁状に肥厚させている。更に280・282・285は口縁部外面に1条の沈線を施している。284は口縁部である。細片でありプロポーシオンを想定することは難しいが、剥離面を考えると、短い頸部をもつタイプであったと考えられる。286は口唇部全体を肥厚させている。口唇部には鱗状突起に類した隆起物が確認できる。287は、口唇部に鱗状突起をもち、内外面にミガキを施す。288は緩やかに内湾しながら立ち上がる器形を呈する。外面から穿孔を施している。289は口縁部片である。口縁部を強く「く」字状に屈曲させ、口縁帯を作出している。口縁帯には2条の凹線を施している。290は胴部片である。強く屈曲し、算盤玉状を呈している。



第23図 五ヶ村遺跡 包含層等出土縄文土器② (1/3)

第Ⅲ類 (291~301) 器形に若干の多様性が認められるが、いずれも口縁部上部に1~3cmの帯状の貼付突帯をもつ深鉢の口縁部付近である。第Ⅱ類同様、縄文時代晩期に属すると考えられる。器面調整は、突帯部が丁寧なナデ・内外面がナデか斜方向の条痕を施す。293は、突帯部下方に2本の縦位刻目をもつ。これは、刻目なのか、粘土紐の繫目なのか判断に窮する。

第5節 5号竪穴住居跡出土炭化材の自然科学分析

1. 放射性炭素年代測定

(1) 試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No. 1	5号住居跡	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄, ベンゼン合成	β 線計数法
No. 3	5号住居跡	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄, ベンゼン合成	β 線計数法
No. 4	5号住居跡	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄, ベンゼン合成	β 線計数法
No. 7	5号住居跡	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄, ベンゼン合成	β 線計数法

(2) 測定結果

試料名	^{14}C 年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ^{14}C 年代 (年BP)	暦年代(西暦)	測定No. Beta-
No. 1	1750 \pm 60	-25.7	1740 \pm 60	交点: calAD265, 290, 325 1 σ : cal AD235~390 2 σ : cal AD135~425	137689
No. 3	1890 \pm 70	-26.6	1860 \pm 70	交点: calAD135 1 σ : cal AD75~240 2 σ : cal AD5~340	137690
No. 4	1900 \pm 70	-25.2	1900 \pm 70	交点: calAD95 1 σ : cal AD45~215 2 σ : cal AD45~255	137691
No. 7	1840 \pm 70	-25.0	1840 \pm 70	交点: cal AD155 1 σ : cal AD85~250 2 σ : cal AD30~365	137692

① ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在(1950年AD)から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は5,568年を用いた。

② $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表す。

③補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

④暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中¹⁴C濃度の変動を較正することにより算出した年代（西暦）。較正には年代既知の樹木年輪の¹⁴Cの詳細な測定値、サンゴのU-Th年代と¹⁴C年代の比較により作成された補正曲線を使用した。最新のデータベース（“INCAL98 Radiocarbon Age Calibration”Stuiver et al, 1998, Radiocarbon40(3)）により、約19,000年BPまでの換算が可能となっている。ただし、10,000年BP以前のデータはまだ不完全であり、今後も改善される可能性がある。暦年代の交点とは較正¹⁴C年代値と暦年代較正曲線との交点の暦年代値を意味する。1σ（68%確率）・2σ（95%確率）は、較正¹⁴C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の1σ・2σ値が表記される場合もある。

2. 樹種同定

- (1) 試料：試料は、5号竪穴住居跡から出土したNo.1～No.10の炭化材である。
- (2) 方法：試料を割折して新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、落射顕微鏡によって75～750倍で観察した。樹種同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。
- (3) 結果：結果を表1に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下同定根拠となった特徴を記す。

試料	樹種（和名／学名）
No.1	クリ <i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.
No.2	クリ <i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.
No.3	クリ <i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.
No.4	ブナ科 <i>Fagaceae</i>
No.5	ブナ科 <i>Fagaceae</i>
No.6	クリ <i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.
No.7	ブナ科 <i>Fagaceae</i>
No.8	ヌルデ <i>Rhus javanica</i> L.
No.9	クリ <i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.
No.10	クリ <i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.

表1 炭化材の樹種同定結果

a. クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科（図版1-1・2）

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が、火災状に配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質によりクリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径40cmぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径2mに達する。耐朽性強く、水湿によく耐え、保存性の極めて高い材で、現在では建築、家具、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、椎茸ほだ木など広く用いられる。

b. ブナ科 Fagaceae

横断面：部分的ではあるが大型の道管と、火災状に配列する小道管が見られた。

放射断面：放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質によりブナ科のクリ、シイ属のいずれかである。なお本試料は、保存状態が悪く、広範囲の観察は困難であったことから、ブナ科の同定にとどめた。

c. ヌルデ *Rhus javanica* L. ウルシ科 (図版1-3)

横断面：年輪のはじめに、中型の道管が、単独あるいは2～3個複合して配列する環孔材である。晩材部で小道管が多数集合して、接線方向あるいは斜線方向に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は徐々に減少していく。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は異性である。小道管の内壁にらせん肥厚が存在する。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、1～3細胞幅である。

以上の形質よりヌルデに同定される。ヌルデは北海道（渡島半島）、本州、四国、九州、沖縄に分布する。落葉高木で、通常高さ5～10m、径20～30cmであるが、大きいものは高さ13m、径45cmに達する。耐朽、保存性はさほど高くない材で、器具、ろくろ細工、薪炭に用いられる。

4) 所見

分析の結果、5号竪穴住居跡から出土した炭化材の多くはクリと同定された。クリは、温帯域の乾燥した台地や丘陵地などに多く生育し、二次林にもなる樹種である。材は堅く耐久性に優れ、建築材や土木材に適する。

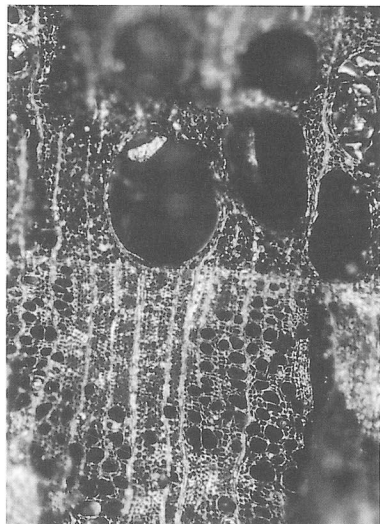
〈文献〉

佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞. 木材の構造, 文永堂出版, p. 20 - 48.

佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞. 木材の構造, 文永堂出版, p. 49 - 100.

図版 1

五ヶ村遺跡出土炭化材の顕微鏡写真



横断面 ————— : 0.4mm

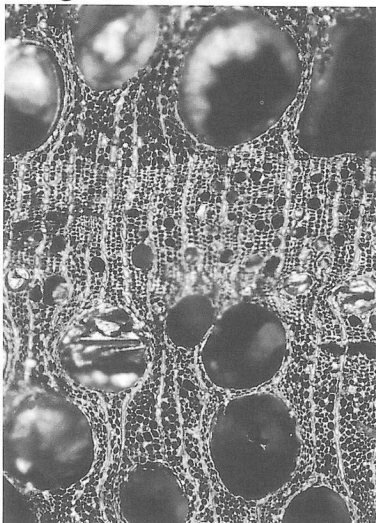
1. ⑥ クリ



放射断面 ————— : 0.2mm

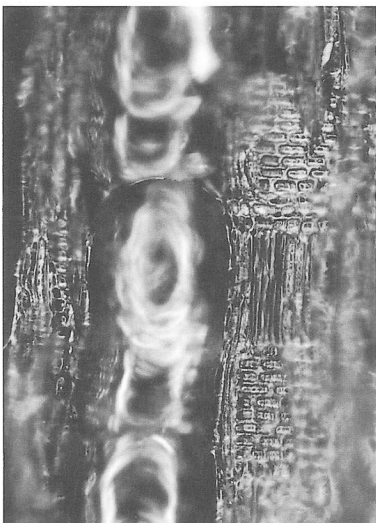


接線断面 ————— : 0.2mm



横断面 ————— : 0.4mm

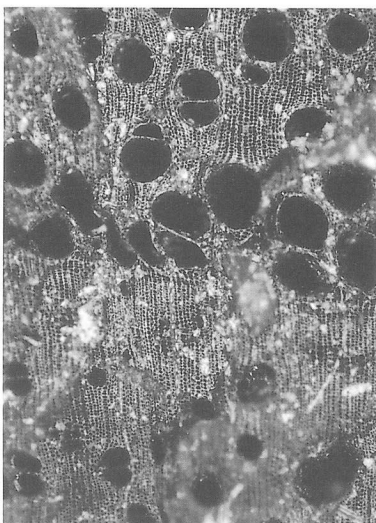
2. ⑩ クリ



放射断面 ————— : 0.2mm

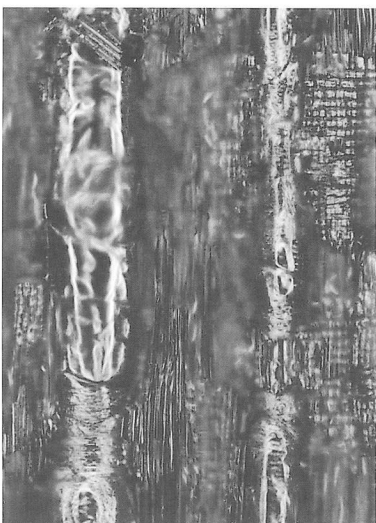


接線断面 ————— : 0.2mm

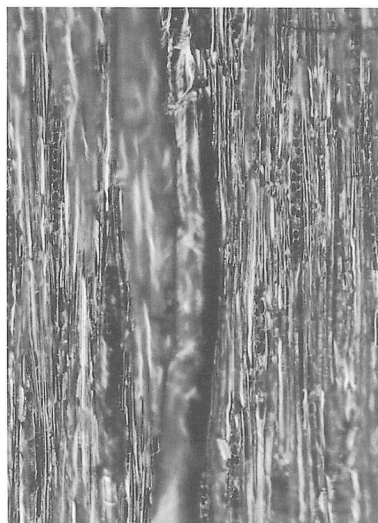


横断面 ————— : 0.4mm

3. ⑧ ヌルデ



放射断面 ————— : 0.2mm



接線断面 ————— : 0.2mm

遺物 番号	種別	器種 部位	出土 地点	手法・調整・文様ほか		色 調		胎土の特徴	備 考
				外 面	内 面	外 面	内 面		
1	弥生土器 甕	口縁部	SA1	丁寧なナデ	丁寧なナデ	にぶい黄橙	にぶい黄褐	3mm以下の白・黒色角閃石・乳白色、1mm以下の金色(雲母?)を含む	推定口径25.0cm
2	弥生土器 甕	口縁部	SA2	ヨコナデ	横と斜方向のナデ	黄褐	にぶい黄褐	5mm以下の黄褐、3mm以下の黒色角閃石・無色透明光沢粒を含む	
3	弥生土器 甕	口縁部	SA2	ヨコナデ	ヨコナデ・指頭痕	にぶい黄橙	にぶい黄褐	1mm程の乳白色・灰色・黒褐・白色透明粒を含む	
4	弥生土器 壺	口縁～ 頸部	SA1	ハケ目の後ミガキ	横方向のナデ・指頭によるナデ上げ	橙	橙	3mm以下の灰白、2mm以下の褐灰粒を含む	
5	弥生土器 甕	頸部	SA1	ミズ腫れ状突帯・ヨコナデ	ナデ	褐	黒褐	5mm以下の灰褐・灰白色粒、2mm以下の黒色角閃石・無色透明粒を含む	口径8.5cm
6	縄文土器 浅鉢	胴部	SA1	横方向のミガキ	横方向のミガキ	にぶい褐	にぶい黄褐	1mm以下の黒色角閃石・無色透明光沢粒を含む	
7	弥生土器 壺	頸部	SA1	不定方向のハケ目	縦方向の指頭によるナデ上げ	灰オリーブ	暗灰黄	2mm以下の黄灰・オリーブ褐・褐灰・にぶい橙・黒色粒を含む	
8	弥生土器 壺	胴部	SA1	ハケ目	横方向のハケ目	にぶい黄橙	灰黄	3mm以下の灰白、1mm以下の黒色角閃石を含む	
9	弥生土器 甕	底部	SA1	斜方向のハケ目の後ナデ	粗いナデ	にぶい黄橙	褐灰	5mm以下の灰白、2mm以下の黒色角閃石・黒色透明粒を含む	
10	弥生土器 甕	底部	SA1	縦と斜方向のハケ目の後ナデ	縦と横方向のハケ目の後ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	4mm以下のにぶい褐・灰白色粒、2mm以下の黒色角閃石・無色透明粒を含む	
11	弥生土器 甕	底部	SA1	縦方向のハケ目	斜方向の指頭によるナデ	にぶい黄橙	黄灰	4mm以下の黒褐・灰色粒、1mm以下の黒色角閃石・黄色透明粒を含む	推定底径3.0cm
22	弥生土器 甕	口縁部	SA2	ナデ・一部工具痕?	ナデ・一部工具痕?	橙	にぶい黄橙	2mm程の黒褐・褐・灰白色粒を含む	
23	弥生土器 甕	口縁部	SA2	ナデ・指押さえ	横方向のナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	4mm程の灰褐・褐灰、2mm程の赤褐・灰白色粒を含む	
24	弥生土器 壺	口縁部	SA2	ヨコナデ・ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	4mm程の乳白色、3mm程の白色不透明・黒色角閃石・浅黄橙色粒を含む	推定口径13.5cm
25	弥生土器 甕	口縁部	SA2	ナデ	ナデ・指押さえ	橙	浅黄橙	3mm程の灰黄褐・灰白色粒を含む	
26	弥生土器 壺	口縁部	SA2	櫛描波状文・ヨコナデ	ヨコナデ	浅黄橙	灰白	2mm以下の黄褐・黄灰・黒褐色粒を含む	
27	弥生土器 甕	胴部	SA2	貼付突帯による工字突帯・ヨコナデ	ヨコナデ・指頭痕	暗オリーブ	にぶい褐	7mm以下の灰白、3mm以下の黒色角閃石を含む	
28	弥生土器 壺	底部	SA2	ナデ・工具痕・指頭痕	ナデ	にぶい黄	灰オリーブ	5mm以下の黄灰・にぶい橙・灰褐色粒を含む	
34	弥生土器 甕	口縁部	SA3	貼付突帯2条・ハケ目	ナデ・指ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	1mm以下の黒褐・灰褐・乳白色粒を含む	
35	弥生土器 甕	口縁部	SA3埋土	ヨコナデ	ヨコナデ	オリーブ黒	オリーブ黒	2mm以下の褐灰・黒色角閃石・無色透明粒を含む	
36	弥生土器 甕	口縁部	SA3	貼付突帯・ヨコナデ	ヨコナデ	黒	にぶい褐	5mm以下の灰白、2mm以下の黒色角閃石・無色透明・黒褐色粒を含む	
37	弥生土器 壺	口縁部	SA3埋土	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい褐	黄褐	3mm以下の黒色角閃石、1mm以下の白色半透明粒を含む	
38	弥生土器 甕	口縁部	SA3埋土	ヨコナデ	ヨコナデ	暗灰黄	明赤褐	1.5mm以下の黒色角閃石・黒色透明粒を含む	
39	弥生土器 甕	口縁部	SA3	ヨコナデ	ヨコナデ	黒	黒	2mm以下の黒色角閃石・黄透明光沢粒・灰白色粒を含む	
40	弥生土器 甕	口縁部	SA3	横ナデ	横ナデ	明黄褐	明黄褐	1mm程の黒褐・灰褐・乳白色粒を含む	
41	弥生土器 甕	口縁部	SA3	ヨコナデ	ヨコナデ	浅黄	浅黄	1mm以下の灰白・黒褐・褐灰色粒を含む	
42	弥生土器 壺	口縁部	SA3	ヨコナデ・櫛描波状文	ヨコナデ	浅黄	浅黄	1mm以下の褐灰色粒を含む	口径18.4cm
43	弥生土器 甕	胴部	SA3	ミズ腫れ状貼付突帯(工字状)・ナデ・ハケ目	ナデ・指頭によるナデ	にぶい赤褐	赤褐	4mm以下の灰白色、1.5mm以下の黒色角閃石・無色透明粒を含む	
44	弥生土器 甕	胴部	SA3	ミズ腫れ状貼付突帯(工字状)・ナデ	ナデ・指頭によるナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	1mm程の灰褐・黒褐色・白色・黒色角閃石を含む	
45	弥生土器 甕	胴部	SA3埋土	櫛描波状文(工字状)・ヨコナデ	ナデ・指頭痕	橙	明黄褐	1mm以下の黒褐・灰褐・白・黒色を含む	
46	弥生土器 甕	胴部	SA3埋土	ミガキ・縦位刻目をもつ貼付突帯	ハケ目	にぶい黄橙	にぶい黄	1mm以下の黒褐・黒色角閃石を含む	
47	弥生土器 壺	肩部	SA3	3条の貼付突帯・横位の刻目をもつ円形浮文・ハケ目	ナデ・指頭痕	にぶい黄	浅黄	5mm程の灰白、1mm以下の灰白・無色透明・黒色角閃石を含む	

第1表 五ヶ村遺跡 出土土器観察表①

遺物 番号	種別	器種 部位	出土 地点	手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
				外面	内面	外面	内面		
48	弥生土器 甕	底部	SA3	縦方向の板状工具による ナデ	横方向の板状工具による ナデ	にぶい褐	にぶい褐	4mm以下の黒褐・灰色粒, 2mm以下の 黒色角閃石・無色透明粒を含む	推定底径8.2cm
50	弥生土器 甕	口縁部	SA4	4条の貼付突帯・ナデ	ナデ・指頭痕	暗褐	褐	2mm以下の黒色角閃石・無色透明 光沢粒・灰白・褐灰色粒を含む	推定口径11.0cm
51	弥生土器 壺	口縁部	SA4埋土	口唇部に2列の刺突文・ ナデ・一部指押さえ	円形浮文・ナデ	橙	橙	5mm程の灰黄粒, 1~2mm程の灰 白・黒色角閃石・無色透明粒を含 む	
52	弥生土器 甕	胴部	SA4埋土	縦・横方向に貼付突帯・ ナデ	ナデ	にぶい赤褐	暗灰黄	2mm程の黒色角閃石・灰色・灰白 色・褐色粒, 1mm以下の無色透明 粒を含む	
53	弥生土器 高坏	脚部	SA4埋土	矢羽根状透かし・縦方向 のミガキ	ナデの後にケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	0.5~2mm程の乳白色粒, 1mm以下 の浅黄橙色の粒を含む	
63	弥生土器 甕	口縁部 ~底部	SA5	ナデ	ナデ	橙	橙	3mm以下の灰褐・黒褐・黒色角閃 石・白色光沢粒を含む	口径20.4cm 器高37.8cm
64	弥生土器 甕	口縁部 ~胴部	SA5	頸部に櫛描波状文・ナデ	ナデ	オリーブ黒	オリーブ黒	9mm以下の灰褐, 1mm以下の黒褐・ 灰褐・黒・白色透明粒を含む	推定口径23.7cm
65	弥生土器 甕	口縁部 ~胴部	SA5	斜方向にハケ目	横・斜方向のハケ目	赤褐	橙	3mm以下の灰白・黒褐・褐・無色透 明・黒色角閃石を含む	推定口径23.0cm
66	弥生土器 甕	口縁部 ~胴部	SA5	ハケ目	横方向のハケ目	にぶい橙	にぶい橙	6mm以下の黒・褐灰・灰褐・橙・灰 白・無色透明・金(雲母?)色粒を 含む	推定口径30.4cm
67	弥生土器 甕	口縁部 ~胴部	SA5	ハケ目・ナデ	横と斜方向のナデ・指頭 痕	にぶい黄橙	にぶい橙	5mm以下の黒・黒褐・暗赤褐・灰白 粒を含む	口径33.8cm
68	弥生土器 甕	口縁部 ~胴部	SA5	斜方向のハケ目・ナデ	板状工具によるナデ	浅黄橙	浅黄橙	7mm以下の褐灰・赤褐色, 2mm以下 の黒色角閃石を含む	推定口径19.1cm
69	弥生土器 甕	口縁部 ~胴部	SA5	ハケ目	ハケ目・ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	6mm以下の黒・褐・灰・灰白粒を含 む	推定口径18.9cm
70	弥生土器 甕	口縁部 ~胴部	SA5	工具によるナデ。ナデ	工具によるナデ	にぶい黄橙	灰黄褐	3mm以下の黒・褐・赤褐・灰白粒を 含む	推定口径14.4cm
71	弥生土器 甕	口縁部 ~胴部	SA5埋土	ナデ・一部工具痕あり・指 頭痕	横方向のハケ目の後にナ デ・工具痕あり	橙	橙	5mm以下の褐灰・灰褐色, 15mm程 の黒褐色の粒を含む	推定口径15.6cm
72	弥生土器 甕	口縁部 ~胴部	SA5	ハケ目	ハケ目	明赤褐	明赤褐	6mm以下の黒・褐灰・灰褐・にぶい 褐・灰白粒を含む	口径22.6cm
73	弥生土器 甕	口縁部 ~胴部	SA5	ヨコナデ・交叉状平行タ キ	横方向のナデ・工具による 斜方向のナデ	にぶい黄褐	浅黄橙	5mm以下の赤褐・暗灰黄, 2mm以下 の黒色光沢粒を含む	推定口径19.9cm
74	弥生土器 甕	口縁部	SA5	貼付突帯・ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい橙	にぶい橙	2mm以下の黒色角閃石・無色透明 粒, 5mm程の黄褐色粒を含む	
75	弥生土器 甕	口縁部	SA5	貼付突帯・ヨコナデ	横方向の丁寧なナデ	橙	暗灰黄	2mm以下の灰白・黒褐・黒色角閃 石・無色透明粒を含む	
76	弥生土器 甕	口縁部	SA5	貼付突帯・ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい褐	にぶい褐	4mm以下の黄褐・褐・灰白・黒色角 閃石, 1.5mm以下の無色光沢粒を 含む	
77	弥生土器 甕	口縁部	SA5	ヨコナデ	ヨコナ・ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	4mm以下の褐・灰・黒色, 2mm以下 の無色透明光沢粒を含む	
78	弥生土器 甕	口縁部	SA5	ヨコナデ	ヨコナデ	黒褐	にぶい褐	4mm以下の黄褐・黒色角閃石, 1mm 以下の無色光沢粒を含む	
79	弥生土器 甕	口縁部	SA5埋土	ヨコナデ	ヨコナデ・斜方向のナデ	明黄褐	明黄褐	2mm以下の白・無色透明・黒色光 沢・灰白色粒を含む	
80	弥生土器 甕	口縁部	SA5	ヨコナデ・ミミズ腫れ状突 帯(工字状)	ヨコナデ・横と斜方向のナ デ	にぶい赤褐	灰黄褐	3mm以下の黒色角閃石・黄褐・灰 白・褐灰色粒を含む	
81	弥生土器 甕	口縁部 ~胴部	SA5埋土	横方向のナデ	横方向のナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	3mm以下の黒褐・灰黄褐・灰白・黒 色角閃石, 1mm以下の透明光沢粒 を含む	
82	弥生土器 甕	口縁部 ~胴部	SA5埋土	ヨコナデ・ナデ・斜方向の ハケ目の後ナデ	ヨコナデの後ナデ・ナデ・ 指頭痕	褐灰	にぶい褐	2mm以下の黒色角閃石・無色透 明・灰白色粒を含む	
83	弥生土器 甕	口縁部	SA5	頸部に櫛描波状文・ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい黄褐	2mm以下の黒色角閃石・無色透明 粒を含む	
84	弥生土器 甕	口縁部	SA5	頸部に櫛描波状文・ナデ	横方向のナデ	にぶい橙	黄褐	2mm以下の黒色角閃石・白色半透 明粒を含む	
85	弥生土器 甕	頸部	SA5埋土	櫛描波状文・ナデ	ヨコナデ・指頭痕	暗灰褐	にぶい橙	4mm程の灰色, 2mm以下の黒色角 閃石・半透明光沢粒を含む	
86	弥生土器 甕	頸部	SA5	櫛描波状文・横方向のナ デ	横方向のナデ	にぶい褐	黒褐	4mm以下の黒色角閃石, 1mm以下 の無色透明粒を含む	
87	弥生土器 甕	口縁部	SA5	縦位の刻目をもつ2条の 貼付突帯・ナデ	ナデ・指頭痕	橙	明黄褐	4mm程の褐灰, 1mm程の灰白・褐 灰・乳白色粒を含む	
88	弥生土器 甕	口縁部	SA5	縦位の刻目をもつ1条の 貼付突帯と1条の無刻目 突帯・ナデ	ナデ	明黄褐	橙	6mm程の灰白, 2mm以下の灰白・乳 白色粒を含む	

第2表 五ヶ村遺跡 出土土器観察表②

遺物 番号	種別	器種 部位	出土 地点	手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
				外面	内面	外面	内面		
89	弥生土器 甕	胴部	SA5	縦位の刻目をもつ1条の 貼付突帯・横方向のナデ・ 縦と斜方向のハケ目	横と斜方向のナデ	橙	橙	6mm以下の浅黄色、4mm以下の乳 白色粒を含む	
90	弥生土器 甕	胴部	SA5埋土	縦位の刻目をもつ1条の 貼付突帯	ハケ目	にぶい黄	にぶい黄褐	2mm以下の灰白・無色透明光沢粒 を含む	
91	弥生土器 甕	胴部	SA5埋土	縦位の刻目をもつ2条の 貼付突帯	ハケ目の後ヨコナデ	にぶい赤褐	にぶい褐	2mm以下の黒色角閃石、1mm以下 の無色光沢粒を含む	
92	弥生土器 甕	口縁部	SA5	斜方向のハケ目・ナデ	斜方向のハケ目の後ヨコ ナデ	にぶい褐	灰黄褐	3mm以下の褐色、1.5mm以下の・白・ 赤褐・黒色角閃石を含む	
93	弥生土器 甕	口縁部	SA5埋土	ハケ目の後にヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙	浅黄	4mm以下の灰白、2mm以下の黒・褐 色粒を含む	
94	弥生土器 甕	口縁部	SA5埋土	ヨコナデ・ナデ	ナデ	にぶい橙	浅黄	2mm以下の灰白、1mm以下の黒色 粒を含む	
95	弥生土器 甕	口縁部 ～胴部	SA5埋土	ヨコナデの後ナデ・ナデ	ヨコナデの後ナデ・ナデ	淡黄	淡黄	3mm以下の灰・にぶい黄・にぶい 褐色の粒を含む	
96	弥生土器 壺	口縁部	SA5埋土	ナデ・一部指頭痕	ナデ・一部指頭痕	にぶい橙	にぶい黄橙	5mm以下の褐灰、4mm以下の暗赤 褐・灰褐・黄褐色粒を含む	推定口径11.7cm
97	弥生土器 壺	口縁部 ～頸部	SA5	櫛描波状文・横方向の丁 寧なナデ・格子状の刻目 をもつ突帯	ヨコナデ・指頭痕	浅黄褐	にぶい黄橙	3mm以下の褐・灰・灰白色、1.5mm以 下の・黒色・無色透明粒を含む	推定口径15.0cm
98	弥生土器 壺	口縁部	SA5	櫛描波状文・横方向のナ デ	横方向のナデ	にぶい黄橙	浅黄橙	5mm以下の褐・褐灰、3mm以下の黒 色粒を含む	推定口径17.1cm
99	弥生土器 壺	口縁部	SA5埋土	ヨコナデ・一部縦方向のハ ケ目	ヨコナデ	にぶい黄橙	橙	5mm以下の灰黄・暗灰黄、3mm以下 の黒褐・褐灰・黄褐色粒を含む	推定口径8.3cm
100	弥生土器 壺	口縁部	SA5	櫛描波状文	横と斜方向のナデ	にぶい橙	明赤褐	4mm以下の褐灰、2mm以下の黒・無 色透明光沢粒を含む	
101	弥生土器 鉢	口縁部 ～胴部	SA5埋土	斜方向のナデ	斜方向のナデ	橙	橙	3mm以下の灰白・褐・黒褐・赤褐・ 黒色透明粒を含む	
102	弥生土器 鉢	口縁部 ～底部	SA5	工具によるナデの後に縦 と斜方向のミガキ	縦と斜方向のミガキ	黄褐	橙	6mm以下の褐灰、4mm以下のオリ ブ黒、2mm以下の暗赤褐色粒を含 む	口径17.5cm・器高9.5cm
103	弥生土器 甕	胴部～ 底部	SA5	ナデ・工具によるナデ	ナデ・工具によるナデ・指 頭痕	明赤褐	にぶい黄橙	4mm以下の・黒色角閃石・灰白・褐 灰色、2mm以下の無色透明粒を含 む	底径1.15cm
104	弥生土器 甕	胴部～ 底部	SA5	工具によるナデ	工具によるナデ	にぶい黄橙	灰黄橙	2mm以下の黒褐・灰褐色粒を含む	推定底径2.0cm
105	弥生土器 甕	胴部～ 底部	SA5	風化著しいがナデ?	ナデ	にぶい褐	褐灰	3mm程の灰褐・褐・黒褐色粒、2mm 前後の黒色角閃石・無色透明粒を 含む	底径3.9cm
106	弥生土器 甕	胴部～ 底部	SA5	縦と斜方向に丁寧なナデ	工具によるナデ	橙	橙	5mm程の黒褐・灰褐色、2mm程の灰 白・褐灰・黒色角閃石を含む	推定底径2.5cm
107	弥生土器 甕	底部	SA5	ナデ	ハケ目	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm程の灰白・褐・黒褐色粒を含 む	底径4.4cm
108	弥生土器 鉢	胴部～ 底部	SA5	縦と斜方向のミガキ	工具によるナデ・ナデ	浅黄	黒褐	4mm以下の黒褐・黄褐・褐灰色粒 を含む	推定底径2.3cm
118	弥生土器 甕	口縁部	V層中	ミズ腫れ状の貼付突帯・ ヨコナデ・横方向のナデ	横方向のナデ・指頭痕	灰褐	黄褐	7mm程の褐灰礫・3mm以下灰白・褐 灰・黒色角閃石・無色透明光沢粒 を含む	
119	弥生土器 甕	口縁部	V層中	1条の貼付突帯・横方向 のナデ	横方向のナデ	にぶい橙	にぶい褐	5mm程の灰黄褐・にぶい黄褐色 粒、3mm以下の灰白・黄褐色粒、1 mm以下の黒色角閃石・無色透明粒 を含む	
120	弥生土器 甕	口縁部	V層中	1条の貼付突帯・ヨコナ デ・横方向のナデ	横方向のナデ	褐	にぶい黄褐	5mm程の褐灰色、1mm以下の黒色 角閃石・無色透明光沢粒を含む	
121	弥生土器 甕	口縁部	V層中	横方向のナデ・櫛描波状 文	ヨコナデ・指頭痕	にぶい橙	にぶい橙	4mm以下の褐灰・黒色角閃石、1mm 以下の無色透明光沢粒を含む	
122	弥生土器 甕	口縁部	V層中	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄褐	にぶい黄橙	2mm以下の灰白・褐灰・黒色角閃 石・無色透明粒を含む	
123	弥生土器 甕	口縁部	V層中	1条の貼付突帯・横方向 のナデ	粗いナデ・指頭痕	褐	にぶい黄褐	3mm程の灰白、2mm以下の灰白・褐 灰・黒色角閃石・無色透明光沢粒 を含む	
124	弥生土器 甕	口縁部	IV層中	1条の貼付突帯・ヨコナ デ	ヨコナデ	褐	にぶい橙	4mm程の褐色、2mm程の黒褐・灰 白・黒・乳白色粒を含む	
125	弥生土器 甕	口縁部	V層中	丁寧なナデ・ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	4mm以下の灰白・1.6mm以下の灰 白・無色透明光沢粒を含む	
126	弥生土器 甕	口縁部	V層中	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい褐	にぶい褐	3mm以下の黒色透明・灰白、1.5mm 以下の黒色角閃石、1mm以下の橙 色粒を含む	
127	弥生土器 甕	口縁部 ～胴部	V層中	工具によるナデ	工具によるナデ	橙	橙	5mm以下の赤褐・暗灰色、1.5mm以 下の黒褐色粒を含む	推定口径18.3cm

第3表 五ヶ村遺跡 出土土器観察表③

遺物番号	種別	器種部位	出土地点	手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
				外面	内面	外面	内面		
128	弥生土器甕	口縁部	V層中	ヨコナデの後ナデ・縦方向のハケ目の後ナデ	ナデ・指頭痕	オリーブ黒	灰黄褐色	3mm以下の褐灰色, 2mm以下の黒色角閃石・無色光沢粒を含む	
129	弥生土器甕	口縁部	V層中	斜方向の工具によるナデ・口唇部付近は指ナデ	斜方向の工具によるナデ・口唇部付近は指ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	5mm以下の褐灰色, 3mm以下の灰白色, 1mm以下の黒色光沢粒を含む	推定口径16.4cm
130	弥生土器甕	口縁部	V層中	ヨコナデ・斜方向のハケ目	ハケ目	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	4mm以下の黒褐色・灰白色, 1mm以下の無色透明光沢粒を含む	
131	弥生土器壺	口縁部	V層中	ヨコナデの後指ナデ	ヨコナデ・横と斜方向のハケ目	褐灰	にぶい黄褐色	3mm以下の橙・にぶい褐色の粒を含む	
132	弥生土器甕	口縁部	V層中	ヨコナデの後ナデ	ヨコナデ・一部工具	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	7mm以下の灰黄褐色, 4mm以下灰白色, 1mm以下の黒色光沢粒・無色光沢粒を含む	推定口径23.1cm
133	弥生土器甕	口縁部	V層中	ヨコナデ	ヨコナデ	橙	浅黄褐色	3mm以下の灰白色, 1mm以下の無色透明・黒色光沢粒を含む	推定口径16.7cm
134	弥生土器壺	口縁部	V層中	ナデ・横と斜方向に工具痕	ナデ・横と斜方向に工具痕	にぶい黄褐色	浅黄褐色	3mm以下の灰白, 1mm以下の黒色光沢・無色透明光沢粒を含む	
135	弥生土器甕	口縁部	III層中	横方向のナデ	横方向のナデ	明黄褐色	浅黄褐色	1mm以下の灰白・褐灰・無色透明光沢粒を含む	
136	弥生土器甕	口縁部	V層中	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	3mm以下の灰白色, 2mm以下の無色透明・黒色光沢粒を含む	推定口径22.3cm
137	弥生土器甕	口縁部	V層中	ヨコナデ	ヨコナデ	淡黄褐色	淡黄褐色	3mm以下の無色透明光沢粒, 1mm以下の灰白・金片(雲母?)・黒色光沢粒を含む	
138	弥生土器甕	口縁部	V層中	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	3mm以下の褐色, 1mm以下の無色透明・黒色透明・灰白・白色粒を含む	
139	弥生土器甕	口縁部	V層中	縦位に刻目をもつ1条の貼付突帯・横方向のナデ	ナデ・指頭痕	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	2mm以下の灰白・褐灰・灰黄褐色を含む	推定口径24.3cm
140	弥生土器甕	口縁部	V層中	貼付突帯・ヨコナデ	ナデ	黒褐色	明赤褐色	3mm以下の褐・灰褐色粒を含む	
141	弥生土器甕	口縁部	IV層中	縦位の刻目をもつ1条の貼付突帯	ナデ	明褐色	明褐色	1mm程の黒褐色・灰白・黒褐色・灰褐色・乳白色粒を含む	
142	弥生土器甕	口縁部	V層中	縦位に刻目をもつ2条の貼付突帯・ヨコナデ	ナデ	にぶい黄褐色	暗灰黄褐色	3mm程の灰黄色, 2mm程の灰白・赤褐色, 1mm以下の無色透明光沢粒を含む	
143	弥生土器甕	口縁部	V層中	縦位に刻目をもつ2条の貼付突帯・ヨコナデ・斜方向のハケ目	横方向のハケ目・ナデ・指頭痕	にぶい赤褐色	にぶい黄褐色	2mm以下の乳白色, 1mm以下の浅黄褐色・無色透明光沢粒を含む	
144	弥生土器甕	口縁部	IV層中	縦位の刻目をもつ2条の貼付突帯・横方向のナデ	横方向のナデ	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	4mm程のにぶい褐, 1mm程の褐灰・灰白・無色透明光沢粒を含む	
145	弥生土器甕	口縁部	V層中	縦位に刻目をもつ1条の貼付突帯・ヨコナデ	ヨコナデ	浅黄褐色	橙褐色	3mm以下の褐灰・黒褐色・にぶい赤褐色・橙色, 1mm以下の無色透明・黒色光沢粒を含む	
146	弥生土器甕	口縁部	V層中	縦位の刻目をもつ1条の貼付突帯・横方向のナデ	横方向のナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	2mm以下の黒色光沢・透明光沢・浅黄色粒を含む	
147	弥生土器甕	口縁部	V層中	縦位に刻目をもつ2条の貼付突帯・ヨコナデ	ヨコナデ	橙褐色	橙褐色	3mm以下の灰白・白色, 1mm以下の無色透明・黒色光沢粒を含む	
148	弥生土器甕	口縁部	V層中	縦位の刻目をもつ4条の貼付突帯・横方向のナデ	ナデ・指頭痕	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	2mm程の黒色角閃石, 1mm程の灰白・明褐灰・無色透明光沢粒を含む	
149	弥生土器甕	口縁部～胴部	V層中	貼付突帯・ヨコナデ	横方向のナデ	橙褐色	橙褐色	4mm以下の灰白・にぶい橙・赤褐色を含む	
150	弥生土器甕	胴部	V層中	横3条と縦1条の貼付突帯(工字状)・ナデ	横・斜方向の工具によるナデ	灰黄褐色	灰褐色	4mm以下の黒色角閃石・灰白・褐灰・にぶい黄褐色粒を含む	
151	弥生土器甕	胴部	V層中	ミス腫れ状の横2条縦1条の貼付突帯(工字状)	ナデ	にぶい赤褐色	明黄褐色	2mm以下の灰白・黒色角閃石・無色透明粒を含む	
152	弥生土器甕	胴部	V層中	ミス腫れ状の横2条の貼付突帯	ナデ・指頭痕	橙褐色	にぶい黄褐色	5mm程の灰白色, 2mm以下の褐灰・灰黄褐色・黒色角閃石・無色透明光沢粒を含む	
153	弥生土器甕	胴部	V層中	ミス腫れ状の3条の貼付突帯・ヨコナデ・横方向のナデ	風化のため不明	にぶい黄褐色	にぶい赤褐色	2mm以下の黒色角閃石・無色透明光沢粒を含む	
154	弥生土器甕	胴部	V層中	縦位の刻目のある貼付突帯・ナデ	丁寧なナデ	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	1mm以下の無色透明光沢・黒色光沢粒を含む	
155	弥生土器甕	胴部	V層中	ミス腫れ状突帯・ナデ	ナデ	黄褐色	にぶい黄褐色	1mm程の黒色角閃石・乳白色・灰色・黒褐色・灰褐色・無色透明・粒を含む	
156	弥生土器甕	胴部	V層中	ミス腫れ状突帯・ナデ	ナデ	明褐色	明褐色	5mm程の褐灰色, 1mm以下の黒色・灰白・黒褐色粒を含む	
157	弥生土器壺	肩部	V層中	3条の貼付突帯・ハケ目	ハケ目	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	1mm程の黒褐色・灰褐色・乳白色粒を含む	
158	弥生土器壺	口縁部～胴部	V層中	斜方向のナデ	斜方向のナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	4mm以下の褐灰・褐・黒褐色, 1mm程の灰白色粒を含む	推定口径8.1cm

第4表 五ヶ村遺跡 出土土器観察表④

遺物 番号	種別	器種 部位	出土 地点	手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
				外面	内面	外面	内面		
159	弥生土器 壺	肩部	V層中	3条の貼付突帯・横位の 刻目をもつ円形浮文・ナ デ	風化著しいがナデ?	橙	にぶい黄橙	5mm以下の灰白・橙・褐灰・浅黄橙 色粒を含む	
160	弥生土器 壺	口縁部	V層中	貼付突帯・ナデの後に丹 塗り	横方向のナデの後に丹塗 り	明赤褐	明赤褐	1mm以下の無色透明光沢粒を含 む	口径8.45cm
161	弥生土器 壺	口縁部	V層中	ヨコナデ・頸部に櫛描波状 文	ヨコナデ	にぶい黄橙	浅黄橙	4mm以下の黄灰・灰黄褐・明褐色 粒を含む	
162	弥生土器 壺	口縁部 ~胴部	V層中	交叉状の刻目した貼付突 帯・ナデ・一部工具痕	ヨコナデ・ナデ・指頭痕	橙	にぶい黄橙	4mm以下の灰白・褐灰・褐色、1mm 程の黒色光沢粒を含む	推定口径10.1cm
163	弥生土器 甗	底部	V層中	縦方向のハケ目・ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	4mm程の灰白、2mm以下の褐灰・黄 橙・無色透明光沢粒を含む	推定底径10.2cm
164	弥生土器 壺	頸部	V層中	縦方向のハケ目後に丹塗 り	ナデ・部分的に丹塗り	明赤褐	橙	1mm以下の無色透明光沢・黒色光 沢・浅黄褐色粒を含む	
165	弥生土器 壺	口縁部	V層中	ヨコナデ・縦方向のハケ目	ヨコナデ	にぶい黄橙	にぶい黄褐	1mm以下の灰白・無色透明光沢粒 を含む	
166	弥生土器 壺	口縁部	V層中	櫛描波状文	ヨコナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm程の黒褐・褐色粒を含む	
167	弥生土器 壺	口縁部	V層中	櫛描波状文・ナデ	ナデ	橙	橙	2mm以下の灰白・黒褐・黒色角閃 石を含む	
168	弥生土器 壺	胴部	V層中	凹線文(横走)・ハケ目	横方向にナデ	オリーブ黒	明赤褐	1mm程の灰白・褐灰・黒褐色の粒 を含む	
169	弥生土器 鉢	口縁部	V層中	2条の横走する貼付突帯 と2条の半円状の貼付突 帯との組み合わせ文・ナ デ	風化著しいがナデ?	灰黄褐	オリーブ黒	1mm以下の無色透明光沢粒	
170	弥生土器 鉢	口縁部 ~胴部	V層中	ナデ	斜方向の工具によるナデ	浅黄橙	にぶい黄橙	5mm程の赤褐色、2mm以下の黒色 角閃石	
171	弥生土器 鉢	口縁部	V層中	工具によるナデ	工具によるナデ・ナデ	橙	にぶい赤褐	1mm程の灰白・褐灰・無色透明 光沢粒を含む	推定底径5.3cm
172	弥生土器 小型鉢	口縁部 ~底部	V層中	ナデの後のミガキ	ヨコナデ・ナデ	明黄褐	にぶい黄橙	6mm以下の黄灰、5mm以下の灰黄 褐・褐灰、3mm以下の黒・赤褐色粒 を含む	器高8.4cm・口径10.9cm・底 径3.6cm
173	弥生土器 鉢	口縁部 ~胴部	V層中	ナデ	横と斜方向のナデ	橙	橙	4mm以下の灰白・褐灰・赤褐色粒 を含む	
174	弥生土器 甗	底部	V層中	風化著しいがナデ?	風化著しく 調整不明	にぶい黄褐	にぶい褐	3mm以下の黒色角閃石・無色透明 光沢粒・灰白・黒褐色粒を含む	
175	弥生土器 甗	底部	V層中	ナデ	ナデ・指頭痕	にぶい褐	オリーブ黒	4mm以下の黒褐・2mm以下の黒色 角閃石・1mm以下の乳白色粒を含 む	
176	弥生土器 甗	底部	V層中	工具によるナデ	風化により不明	にぶい褐	にぶい褐	5mm以下の灰褐色、3mm以下の黒 色透明・無色透明・灰白・灰褐色を 含む	
177	弥生土器 甗	底部	V層中	工具によるナデ	ナデ・指頭痕	明褐	橙	4mm程の灰褐・褐・乳白・無色透明 光沢・無色透明光沢粒を含む	底径4.5cm
178	弥生土器 甗	底部	III層中	縦方向のナデ	ナデ	にぶい黄	にぶい黄	3mm以下の無色透明光沢粒、1mm 以下の無色透明光沢粒を含む	底径4.9cm
179	弥生土器 甗	底部	V層中	ナデ	工具によるナデ	にぶい黄橙	黄灰	4mm以下の乳白色、1mm以下の無 色透明粒を含む	推定底径6.3cm
180	弥生土器 壺	底部	V層中	ナデ	剥離のため不明	橙	不明	2mm以下の灰白・褐灰・黒色角閃 石・無色透明光沢粒を含む	底径4.6cm
181	弥生土器 甗	底部	V層中	工具によるナデ	ナデ・指頭痕	橙	にぶい橙	4mm程の褐、2mm以下の黒褐・灰 褐・乳白色粒を含む	推定底径5.3cm
182	弥生土器 壺	底部	V層中	ナデ	ナデ	橙	橙	1mm程の灰白・褐灰・無色透明 光沢粒を含む	底径7.8cm
183	弥生土器 壺	底部	V層中	縦方向のハケ目	ナデ・一部工具痕	黒褐	暗灰黄	1mm以下の灰白・無色透明光沢粒 を含む	底径6.4cm
184	弥生土器 高坏	脚部	V層中	凹線文(格子状・横走)・ナ デ	ケズリ	にぶい黄橙	にぶい橙	1.5cm以下の灰白・浅黄褐色粒を 含む	推定底径10.6cm
185	弥生土器 高坏	脚部	V層中	ヨコナデ・縦方向のハケ 目・方形透かし	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	3mm程の赤褐色、1mm以下の黒色・ 黄・無色透明・褐灰粒を含む	
186	弥生土器 高坏	脚部	V層中	凹線文(横走)・ヨコナデ	ナデ	にぶい黄褐	黒褐	1.5mm以下の灰白・無色透明光沢 粒を含む	
255	縄文土器 深鉢	口縁部	C6トレンチ	楕円形押型文	楕円形押型文・ナデ ~縦方向の原体条痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1~2mm程の灰白色・黒色角閃石・ 黒色透明粒を含む	
256	縄文土器 深鉢	口縁部	SA5埋土	楕円形押型文・ナデ	斜方向の原体条痕・横方 向の条痕	灰黄褐	明黄褐	1~2mm程の白色・灰白色・黒色角 閃石・無色透明粒を含む	
257	縄文土器 深鉢	口縁部	V層中	楕円形押型文	口縁端部に楕円形押型 文・横方向のナデ	灰黄褐	にぶい橙	0.5~2mm程の白色・黄褐・無色透 明・灰白色粒、2mm以下の黒色角 閃石の粒を含む	

第5表 五ヶ村遺跡 出土土器観察表⑤

遺物 番号	種別	器種 部位	出土 地点	手法・調整・文様ほか		色 調		胎土の特徴	備 考
				外 面	内 面	外 面	内 面		
258	縄文土器 深鉢	口縁部	SA5埋土	楕円形押型文	粗いナデ・楕円形押型文	明黄褐	明黄褐	5mm以下の乳白色・黄褐色、2mm以下の乳白色・褐色・黄褐色・無色透明粒を含む	
259	縄文土器 深鉢	口縁部	SA4埋土	楕円形押型文	口縁端部の横方向の条痕文・ナデ	灰黄褐	にぶい黄褐	1mm前後の灰白粒、1mm程の無色透明粒を含む	
260	縄文土器 深鉢	口縁部	C6トレンチ	楕円形押型文	山形押型文・ナデ	にぶい黄橙	褐灰・にぶい黄橙	1~2mm程の灰白色・黒色角閃石・黒色透明粒を含む	
261	縄文土器 深鉢	口縁部	SA4埋土	楕円形押型文	ナデ・指押さえ	にぶい黄褐	明黄褐	1~2mm程の灰白粒、0.5~2mm程の黒色角閃石と無色透明粒を含む	
262	縄文土器 深鉢	口縁部	SA5埋土	山形押型文・ナデ	縦方向の原体条痕・山形押型文	黒褐	にぶい赤褐	1~2mm程の灰白色・黒色角閃石・無色透明粒を含む	
263	縄文土器 深鉢	胴部	SA3	山形押型文	山形押型文・ナデ	褐	にぶい褐	5mm程の黒褐色、2mm程の黒色角閃石、1mm以下の黒色透明粒を含む	
264	縄文土器 深鉢	口縁部	V層中	山形押型文	山形押型文・縦方向の原体条痕	にぶい黄橙	明黄褐	2mm以下の灰白・黒色角閃石・無色透明粒を含む	
265	縄文土器 深鉢	口縁部	SA5	山形押型文	山形押型文・ナデ横方向のナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	1mm以下の黒色角閃石・無色透明褐灰粒を含む	
266	縄文土器 深鉢	口縁部	SA5	山形押型文・ナデ	山形押型文	灰黄褐	にぶい黄褐	1mm程の無色透明・黒色角閃石を含む	
267	縄文土器 深鉢	口縁部	SA3	山形押型文	口縁端部に山形押型文・横方向のナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	1mm程の黒褐・灰褐・乳白色粒、3mm程の灰褐色・白色粒を含む	
268	縄文土器 深鉢	口縁部	V層中	山形押型文・ナデ	山形押型文	にぶい褐	明赤褐	1~2mm程の灰白色・黒色角閃石・黒色透明粒を含む	
269	縄文土器 深鉢	口縁部	SA3埋土	山形押型文・ナデ	ナデ・指おさえ	にぶい褐	にぶい黄褐	2mm以下の灰白・黒色角閃石・無色透明粒を含む	
270	縄文土器 深鉢	口縁部	SA5埋土	斜方向の縄文	口縁端部に斜方向の縄文・横方向のナデ	黒褐	灰黄褐	1~2mm程の灰白粒、0.5~2mm程の黒色角閃石と無色透明粒、5mm以下の黒褐色粒を含む	
271	縄文土器 深鉢	口縁部	V層中	斜方向の縄文・斜方向のナデ	横方向の縄文・ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	2.5mm以下の黒色角閃石・赤褐色、1mm以下の灰黄粒を含む	
272	縄文土器 深鉢	口縁部	SA3	縦方向の柵状文	横方向の条痕・横と斜方向のナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の黒色角閃石・無色透明・にぶい黄橙・灰色粒を含む	
273	縄文土器 深鉢	口縁部	SA5	縦方向の撚糸文	縦方向の撚糸文・横方向のナデ	灰黄	黄灰	1mm以下の黒色角閃石・灰白・黒褐色粒を含む	
274	縄文土器 深鉢	胴部	SA5	格子目状押型文・ナデ	ナデ	にぶい黄褐	黄褐	2mm以下の黒色角閃石・無色光沢粒を含む	
275	縄文土器 深鉢	胴部	SA3	格子目状押型文	横方向のナデ	明赤褐	明赤褐	5mm以下の褐色粒、1mm以下の褐色・灰褐・黒褐色、白色光沢粒を含む	
276	縄文土器 深鉢	口縁部	V層中	横・斜方向のミガキ	横・斜方向のミガキ	灰褐	黒褐	2mm以下の灰白・灰褐・黒色角閃石を含む	
277	縄文土器 深鉢	口縁部	V層中	横方向のミガキ	横方向のミガキ	灰褐	褐灰	0.5mm以下の黄白。透明光沢粒を含む	
278	縄文土器 浅鉢	口縁部	V層中	ミガキ	ミガキ	にぶい褐	にぶい褐	1mm前後の灰白・黒色角閃石・無色透明光沢粒を含む	
279	縄文土器 浅鉢	口縁部	V層中	ミガキ	ミガキ	黄灰	灰	1mm以下の灰白・黒色角閃石・無色透明粒を含む	
280	縄文土器 浅鉢	口縁部	V層中	玉縁気味の口縁・ミガキ	丁寧なナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	1mm以下の黒褐・無色透明粒を含む	
281	縄文土器 浅鉢	口縁部	IV層中	玉縁気味の口縁・ミガキ	ミガキ	灰褐	明赤褐	1mm以下の灰白・黒褐・無色透明光沢粒を含む	
282	縄文土器 浅鉢	口縁部	V層中	横・斜方向のミガキ・1条の凹線	横方向のミガキ	にぶい褐	暗灰黄	3.5mm以下のにぶい黄橙、2mm以下の褐灰・黒色角閃石・無色透明光沢粒を含む	
283	縄文土器 浅鉢	口縁部	V層中	ミガキ	ミガキ	黒褐	にぶい黄褐	0.5mm以下の灰白・透明光沢粒を含む	
284	縄文土器 浅鉢	口縁部	SA4埋土	ミガキ	ミガキ	黄灰	暗黄灰	1mm以下の灰白・無色透明光沢粒を含む	
285	縄文土器 浅鉢	口縁部	V層中	玉縁気味の口縁・ミガキ	ミガキ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	2mm以下の灰白粒、1mm以下の黒褐・無色透明光沢粒を含む	
286	縄文土器 浅鉢	口縁部	V層中	ミガキ	ミガキ	にぶい赤褐	にぶい黄褐	1mm以下の灰白・黒色角閃石を含む	
287	縄文土器 深鉢	口縁部	V層中	横・斜方向のミガキ・鱗状突起	横・斜方向のミガキ	灰褐	黒褐	1mm以下の灰白・褐・無色透明光沢粒を含む	
288	縄文土器 浅鉢	口縁部	V層中	ミガキ	ミガキ	にぶい褐	灰黄褐	1mm程の灰白・褐灰・黒色角閃石・無色透明粒を含む	
289	縄文土器 浅鉢	口縁部	V層中	口唇部に3条の凹線・ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい黄褐	2mm以下の黒色角閃石・無色透明粒を含む	

第6表 五ヶ村遺跡 出土土器観察表⑥

遺物 番号	種別	器種 部位	出土 地点	手法・調整・文様ほか		色 調		胎土の特徴	備 考
				外 面	内 面	外 面	内 面		
290	縄文土器 浅鉢	胴部	SA4埋土	ミガキ	ミガキ	オリーブ黒	オリーブ黒	1mm以下の灰白・無色透明光沢粒を含む	
291	縄文土器 深鉢	口縁部	V層中	貼付突帯・ナデ	ナデ・条痕	にぶい褐	にぶい赤褐	1mm以下の黒色角閃石・無色透明粒を含む	
292	縄文土器 深鉢	口縁部	V層中	貼付突帯・ナデ	横方向のナデ	にぶい黄褐	にぶい黄橙	1mm以下の透明光沢・黒色光沢・褐色粒, 4mm以下の褐色粒を含む	
293	縄文土器 深鉢	口縁部	V層中	貼付突帯・ナデ	ナデ	黄褐	黄褐	5mm程の灰白, 1mm以下の黒色角閃石・褐灰・黄褐粒を含む	
294	縄文土器 深鉢	口縁部	V層中	貼付突帯・ナデ	ナデ・条痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	5mm以下の黄褐, 3mm以下の黒色角閃石, 1mm以下の無色透明光沢粒を含む	
295	縄文土器 深鉢	口縁部	SA3埋土	貼付突帯・ナデ	ナデ・指頭痕	にぶい褐	にぶい基褐	2mm程の灰白, 1mm程の黒色角閃石を含む	
296	縄文土器 深鉢	口縁部	V層中	貼付突帯・ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい黄褐	3mm以下の黒色角閃石・橙・灰白・無色透明光沢粒を含む	
297	縄文土器 深鉢	口縁部	V層中	貼付突帯・ナデ	横方向のナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	5mm以下の褐色粒を含む	
298	縄文土器 深鉢	口縁部	V層中	貼付突帯・ナデ	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	1mm以下の黒色角閃石を含む	
299	縄文土器 深鉢	口縁部	SA3埋土	貼付突帯・ナデ	条痕・ナデ	にぶい黄褐	黄褐	1mm以下の黒色角閃石・半透明色粒を含む	
300	縄文土器 深鉢	口縁部	V層中	貼付突帯・ナデ	ナデ	にぶい褐	褐	3mm以下の灰白・黒色角閃石・褐色粒, 1mm以下の黒色透明・乳白色粒を含む	
301	縄文土器 深鉢	口縁部	V層中	貼付突帯・斜方向の条痕	ナデ	灰オリーブ	オリーブ黒	1mm程の灰白・黒色角閃石・無色透明粒を含む	

第7表 五ヶ村遺跡 出土土器観察表⑦

番号	器種	石材	出土位置	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)
12	ノミ状石器	緑色頁岩	SA1	2.0	1.3	0.4	1.5
13	ノミ状石器	緑色頁岩	SA1	2.1	1.4	0.3	1.1
14	ノミ状石器	緑色頁岩	SA1	2.7	1.3	0.4	1.7
15	磨製石鏃	赤色頁岩	SA1	2.9	1.3	0.4	2.0
16	磨製石鏃	緑色頁岩	SA1	2.3	1.2	0.2	0.8
17	磨製石鏃素材剥片	赤色頁岩	SA1	2.1	2.4	0.4	3.1
18	砥石	砂岩	SA1	4.5	3.1	2.1	44.6
19	敲石	火成岩系	SA1	2.8	2.8	2.5	21.7
20	敲石	砂岩	SA1	4.4	4.3	2.8	114.8
21	打製石斧	変成岩系	SA1	9.3	7.0	1.5	153.6
29	磨製石鏃素材剥片	黒色頁岩	SA2	10.5	4.1	0.9	35.6
30	砥石	砂岩	SA2	7.3	4.0	0.8	29.9
31	砥石	砂岩	SA2	2.5	2.9	0.3	3.5
32	砥石	砂岩	SA2	9.2	8.3	1.2	130.9
33	磨石	火成岩系	SA2	9.7	9.5	4.5	624.1
49	原石	赤色チャート	SA3	8.2	7.1	5.8	456.2
54	磨製石鏃	黒色頁岩	SA4	2.5	1.0	0.2	0.7
55	磨製石鏃	黒色頁岩	SA4	1.8	1.5	0.2	0.7
56	磨製石鏃	黒色頁岩	SA4	1.9	1.3	0.2	0.8
57	磨製石鏃未製品	黒色頁岩	SA4	3.1	1.6	0.2	1.3
58	磨製石鏃未製品	黒色頁岩	SA4	2.6	1.7	0.4	1.5
59	砥石	砂岩	SA4	14.7	7.0	2.4	369.2
60	線刻のある礫	砂岩	SA4	5.2	2.9	2.9	66.8
61	磨石	砂岩	SA4	10.8	8.8	5.0	916.5
62	敲石	火成岩系	SA4	5.2	5.0	4.6	157.2
109	敲石	砂岩	SA5	4.5	3.0	2.0	56.6
110	磨石	火成岩系	SA5	4.0	5.7	2.7	145.2
111	磨製石鏃	赤色頁岩	SA5	3.0	1.8	0.3	2.3
112	磨製石鏃	赤色頁岩	SA5	3.0	1.6	0.3	1.8
113	磨製石鏃	黒色頁岩	SA5	3.5	1.7	0.3	2.1
114	磨製石鏃素材剥片	黒色頁岩	SA5	4.5	2.4	0.6	6.6
115	原石	白色チャート	SA5	8.1	5.6	4.7	290.6
116	砥石	砂岩	SA5	24.9	9.8	7.6	2090.0
117	砥石	砂岩	SA5	25.9	16.9	9.6	3800.0
187	打製石鏃	サヌカイト	SA3	1.6	1.1	0.3	0.3
188	打製石鏃	サヌカイト	SA3	2.0	1.6	0.4	0.8
189	打製石鏃	サヌカイト	V層中	1.9	1.5	0.3	0.6
190	石錐	サヌカイト	V層中	1.9	1.7	0.5	0.8
191	異形石器	サヌカイト	V層中	4.3	2.7	0.5	5.1
192	打製石鏃	姫島産黒曜石	SA4	2.4	1.6	0.4	0.8
193	石核	姫島産黒曜石	V層中	2.7	2.2	1.4	7.9
194	石匙	姫島産黒曜石	SA1	2.1	5.3	0.9	5.2
195	棒状石製品	調査中	SA4	4.1	0.6	0.6	1.9
196	石錐	黒色黒曜石	III層中	1.8	1.2	0.4	0.7
197	異形石器	黒色黒曜石	SA3	2.1	1.8	0.3	0.6
198	剥片	黒色黒曜石	V層中	3.3	1.4	0.8	2.9
199	剥片	黒色黒曜石	SA4	3.5	1.6	0.5	1.9
200	剥片	黒色黒曜石	SA1	3.1	2.4	0.6	4.4
201	石核	黒色黒曜石	一括	3.0	2.6	2.2	15.7
202	打製石鏃	水晶	SA5-I層	1.5	1.8	0.4	0.6
203	打製石鏃	水晶	SA5-I層	2.2	2.0	0.7	2.7
204	打製石鏃	安山岩	V層中	2.8	1.1	0.3	0.4
205	削器	流紋岩	SA5	3.8	5.0	1.6	15.5
206	打製石鏃	チャート	SA4	2.9	1.9	0.5	1.6
207	打製石鏃	チャート	III層中	1.9	1.2	0.4	0.7
208	打製石鏃	チャート	III層中	1.5	1.6	0.3	0.3

第8表 五ヶ村遺跡 出土石器観察表①

番号	器種	石材	出土位置	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)
209	打製石鏃	チャート	V層中	1.8	1.7	0.3	0.7
210	打製石鏃	チャート	V層中	2.9	1.9	0.4	1.3
211	打製石鏃	チャート	SA4	2.5	1.9	0.5	2.2
212	打製石鏃	チャート	SA5	2.6	2.2	1.9	3.9
213	スクレイパー	チャート	SA5-III層	1.9	1.9	0.6	2.1
214	楔形石器	チャート	V層中	3.1	2.3	1.0	8.0
215	石錐	チャート	SA3	1.5	1.7	0.4	0.9
216	打製石鏃未製品	チャート	SA5-I層	2.9	2.0	0.6	3.2
217	打製石鏃未製品	チャート	V層中	3.2	2.6	0.9	7.2
218	打製石鏃未製品	チャート	SA5	2.8	2.6	0.8	5.3
219	石錐	チャート	SA4	4.0	2.3	1.3	7.5
220	異形石鏃	チャート	SA4	2.0	1.8	0.6	1.5
221	打製石鏃未製品	チャート	II層中	2.8	2.4	0.6	2.6
222	打製石鏃未製品	チャート	SA4	3.0	2.2	1.1	6.5
223	打製石鏃未製品	チャート	SA4	3.1	2.9	1.1	8.4
224	石錐	チャート	V層中	4.8	1.8	0.9	4.8
225	異形石鏃	チャート	SA3	3.0	1.6	1.7	2.9
226	打製石鏃未製品	チャート	SA5	3.7	3.7	1.4	14.7
227	尖頭器	チャート	V層中	4.5	4.4	1.2	21.8
228	剥片	チャート	V層中	4.9	1.8	0.9	6.5
229	削器	チャート	V層中	4.5	2.5	1.0	8.7
230	二次加工ある剥片	チャート	SA5-I層	5.3	1.8	0.9	5.9
231	尖頭器	チャート	SA3	2.7	2.3	0.5	2.8
232	異形石鏃	チャート	SA5-I層	6.3	3.0	0.7	12.3
233	石核	チャート	SA3	4.3	1.7	1.2	11.4
234	石核	チャート	SA3-II層	3.9	2.1	1.0	10.6
235	石核	チャート	SA4	3.7	1.5	0.7	3.7
236	石核	チャート	V層中	3.3	2.6	1.4	
237	石核	チャート	V層中	3.6	3.5	2.5	34.6
238	石核	チャート	V層中	4.6	2.4	1.1	11
239	石核	チャート	SA3	4.0	4.4	2.4	58.1
240	削器	珪質岩	V層中	9.4	5.2	1.6	77.9
241	打製石斧	火成岩系	V層中	13.7	7.0	1.9	191
242	打製石斧	火成岩系	V層中	11.7	8.4	2.3	299.9
243	二次加工ある剥片	ホルンフェルス	V層中	8.8	6.0	1.3	77.7
244	二次加工ある剥片	火成岩系	SA5-I層	7.0	4.0	1.2	34.5
245	磨石	安山岩	V層中	12.8	8.1	5.2	898.3
246	砥石	砂岩	V層中	47.5	24.8	9.2	5000.0
247	磨製石鏃	緑色頁岩	II層中	2.2	1.2	0.3	0.8
248	磨製石鏃	緑色頁岩	V層中	3.0	1.3	0.3	1.3
249	磨製石鏃	緑色頁岩	V層中	3.5	1.2	0.3	1.3
250	磨製石鏃	赤色頁岩	IV層中	4.3	1.9	0.3	3.3
251	磨製石鏃	黒色頁岩	V層中	3.4	1.9	0.4	2.6
252	磨製石鏃	黒色頁岩	V層中	3.3	2.7	0.3	3.7
253	磨製石鏃	緑～黒色頁岩	V層中	1.6	1.8	0.2	0.8
254	磨製石鏃	黒色頁岩	III層中	4.1	2.3	0.4	5.2

第9表 五ヶ村遺跡 出土石器観察表②

第6節 調査のまとめ

五ヶ村遺跡は縄文時代早期・縄文時代晩期・弥生時代中期末～後期の遺跡である。ここでは、五ヶ村遺跡で確認された遺構・遺物について、まとめと若干の考察をおこなう。

(1) 出土弥生土器

遺構内外から多くの弥生土器が出土した。分類(第II章第3節 参照)をもとに、土器の位置付けをおこなう。

■甕…A～E類に分類した。

甕A類・甕B類…厚手で外反する口縁をもつ。胴部施文は、工字突帯・櫛描き波状文・無文の3種類がある。胎土は、黒色角閃石を多く含み、やや脆弱である。口縁部形態によって、甕A類(逆L字口縁)と甕B類(斜方向に外反する口縁)に分類した。

大野川上流域において、このタイプの編年が確立され(文献1)、①甕A類の口縁(逆L字状)から甕B類の口縁(斜方向に外反する)へ変化する・②工字突帯の横走する貼り付け突帯条数が多条から1条へと変化する・③頸部下の膨らみが出て、長胴化し、胴部最大径が口縁部付近から頸部下付近へと変化する・④底部が平底から尖底へと変化する、という器形や文様の形態的変遷が追えるようである。これら①～④の変化要素の組み合わせから考えると、本遺跡の甕A類が弥生時代中期末～後期前葉頃、甕B類の古式が中期末～後期中葉頃、B類の新式が後期中葉～後期後葉頃に時期比定できる。ただし、高千穂町周辺の遺跡から出土する工字突帯をもつ甕は、多条のものが多く、突帯の条数が時期差を表すのではなく、地域性を表している可能性があり、更なる検討が必要であろう。また、類似する甕は、南平第3遺跡(文献4)・薄糸平遺跡(文献2)・岩戸五ヶ村遺跡(文献3)などの高千穂町内の遺跡や大野川上流域の遺跡(文献1)で数多く確認されており、いわば「在地系」の甕と言える。

甕C類…薄手で口縁が大きく「く」字状に外反する。胎土は他の甕類と違い、小礫を多く含む。底部はSA5出土(104)の土器などが該当する。

このタイプの甕は、(i)底部形態は尖底気味の平底・(ii)外反する口縁部・(iii)雑ではあるが面取りされている口唇部・(iv)ハケ目かナデによる器面調整、といった共通点をもつ。この(i)～(iv)の特徴から、甕B類と甕D類の中間的要素をもつ土器群であると考えられる。周辺地域の編年観を参考にすると、甕D類より後出、甕B類の新式と共伴する(後期中葉～後期後葉頃)可能性がある。類似する甕は、同じ高千穂町内の南平第3遺跡などで確認され、「在地系」の甕だと考えられる。

甕D類…熊本地域を中心に分布する黒髪式系の土器である。本遺跡では口縁部片が多く出土する。底部片はわずかであり、SA1出土(10)などが該当すると考えられる。含有物の少ないきめ細かい胎土・丁寧なヨコナデの器面調整・上底の底部を特徴とする。口縁部形態は、鋤先状口縁(41・133・136)と外反口縁(1・38・39・134・137)に大別される。周辺地域の編年観を参考にすると、甕A類・甕B類の古式・甕E類などと共伴する(中期末～後期前葉頃)可能性がある。

甕E類…大分海岸部地域を中心に分布する下城式系の土器である。胎土は、多量の乳白色長石を含む。器形は口縁部が最大径となるタイプで、甕A類と類似する。甕A類・甕B類の古式・甕D類などと共伴する可能性がある。

■壺…A～C類の3類に分類した。

壺A類…大野川流域を中心とする安国寺式の範疇に入る。殆どが二重口縁のタイプである。本遺跡では26・42・51・97・98・99・100・159・161・165・166・167が該当する。51のみが、二次口縁を設けないタイプであり、古式（後期前葉～中葉頃）のタイプに相当する。他は二次口縁部に櫛描き波状文を加えるタイプであり、比較的新式（後期中葉～後葉頃）のタイプに相当する。

壺B・C類…壺C類（5）は免田式土器である。壺B類は、細片である上に少量でバラエティーがあり、分類することは難しい。

その他、SA4と遺構外より凹線文系の高坏が出土している。時期的には中期末～後期前葉頃に位置付けられよう。

このように分類した土器群は、周辺地域の編年と照らし合わせると、弥生時代中期末頃から後期後葉頃にかけて存在すると考えられる。また、「胎土」に着目すると、土器型式と特定の含有物が対応することがわかった。肉眼観察において、甕A類と甕B類は阿蘇4テフラに多く含まれることの多い黒色透明角閃石を多量に含む。甕C類は径1～5mm程度の小礫を多量に含む。甕D類は殆ど含有物を含まない。甕E類は、乳白色長石を多量に含む。

（2）竪穴住居跡

調査区域内からは5軒検出された。各竪穴住居跡の概要データについては第10表に記している。SA1を除く4軒は東に傾斜する地形に沿って検出され、5軒個々が独立し重複しない。平面プランはいずれも方形または方形に近く、床面積は17.0～31.4m²（平均約24.4m²）である。柱穴は2本タイプ（SA2・SA3）と4本タイプ（SA1・SA4・SA5）の2通りがあり、床面積の大きいものに4本タイプを、床面積の小さいものに2本タイプを選択していたようである。この傾向は、同じ高千穂町内の宮ノ前第2遺跡（文献5）や南平第3遺跡（文献1）などの当該期の他遺跡でも共通している。

SA1・SA2・SA4内からベッド状遺構が検出された。これらは、間仕切りがある宮崎南部のタイプと異なり、竹田市辻原遺跡2号住居跡（文献6）や竹田市石井入口遺跡43号竪穴（文献1）など大野川上・中流域で確認されているような間仕切りがないタイプであり、大野川上・中流域を中心とする地域との関連が考えられる。ただし、本遺跡のベッド状遺構は、対向する壁際2方向のみのタイプであり、壁周を全周する大野川上・中流域のタイプと若干異なる。

住居跡番号	床面規模 (長辺×短辺)	面積 (m ²)	柱穴数	ベット状遺構	土杭形態	炉跡と考えられる土杭 (長軸×短軸×深さ)
SA1	550×530cm	29.2	4	2方向	不整楕円形×1	120×105×10cm
SA2	500×440cm	22.0	2	2方向	不整楕円形×2	70×50×5cm・50×50×10cm
SA3	430×395cm	17.0	2	なし	円形×2	52×52×8cm・30×30×22cm
SA4	530×440cm	22.3	4	1方向	隅丸三角形1・不整形1	90×75×25cm・60×35×10cm
SA5	640×490cm	31.4	4	なし	不整楕円形×1	128×68×20cm

第10表 五ヶ村遺跡検出竪穴住居跡一覧

各竪穴住居跡から土坑が1～2基ずつ検出された。土坑は壁際にあり、平面形が円形もしくは不整楕円形を呈し、浅い皿状である。付近から多量の炭化物や焼土が検出され、炉跡などの用途が推測できる。土坑の位置や形状等から考えると、ここでも大野川上・中流域の特徴と類似することが指摘できる。また、SA5では、住居中央部付近に炭化材が放射状に出土した。この炭化材は、樹種同定の分析結果「クリ」と判明した（第II章第5節 参照）。クリは建築材などに適しており、出土状態などから考えても、覆屋が焼失した際の炭化材と推測できる。

（3）弥生土器組成からみた竪穴住居跡の位置付け

遺物は、遺構埋没中に混入したものが多く、必ずしも全てが遺構に伴うものであると判断できないものの、出来る限り本遺跡の弥生土器分類（第II章第3節 参照）をもとに各竪穴住居跡の位置付けを土器の組み合わせによっておこなう。組み合わせは第11表にまとめた。

	甕A	甕B(古)	甕B(新)	甕C	甕D	甕E	壺A(古)	壺A(新)	凹線文	時 期
SA1	○	○			○					中期末～後期前葉頃
SA2			○	○				○		後期中葉～後期後葉頃
SA3	○	○			○	○	○			後期前葉～後期中葉頃
SA4	○	○							○	中期末～後期前葉頃
SA5	○	○	○	○		○		○		後期中葉～後期後葉頃

第11表 竪穴住居跡出土弥生土器の組み合わせ

また、それぞれの土器型式の中心分布地からとって、甕A類・甕B類・甕C類を「在地系」、甕D類を「熊本系」、甕E類・壺A類を「大分系」、凹線文土器を「瀬戸内系」と考えることができる。これらの要素が各竪穴住居跡においてどのように組み合わせられているか先程の年代観と併せて考えると、本遺跡の土器は、「在地系・熊本系・（瀬戸内系）」→「在地系・熊本系・大分系」→「在地系・大分系」へと変化していくようである。

五ヶ村遺跡検出の竪穴住居跡5軒は、検出当初、配置・規模・構造が比較的類似しており、一時期に集中して営まれた集落であると理解していた。しかし、出土土器などから検討したところ、正確な推移を辿ることは難しいが、弥生時代中期末もしくは後期前葉頃から後期中葉もしくは後期後葉にかけて数次にわけて営まれていた可能性が高くなった。

（4）竪穴住居跡出土の石器組成

本遺跡のSA1～SA5の埋土中より出土した石器は、第12表のような組成である。大半の竪穴住居跡からは、磨製石鏃・同未製品・素材剥片・砥石・敲石・磨石・チャート原石が出土している。これは、高千穂盆地における弥生時代中期末～後期後葉の石器組成を示すと考えられる。

	石器組成 (器種名に付したアルファベットは色を示す。G=緑, R=赤, B=黒, W=白)
SA1	ノミ状石器・磨製石鏃RG・同RG素材・打製石斧・砥石・敲石・チャート原石B
SA2	磨製石鏃GB素材・二次加工ある剥片・砥石・磨石
SA3	チャート原石R
SA4	磨製石鏃B・同B未製品・砥石・敲石・磨石・線刻のある礫
SA5	磨製石鏃RB・同B素材・砥石・敲石・磨石・チャート原石W

第12表 竪穴住居跡出土石器の組成

磨製石鏃は、色に注目すると赤・緑・黒に大別され、最も多い黒に対して緑は少ない。色・形態の組み合わせは各竪穴住居跡で異なる。さらに、包含層中のものには紡錘形・砲弾形があり、緑のものは赤・黒に対して細身な特徴をもつ。製作工程別にみると、製品+未製品、未製品のみなどの組み合わせがあり、色別も考慮すると複雑なものとなる(第13表)。ノミ状石器は、磨製石鏃と同系の石材が用いられる。

砥石は砂岩を用いる傾向がある。板状で扁平なものと、塊石を利用したものがある。SA2・SA5からは、鉄錆と推測される黄橙褐色～褐色の付着物をもつ砥石が出土しており、注目される。本遺跡からは鉄器の出土はみられないものの、これらの砥石から見えない鉄器の存在を知ることができる。高千穂盆地において弥生中葉末～後期後葉頃に鉄器利用のあったことを示すであろう。

敲石はⅠ類：球状で全面に敲打痕のあるもの、Ⅱ類：礫の端部に敲打痕のあるものに、磨石はⅠ類：円礫をそのまま利用するもの、Ⅱ類：円礫周縁を敲打整形し、箱石罅様の形状を作って利用するものに大別される。磨石Ⅱ類には大小がある(第14表)。

チャート原石は角礫で、剥片石器素材とはなりえないような粗質のものである。用途等不明であるが、いくつかの竪穴住居跡に共通してみられる現象として興味深い。線刻のある礫は往時の精神性などを考える上で重要な資料となろう。今後の類例を待ちたい。

	形態	赤	緑	黒
SA1	紡錘形, 分厚い	●○	●○	
SA2			○	○
SA3				
SA4	砲弾形(小), 五角形			●○
SA5	砲弾形(大)	●		●○

●製品・○未製品・素材剥片

第13表 磨製石鏃の色と竪穴住居跡の関係

	敲Ⅰ	敲Ⅱ	磨Ⅰ	磨Ⅱ
SA1	●	●		
SA2			●	
SA3				
SA4	●			●大
SA5		●		●小

第14表 敲石・磨石と竪穴住居跡の関係

(5) 包含層等出土石器の位置付け

包含層や竪穴住居跡の埋土中からは数多くの剥片石器が出土した。剥片石器の石材は、在地石材であるチャートの占める割合が最も高く、姫島産黒曜石や黒色の黒曜石、サヌカイト、在地石材の水晶や流紋岩が少数みられる。高千穂盆地内の先史時代における石器石材は、在地産チャートの多用に特徴付けられ、本遺跡でもその傾向と合致している。

包含層出土石器は土器から推して、押型文系土器群、黒色磨研系土器群、弥生土器群のいずれかに伴うとみてよからう。そこで、時期を推定できたいくつかの石器について、周辺地域の事例なども参考にしながら触れることとする。

押型文系土器群に伴うものとして、チャート製石器群のうち第20図220・225・232の異形石鏃や227・231の尖頭器などが該当しよう。黒色磨研系土器群に伴うものとして、黒色の黒曜石製の剥片・石核が推定される。これらは、調整のあまり施されない打面からパンチを用い、上下両方向から縦長剥片の剥離を企画したものである。同様の技法を持つ石器群として西北九州に特徴的な鈴桶技法が挙げられ、石材に黒曜石を嗜好する点でも一致する。なお、縦長剥片という共通項で捉えると、205・229の削器、219・224の石錐、228の剥片、230の二次加工ある剥片なども縦長剥片を素材としている。これらの石器についても、黒色磨研系土器群に伴う可能性を考えておきたい。

弥生後期頃と推定されるものとして、いくつかの打製石鏃がある。第20図187・188はともにSA3から出土した。これらは素材剥片の稜を石鏃の稜に取り込んだものであり、石材には少数派のサヌカイトが利用されている。石器表面の風化が比較的新しいことも重要であろう。SA4・SA5から出土した第20図211・212のチャート製打製石鏃は、212が未製品の余地を残すものの、平面三角形に粗く整形される点・裏面が平坦に仕上げられる点で共通する。平面三角形で裏面が平坦である特徴は、包含層出土の他石鏃と比べて異質であり、該期のものと推定したい。

棒状石製品は、マッチ棒大程の大きさで、両端に面的な摩滅が残される。類例は神殿遺跡B地区（文献4）にある。用途や所属時期については、今後も追究が必要である。

包含層出土石器の場合、とくに剥片石器ではその所属時期の特定に困難の伴う場合が多く、ここで示した石器の位置付けもまた同様である。今後の調査・整理の中で検討を継続したい。

（6）包含層等出土の縄文土器

出土した縄文土器は全て遺構外からの出土である。第Ⅱ章第3節に第Ⅰ類～第Ⅲ類に分類した。第Ⅰ類は縄文時代早期、第Ⅱ・Ⅲ類は縄文晩期に属する。

第Ⅰ類は押型文系土器群である。（A）直立気味の口縁・薄手の器壁・縦位の原体条痕＋横回転押型文の内面施文（255・271）。（B）やや外反する口縁・平均的な器壁・縦位の原体条痕＋横回転押型文の内面施文（256・264）。（C）外反する口縁・厚手の器壁・横回転押型文の内面施文（257・258・265～270・272・273）。の大きく3つに分類することができる。坂本嘉弘氏の編年（文献7）を参考にすると、（A）→（B）→（C）の変遷を辿るが、いずれも下管生B式土器の範疇に入ると考えられる。

第Ⅱ類は黒色磨研系土器群である。（a）外側に大きく開く口縁部をもつもの（278～282・285）・（b）頸部が短く折れるもの（284）・（c）口縁に鱗状突起をもつもの（286・287）・（d）口縁部を強く「く」字状に屈曲し、口縁部に2条の凹線を施すもの（289）に分類できる。一見、ばらつきがあるようにも見えるが、（a）・（d）が古閑式土器、（b）・（c）が黒川式土器の範疇に入ると考えられ、ある程度のまとまりがある。

第Ⅲ類は粗製深鉢土器群である。口縁部に1～3cmの凹面状の貼り付け突帯をもつ、いわゆる無刻目突帯文土器である。突帯の断面を観察すると様々な形態がある。その形態差は時期差を表す可能性があるが、現段階ではわからない。この無刻目突帯文土器は、岩戸五ヶ村遺跡（文献3）・神殿遺跡B・C

地区遺跡（文献4）・南平第3遺跡（文献4）・岩坪平遺跡（文献8）など高千穂盆地の数多く遺跡で確認されている。また熊本県北部にも多く確認される土器型式であり、第Ⅱ類同様、南九州縄文時代晩期の土器型式の一つ黒川式土器に比定されることが多い。本遺跡出土の縄文土器第Ⅲ類は、「黒川式土器」もしくはその併行期中九州特有土器型式の範疇に入ると考えられる。

【引用参考文献】

文献1：竹田市教育委員会 1992 『菅生台地と周辺の遺跡XV』

文献2：日本鉄道建設公団下関支社・高千穂町教育委員会 1978 『薄糸平遺跡』

文献3：高千穂町教育委員会2000 『岩戸五ヶ村遺跡』高千穂町文化財調査報告書第12集

文献4：宮崎県埋蔵文化財センター 1999 『神殿遺跡B・C地区 南平第3遺跡 南平第4遺跡 中ノ原遺跡』
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第17集

文献5：宮崎県教育委員会 1993 『吾平原第2遺跡 宮ノ前第2遺跡 城ノ平遺跡』

文献6：竹田市教育委員会 1991 『田井原遺跡・辻原遺跡』

文献7：坂本嘉弘 1998 「東九州の押型土器研究の現状と課題」『九州の押型土器－論攷編－』
九州縄文研究会

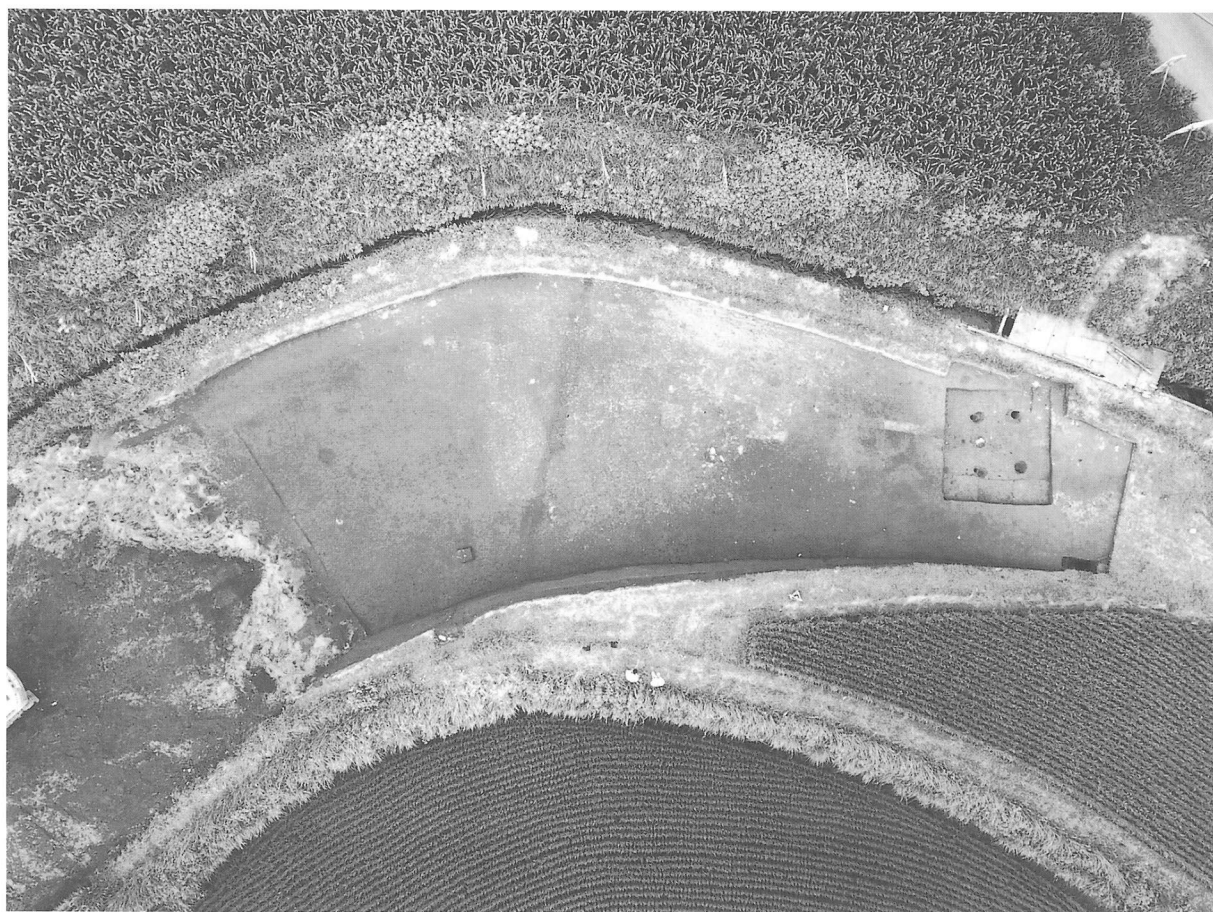
文献8：高千穂町教育委員会2000 『岩坪平遺跡』高千穂町文化財調査報告書第13集



①五ヶ村遺跡と遠景（西方向を望む）



①五ヶ村遺跡全景（上から）



②遺構検出状況（1）（北半分）



①遺構検出状況（2）（南半分）



②遺構検出状況（3）（SA1とSA2）



④SA1 検出状況（北側から）



③遺構検出状況（4）（SA3・SA4・SA5）



⑤SA1 主柱穴検出状況（上から）



①SA2 検出状況（北側から）



⑤SA5 遺物出土状況（北側から）



②SA3 検出状況（北西側から）



⑥SA5 遺物出土状況（南側）



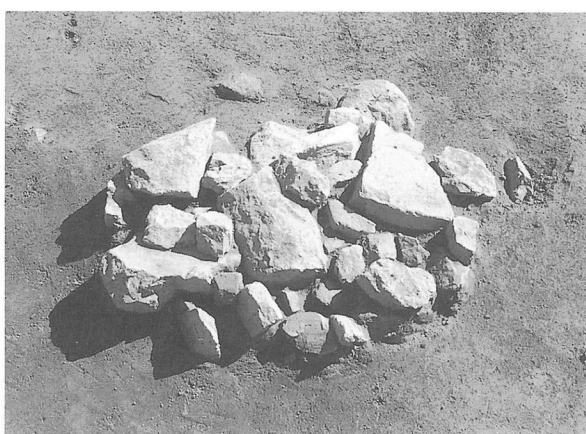
③SA4 検出状況（北西側から）



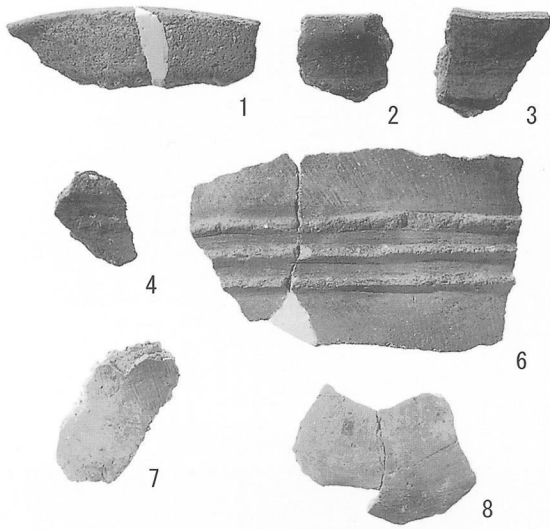
⑦SA5 炭化物検出状況



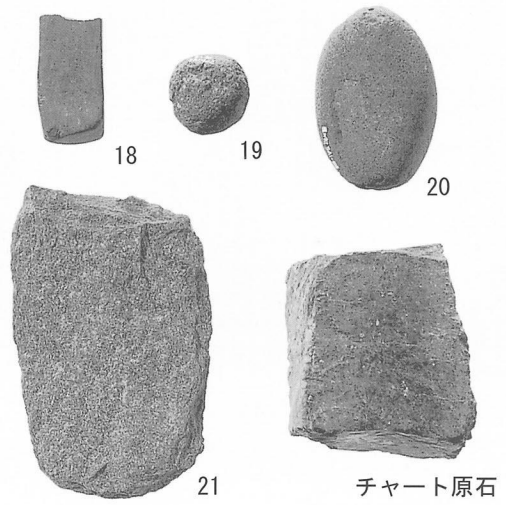
④SA5 検出状況（北側から）



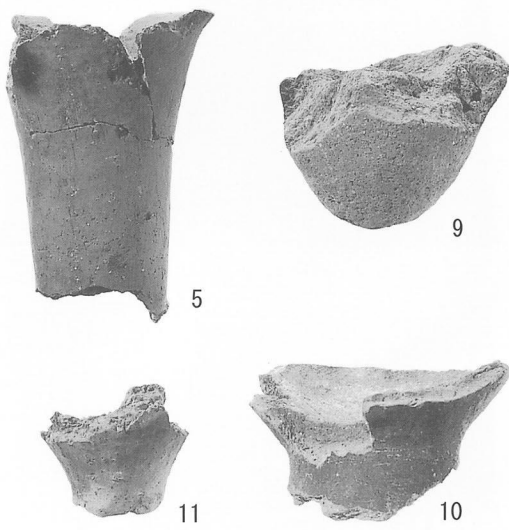
⑧1号集石状遺構検出状況（西側から）



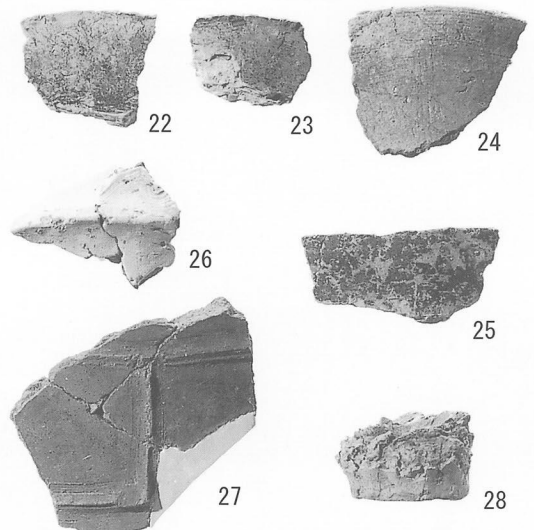
①SA1 出土弥生土器 (1)



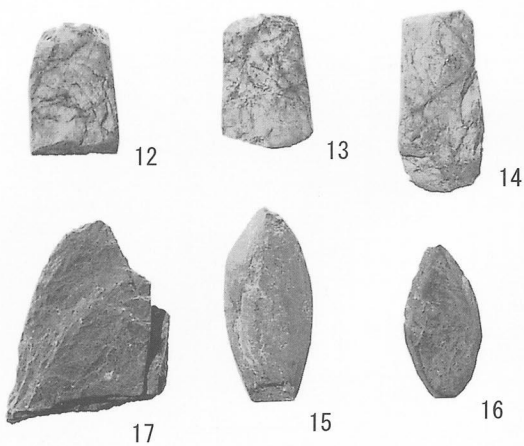
④SA1 出土石器 (2)



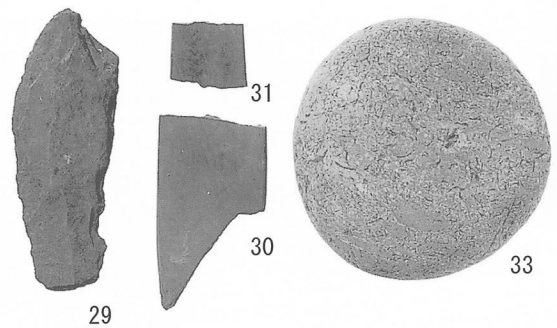
②SA1 出土弥生土器 (2)



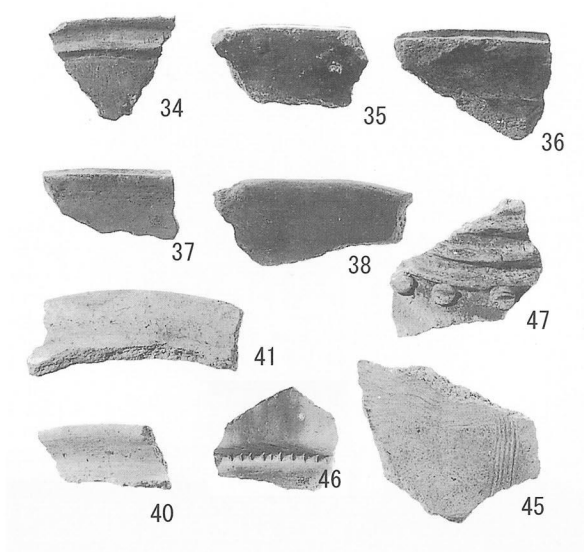
⑤SA2 出土弥生土器 (1)



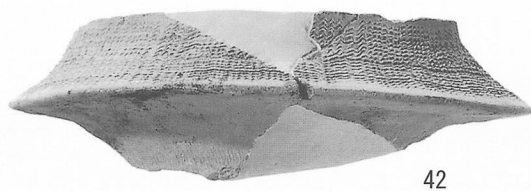
③SA1 出土石器 (1)



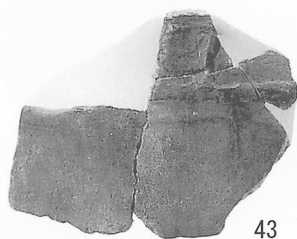
⑥SA2 出土石器 (1)



①SA3 出土弥生土器 (1)



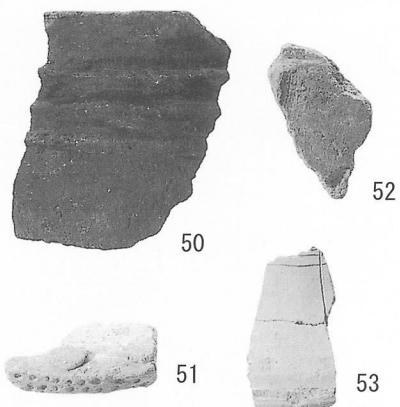
②SA3 出土弥生土器 (2)



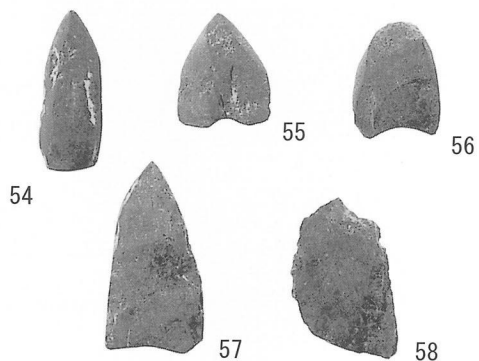
③SA3 出土弥生土器 (3)



④SA3 出土石器 (1)



⑤SA4 出土弥生土器 (1)



⑥SA4 出土石器 (1)



⑦SA4 出土石器 (2)



59



62



61

①SA4 出土石器 (3)



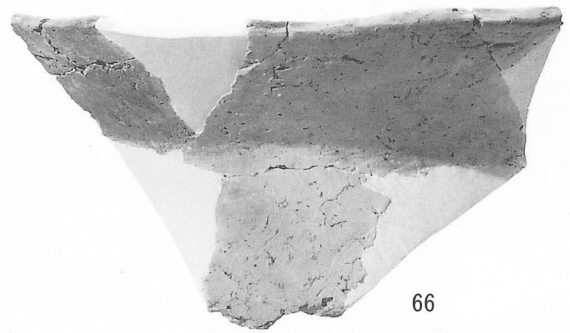
65

④SA5 出土弥生土器 (3)



63

②SA5 出土弥生土器 (1)



66

⑤SA5 出土弥生土器 (4)



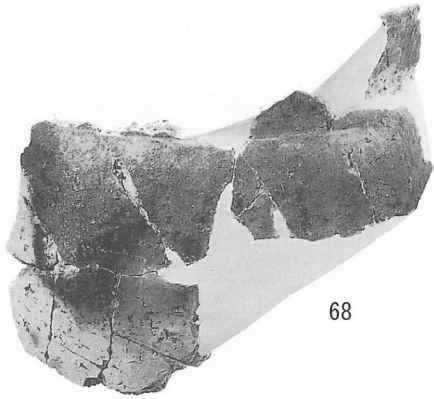
64

③SA5 出土弥生土器 (2)



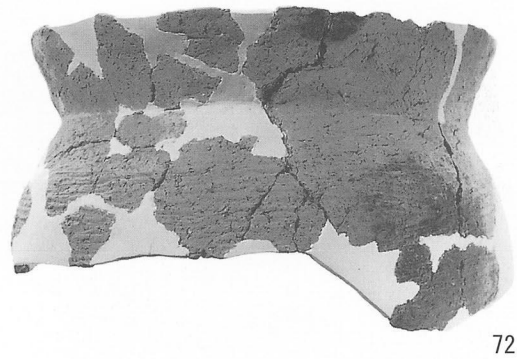
67

⑥SA5 出土弥生土器 (5)



68

①SA5 出土弥生土器 (6)



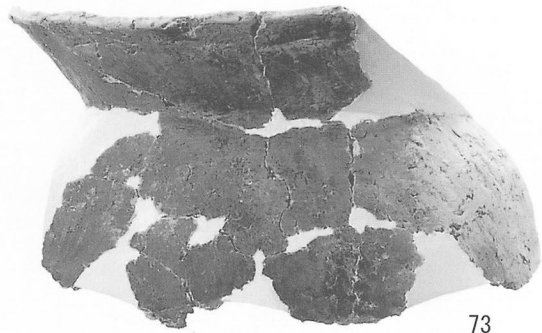
72

⑤SA5 出土弥生土器 (10)



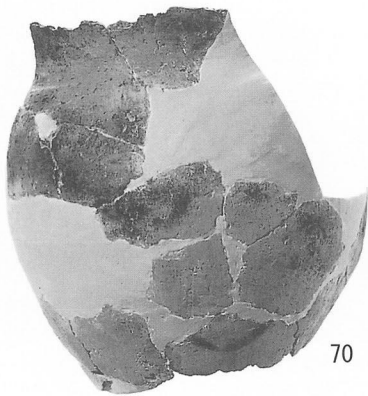
69

②SA5 出土弥生土器 (7)



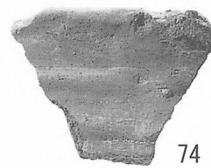
73

⑥SA5 出土弥生土器 (11)

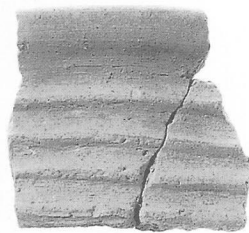


70

③SA5 出土弥生土器 (8)



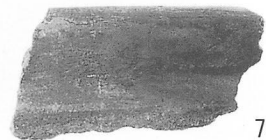
74



75

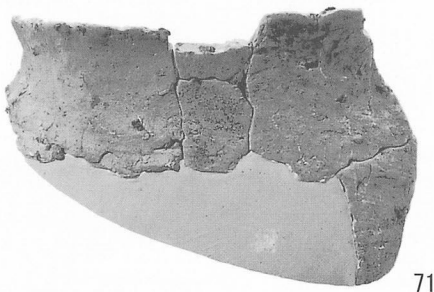


76



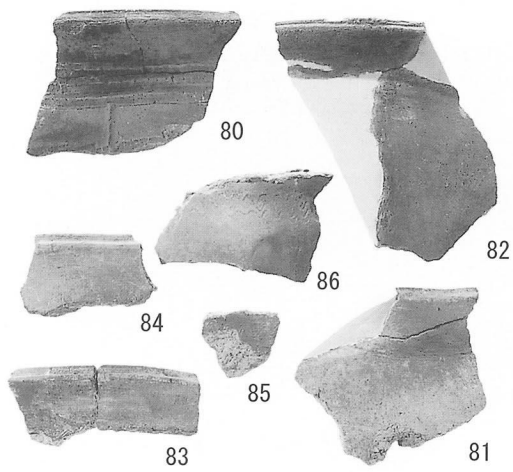
78

⑦SA5 出土弥生土器 (12)

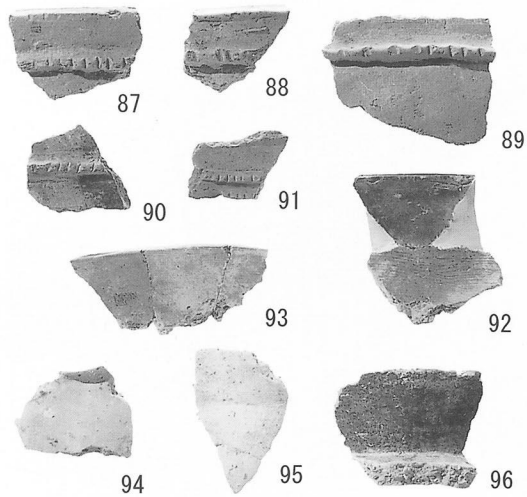


71

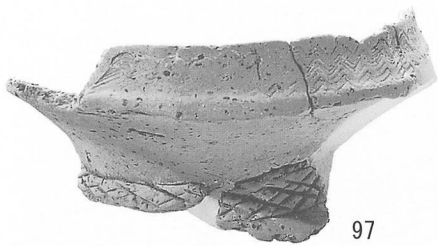
④SA5 出土弥生土器 (9)



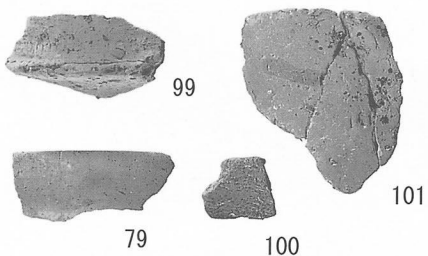
①SA5 出土弥生土器 (13)



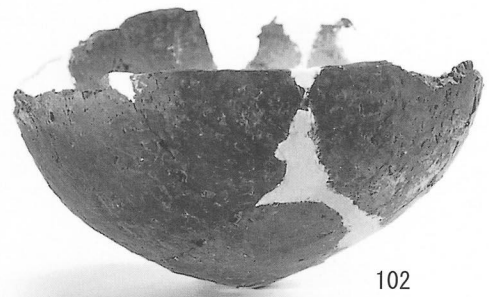
②SA5 出土弥生土器 (14)



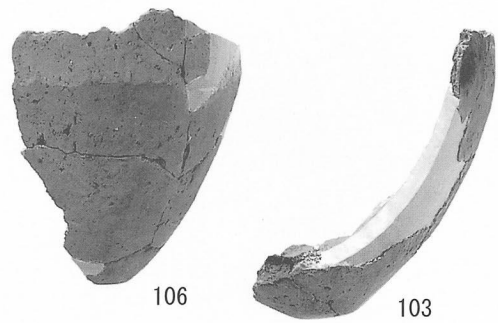
③SA5 出土弥生土器 (15)



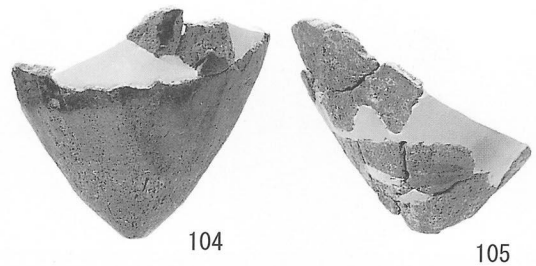
④SA5 出土弥生土器 (16)



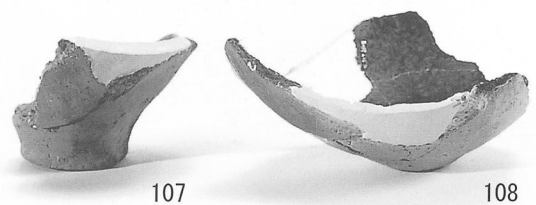
⑤SA5 出土弥生土器 (17)



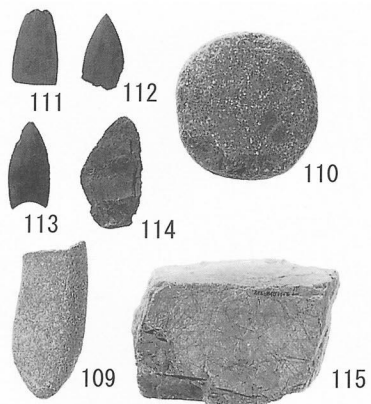
⑥SA5 出土弥生土器 (18)



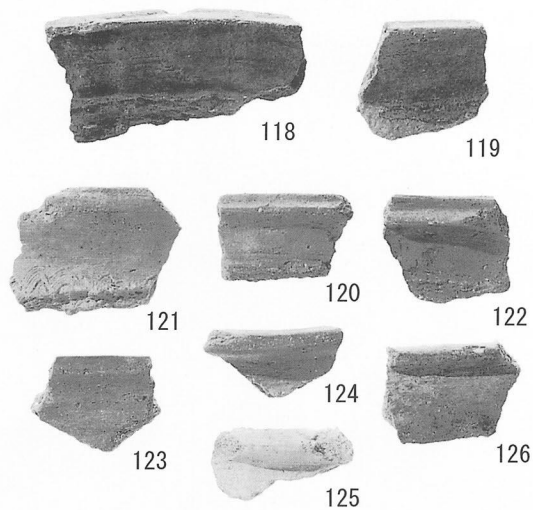
⑦SA5 出土弥生土器 (19)



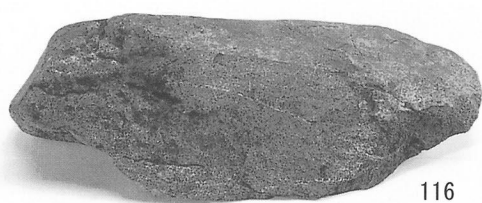
⑧SA5 出土弥生土器 (20)



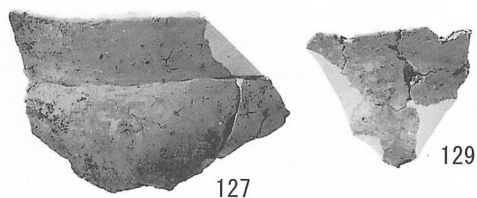
①SA5 出土石器 (1)



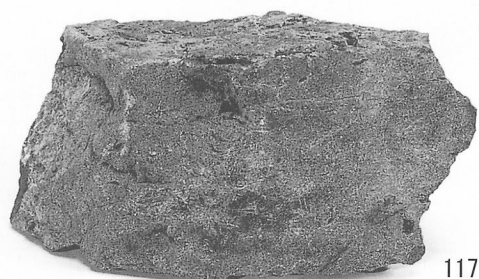
⑤包含层等出土弥生土器 (2)



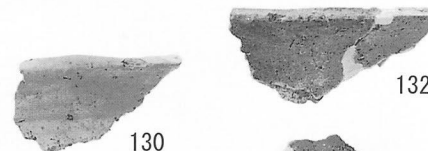
②SA5 出土石器 (2)



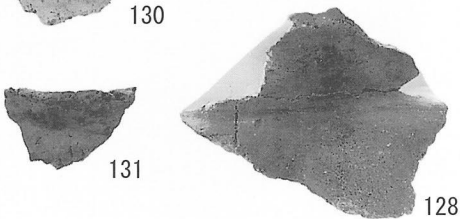
⑥包含层等出土弥生土器 (3)



③SA5 出土石器 (3)



⑥包含层等出土弥生土器 (3)



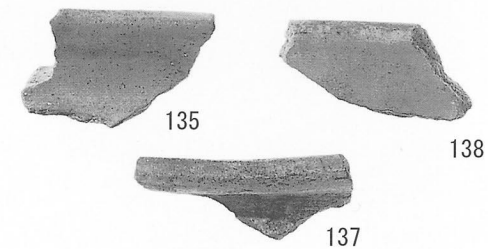
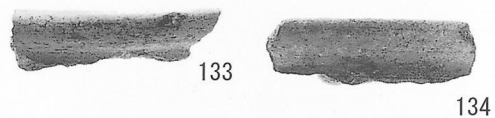
⑥包含层等出土弥生土器 (3)

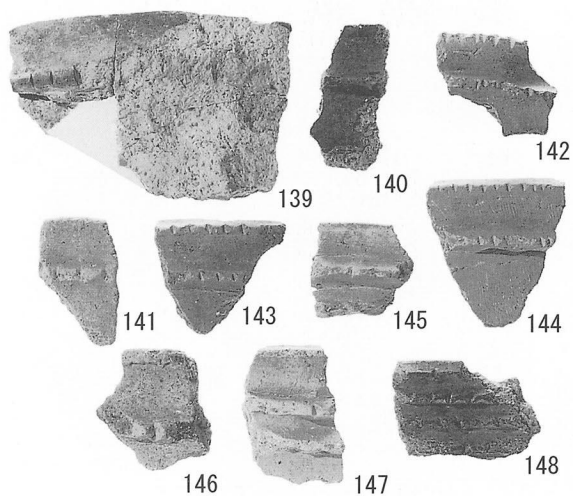


④包含层等出土弥生土器 (1)

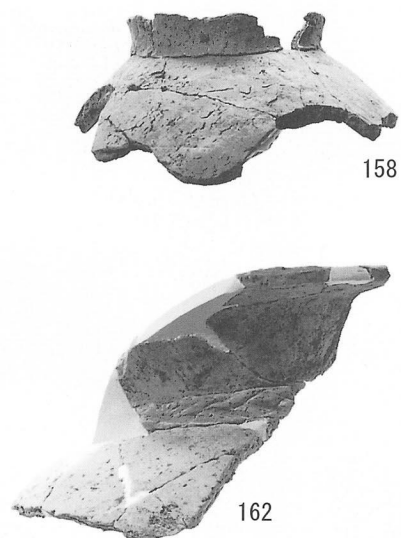


⑦包含层等出土弥生土器 (4)

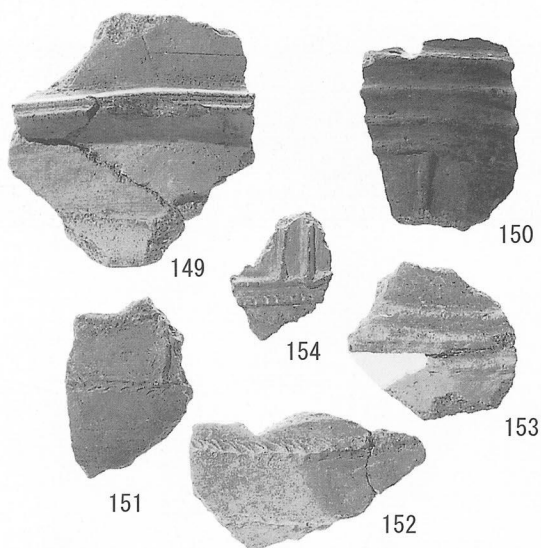




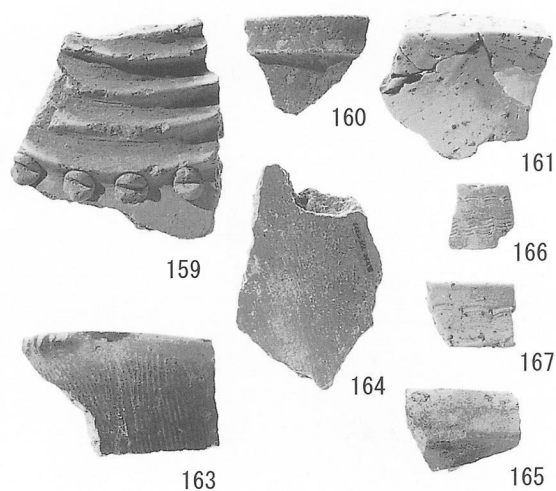
①包含層等出土弥生土器 (5)



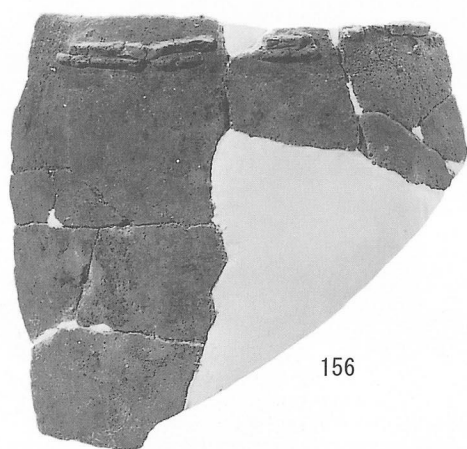
④包含層等出土弥生土器 (8)



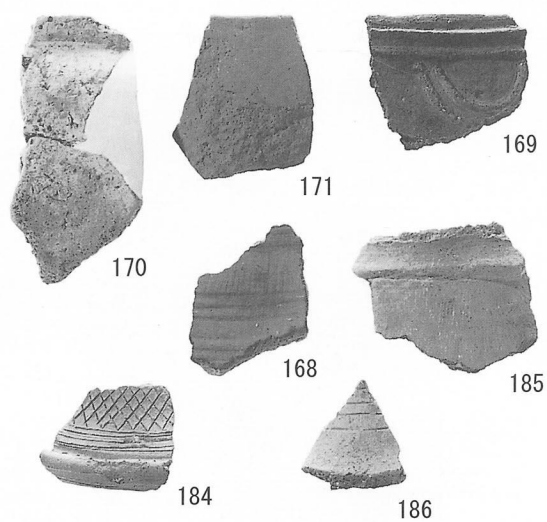
②包含層等出土弥生土器 (6)



⑤包含層等出土弥生土器 (9)



③包含層等出土弥生土器 (7)

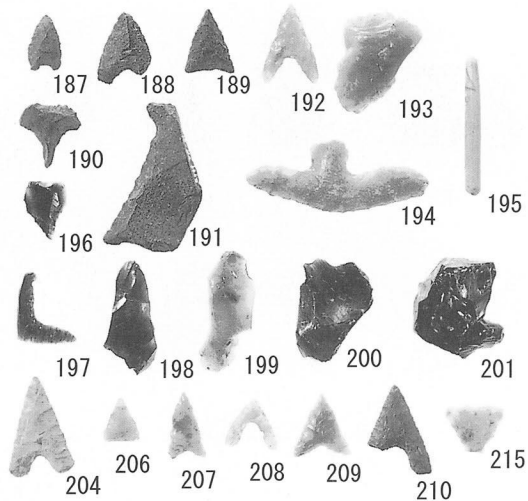


⑥包含層等出土弥生土器 (10)

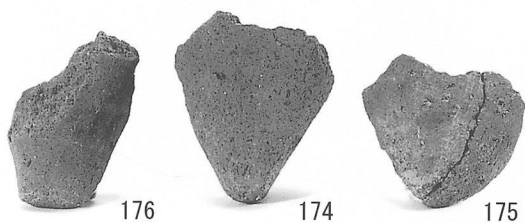


172

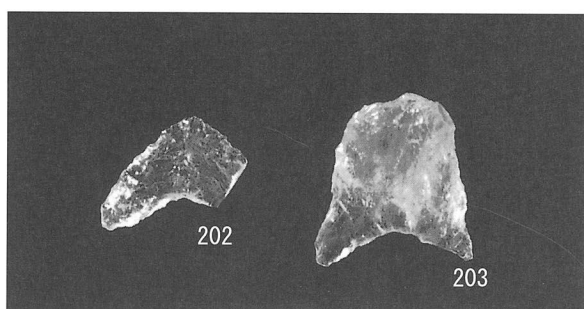
①包含層等出土弥生土器 (11)



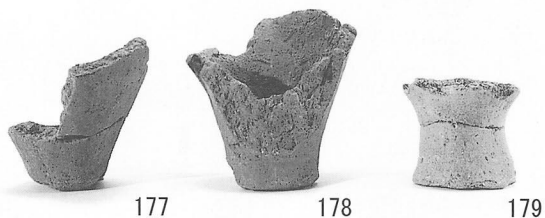
⑥包含層等出土石器 (2)



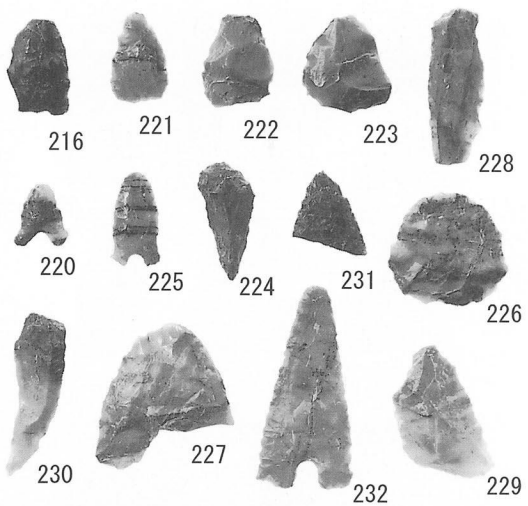
②包含層等出土弥生土器 (12)



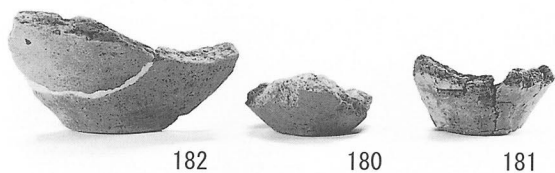
⑦包含層等出土石器 (3)



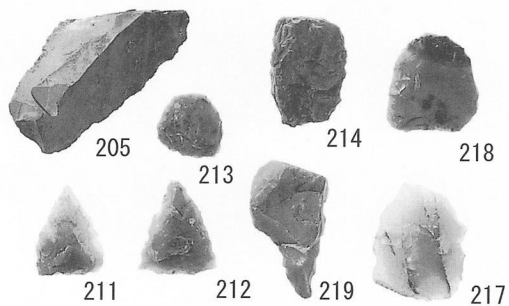
③包含層等出土弥生土器 (13)



⑧包含層等出土石器 (4)



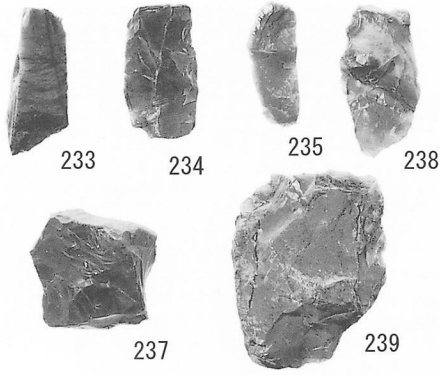
④包含層等出土弥生土器 (14)



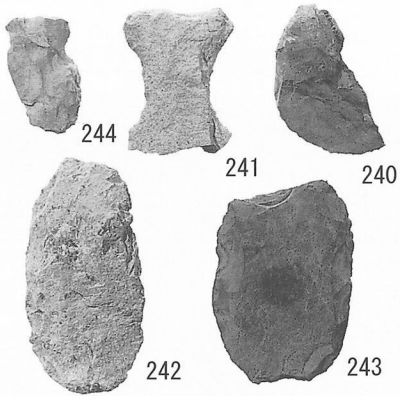
⑤包含層等出土石器 (1)



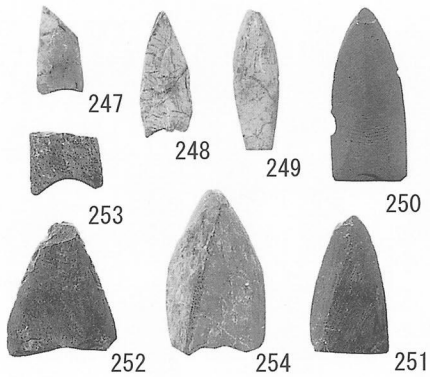
⑨包含層等出土石器 (5)



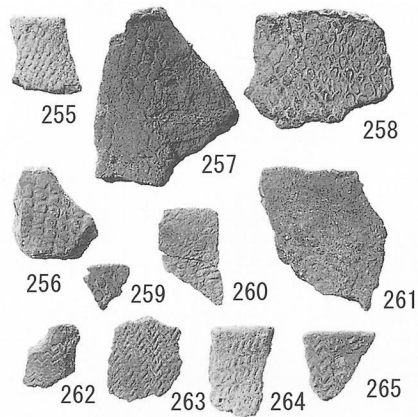
①包含層等出土石器 (6)



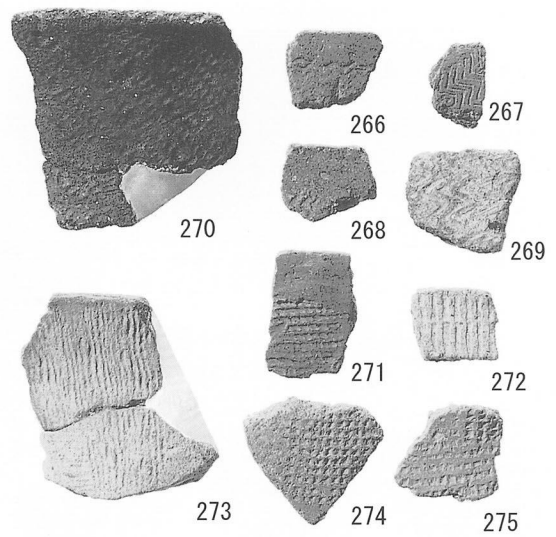
②包含層等出土石器 (7)



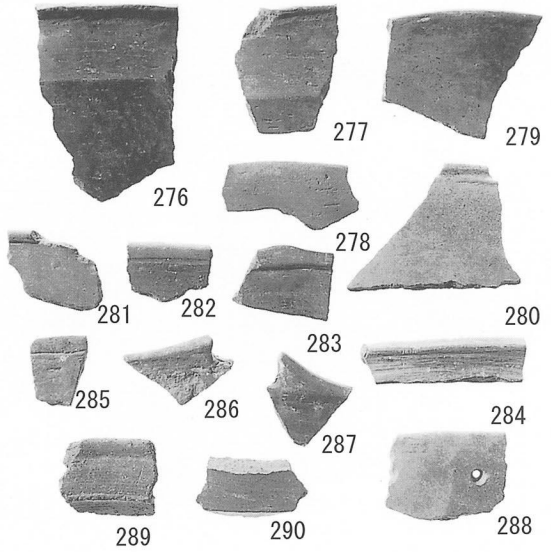
③包含層等出土石器 (8)



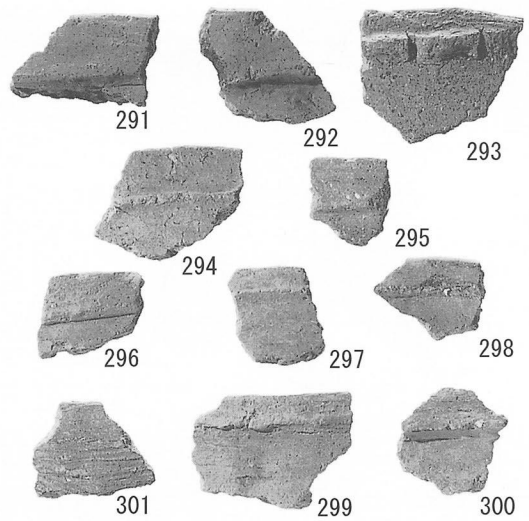
④包含層等出土繩文土器 (1)



⑤包含層等出土弥生土器 (2)



⑥包含層等出土弥生土器 (3)

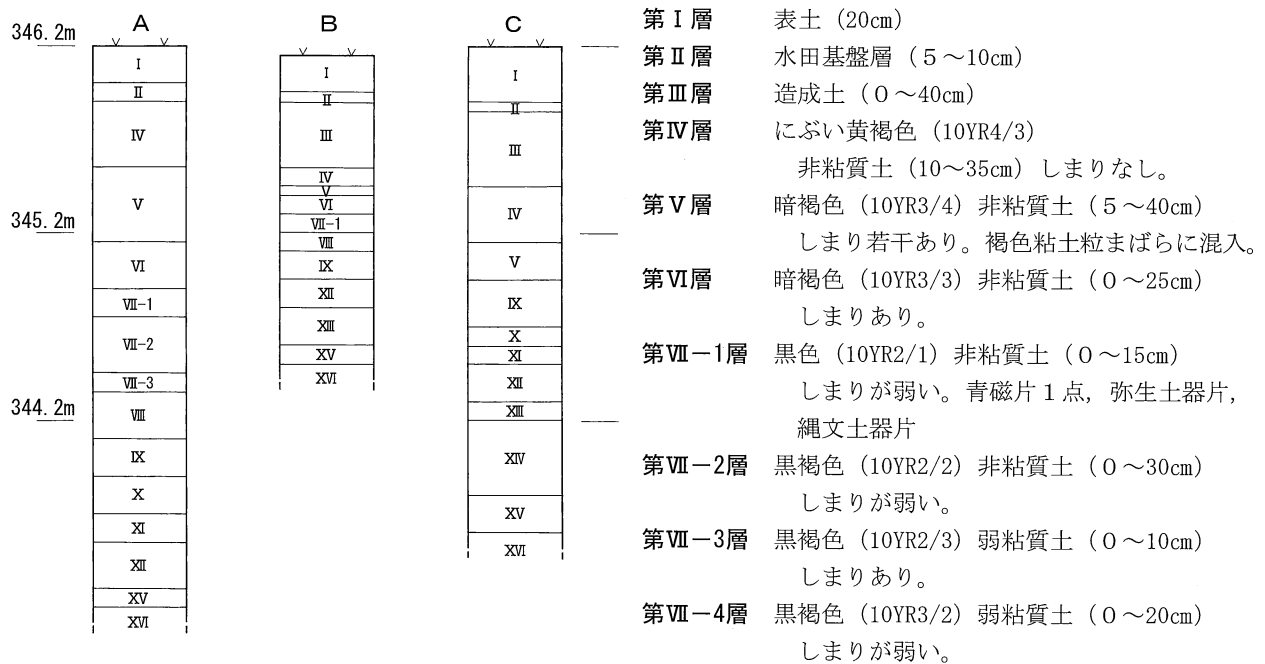


⑦包含層等出土繩文土器 (4)

第Ⅲ章 大野原遺跡の調査

第1節 遺跡の立地と基本層序 (第24図・第25図)

大野原遺跡は天香山から派生する丘陵東斜面の標高約345mに位置する。調査地の東側直下には、県道が南北に縦断し、更に東側は南北に貫流する岩戸川で谷が深く開析されている。調査対象地は北東方向に傾斜し中央部がやや張り出す地形を呈する。調査前状況は、丘陵を開削し傾斜に平行して造成した水田耕作地であり、若干不安定な堆積状況を呈していた。しかし、ある程度の土層堆積状況は把握でき、基本層序を構成することができた。以下、調査地各地点の土層柱状図と基本層序について記す。



第Ⅷ層 暗褐色 (10YR3/4) 非粘質土 (0~25cm) しまりあり。

1mm以下の炭化物粒極わずかに混入。縄文後期~晩期の土器片、石器

第Ⅸ層 褐色 (10YR4/4) シルト質土 (15~25cm) しまりあり。

第Ⅹ層 アカホヤ (10YR6/8) (0~20cm)

第Ⅺ層 暗褐色 (10YR3/4) 弱粘質土 (0~15cm) しまりあり。

第Ⅻ層 暗褐色 (10YR3/3) 粘質土 (15~25cm) しまりあり。縄文早期の土器、チャート剥片

第Ⅼ層 黒褐色 (10YR2/3) 粘質土 (0~20cm) ややしまりあり。

第Ⅽ層 黒褐色 (10YR2/2) 粘質土 (0~40cm) ややしまりあり。

第Ⅾ層 暗褐色 (10YR3/3) 弱粘質土 (10~20cm) ややしまりあり。

第Ⅿ層 褐色 (10YR4/4) 粘質土 *地山 しまりあり。

第24図 大野原遺跡 土層柱状図

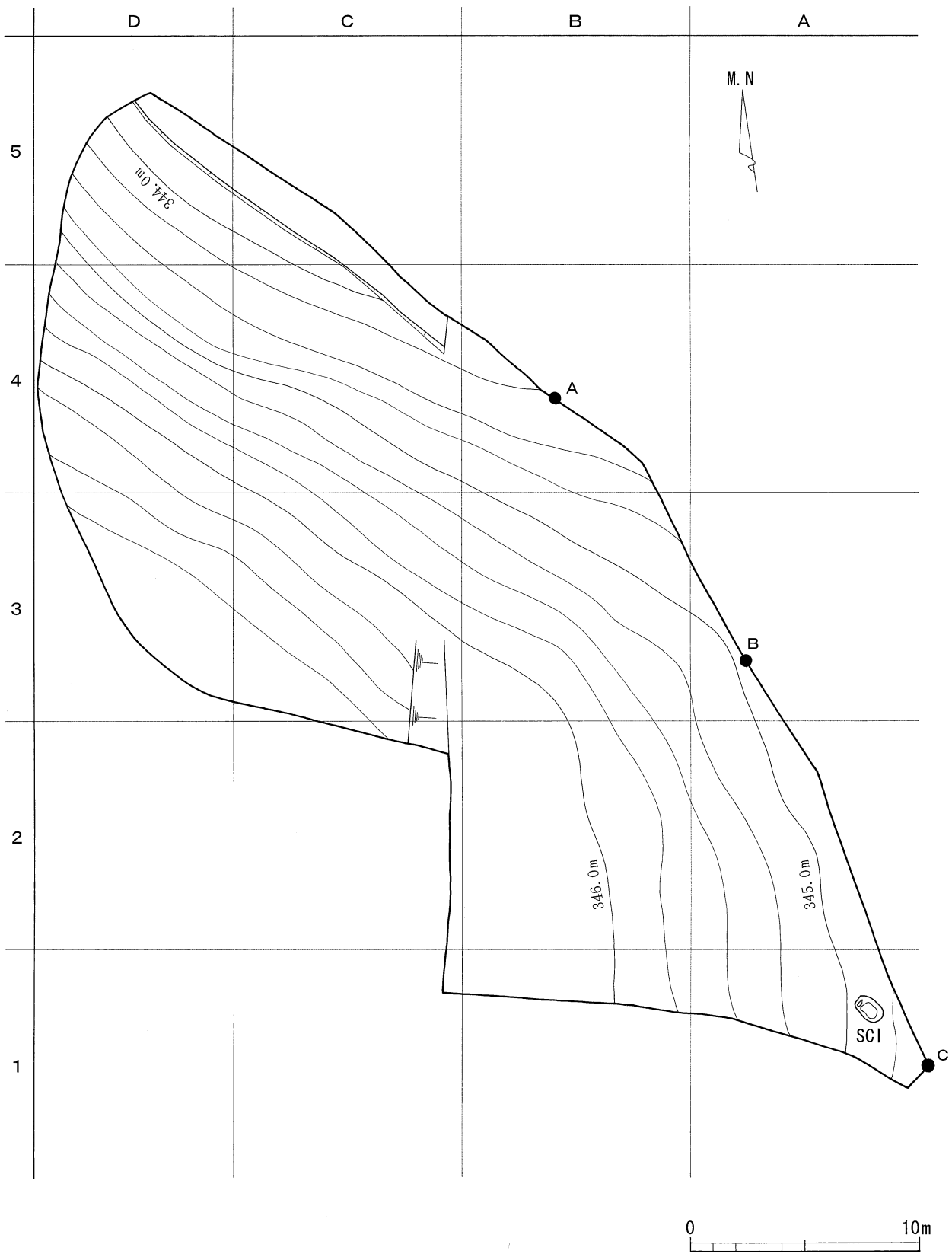
第Ⅰ層は耕作土，第Ⅱ層は水田基盤層で，第Ⅲ層から第Ⅵ層までが造成土である。調査地北および南東谷部の造成は最深部で約1m，中央張り出し部の造成は約60cmの堆積が見られる。第Ⅶ層は粘性と締まりの相違により4層に細分できる。この層は調査地北の低位部ほど厚く堆積し，縄文土器，弥生土器，青磁が混在することから，流れ込みにより形成された層と思われる。第Ⅷ層は第Ⅶ層と同様に，調査地北の低位部ほど堆積が厚く，調査地南側には堆積が見られない。第Ⅷ層からは縄文後期～晩期の土器，磨製石斧，打製石斧，磨製石鏃，打製石鏃，チャート製剥片が出土している。第Ⅸ層から第Ⅻ層までは，調査地北および南東谷部に堆積するが，中央張り出し部には堆積が見られない。第Ⅻ層からは縄文早期の土器やチャート剥片などが出土し，第Ⅻ層上面で第Ⅻ層を埋土とする土坑を検出している。第Ⅻ層は全体に安定した堆積が見られる。第Ⅻ層は地山である。

第2節 調査の経過

調査対象地は北東および東方向に傾斜する標高346mの水田耕作地である。調査区は北西から南東に長く，中央に土地区画のための比高差約1mの段差が設けられていた。調査面積は770㎡で，調査区を中央の土地区画に沿って東側低位部をA区，西側高位部をB区とし，座標北に合わせた10mグリッドを設定した。また，排土を調査区外に持ち出すことができなかつたため，はじめにA区の調査を行い，反転してB区の調査を行うことにした。

重機投入に先だつて，平成11年5月6日から地形の傾斜に合わせてトレンチを6箇所開削した。その結果，A区西側丘陵高位部では第Ⅱ層（水田基盤層）直下に第Ⅻ層（黒褐色粘質土）が確認でき，A区東側低位部では第Ⅻ層（褐色粘質土）が地表から150cm以下に確認された。5月10日に事務所設置，器材搬入等を行い，翌11日から重機による表土剥ぎをA区東側から開始した。トレンチ調査の結果を基に，まず，第Ⅱ層まで重機で除去し，第Ⅻ層の広がりを確認すると，調査地はA区にわずかな尾根，B区に谷地形が形成されることが推測できた。A区北側は重機による掘り下げを第Ⅶ層まで行ったが，遺構・遺物の確認はできなかつた。しかし，調査区の壁面精査時，第Ⅶ層から青磁片1点，弥生土器と思われる土器片が1点出土した。A区南側ではⅤ層直下にⅨ層が確認でき，試掘調査での縄文早期土器出土層が第Ⅺ・Ⅻ層と思われたので，さらに第Ⅹ層まで掘り下げた。その後，A区北側は第Ⅷ層から，A区南側は第Ⅻ層から人力による掘り下げと，遺構検出を各層位ごとに実施した。A区北側では，第Ⅶ層中に縄文土器と思われる黒色磨研系土器片数点と第Ⅷ層中から，縄文後期から晩期の土器片，打製石鏃，磨製石鏃，打製石斧，磨製石斧が出土した。A区南側では第Ⅻ層中から楕円形押型文土器が出土し，第Ⅻ層上面で1.28m×0.85mの隅丸長方形土坑を1基検出している。調査区周壁の土層断面実測と第Ⅻ層～第Ⅻ層上面での地形測量を行った。その後，南側壁沿いに3m×18mのトレンチを地山まで開削したが，遺構・遺物は確認されなかつた。

平成11年5月31日から重機によるB区の表土剥ぎを開始した。B区についてもA区同様，旧地形を復原しながら堆積層の掘り下げを行った。第Ⅶ層から第Ⅻ層まで順次掘り下げと遺構検出を実施したが，遺構・遺物ともに確認されなかつた。調査区周壁の土層断面実測と第Ⅻ層上面での地形測量を行い，7月2日に全体の空中写真撮影を実施した。調査区の埋め戻しを行って，平成11年7月9日に調査の全てを終了した。



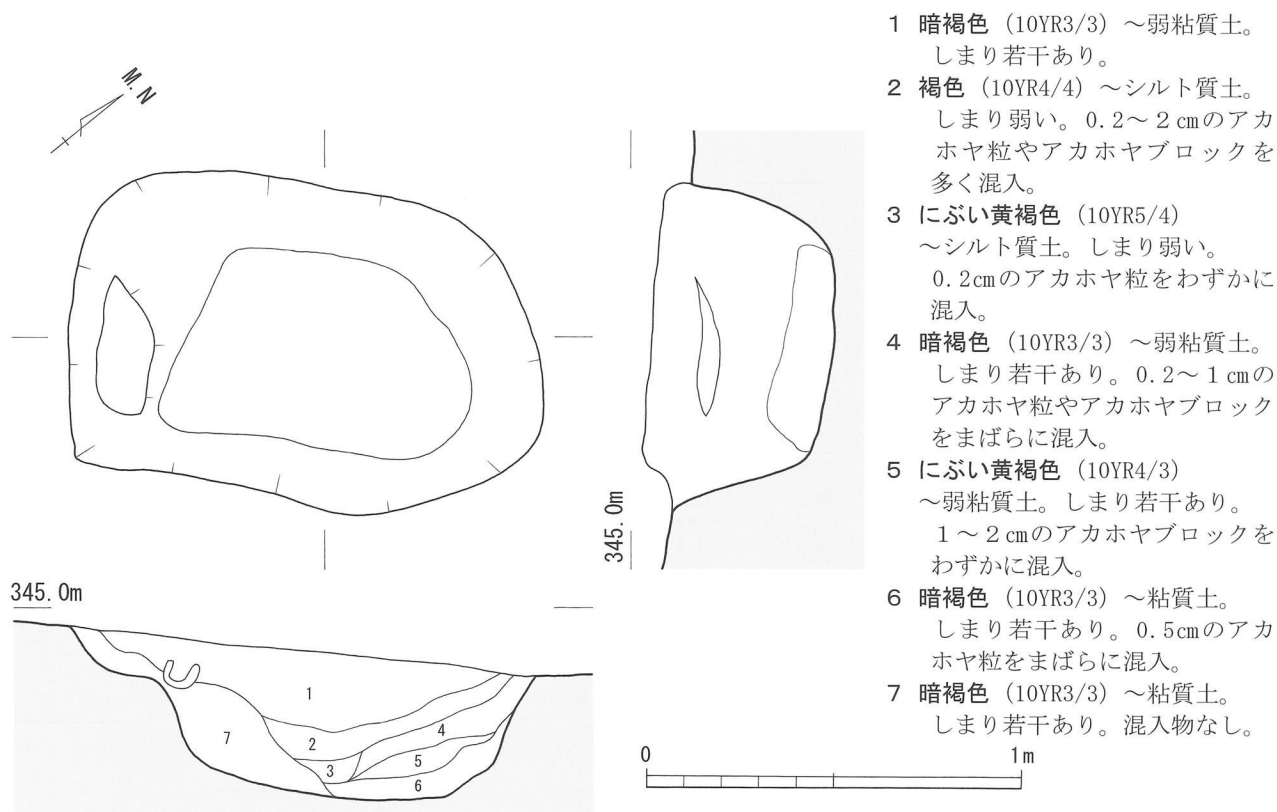
第25図 大野原遺跡 地形及び遺構分布図 (1/250)

第3節 調査の記録

大野原遺跡では、基本層序の第Ⅳ層上面から土坑1基、基本層序の第Ⅶ層と第Ⅶ～Ⅷ層の包含層より土器・石器類が検出された。以下に簡単ではあるが、遺構と遺物の説明を行う。

1 遺構 (第26図)

調査区南端の第Ⅳ層上面で土坑が検出された。長軸1.28m×短軸0.85mの隅丸長方形プランを呈する。検出面からの深さは約40cmを測る。土坑は、楕円形押型文土器が検出された第Ⅶ層より下層で検出され、第Ⅶ層らしき暗褐色土を埋土の一部としているため、縄文時代早期以前の遺構であると考えられる。しかし、土坑に伴う遺物は出土していないので詳しい年代等については不明である。



- 1 暗褐色 (10YR3/3) ～弱粘質土。
しまり若干あり。
- 2 褐色 (10YR4/4) ～シルト質土。
しまり弱い。0.2～2cmのアカホヤ粒やアカホヤブロックを多く混入。
- 3 にぶい黄褐色 (10YR5/4)
～シルト質土。しまり弱い。
0.2cmのアカホヤ粒をわずかに混入。
- 4 暗褐色 (10YR3/3) ～弱粘質土。
しまり若干あり。0.2～1cmのアカホヤ粒やアカホヤブロックをまばらに混入。
- 5 にぶい黄褐色 (10YR4/3)
～弱粘質土。しまり若干あり。
1～2cmのアカホヤブロックをわずかに混入。
- 6 暗褐色 (10YR3/3) ～粘質土。
しまり若干あり。0.5cmのアカホヤ粒をまばらに混入。
- 7 暗褐色 (10YR3/3) ～粘質土。
しまり若干あり。混入物なし。

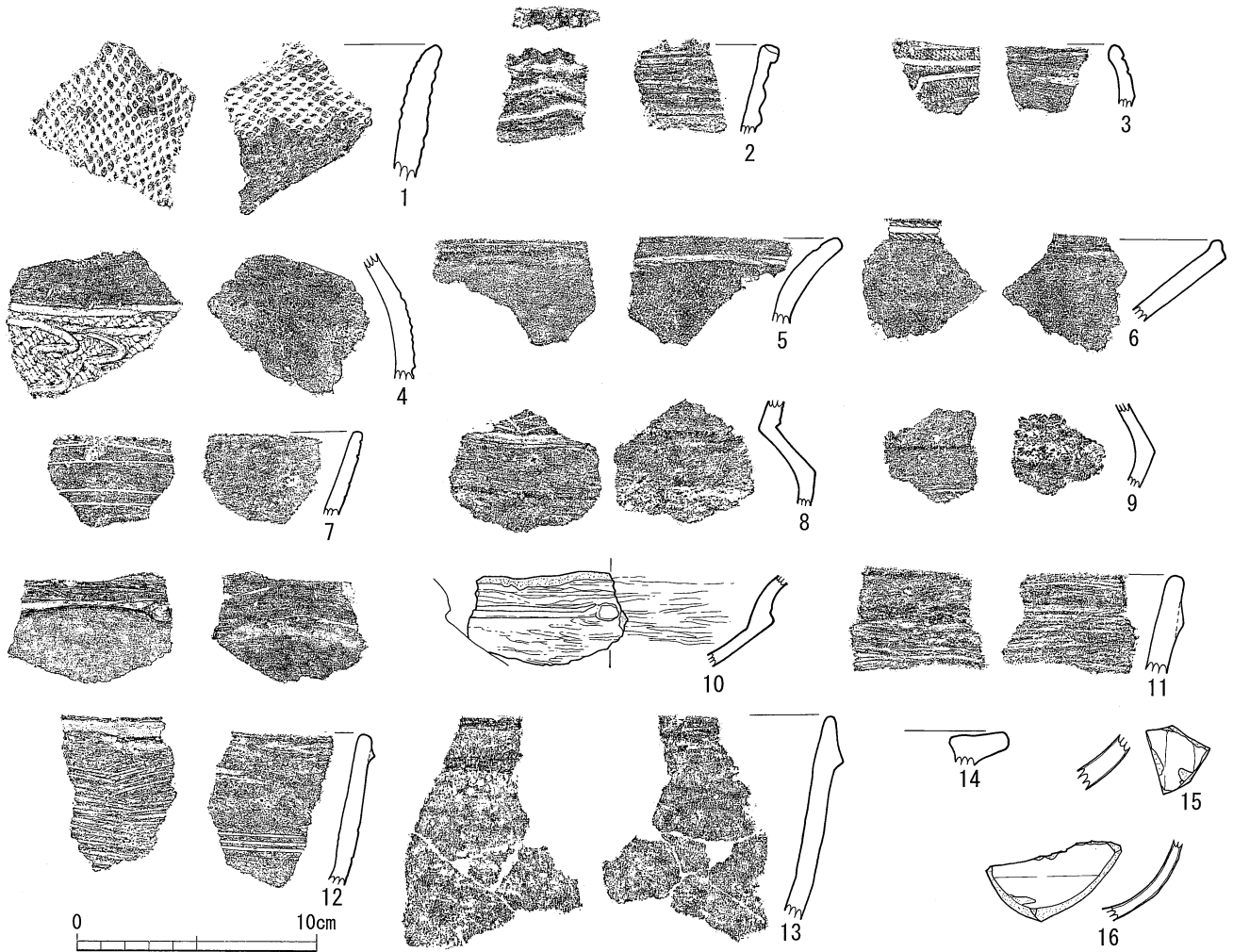
第26図 大野原遺跡 1号土坑図 (1/20)

2 遺物 (第27～30図-1～52)

第Ⅳ層及び第Ⅶ層～第Ⅷ層の包含層より土器・石器類が出土した。出土した遺物は、縄文時代早期～中世と幅広い時代のものであるが、第Ⅶ層～第Ⅷ層で出土した縄文時代後～晩期が主流であると考えられる。

■土器・陶磁器 (第27図-1～17)

1は縄文時代早期の楕円形押型文土器の口縁部である。わずかに外反する器形をもち、外面及び内面上部に楕円形押型文を施す。第Ⅳ層から出土した。2は縄文時代後期土器の口縁部である。口唇部は刻目をもち、外面には流水文風の沈線文が確認できる。3は縄文時代後期の磨消縄文系土器の口縁部であ

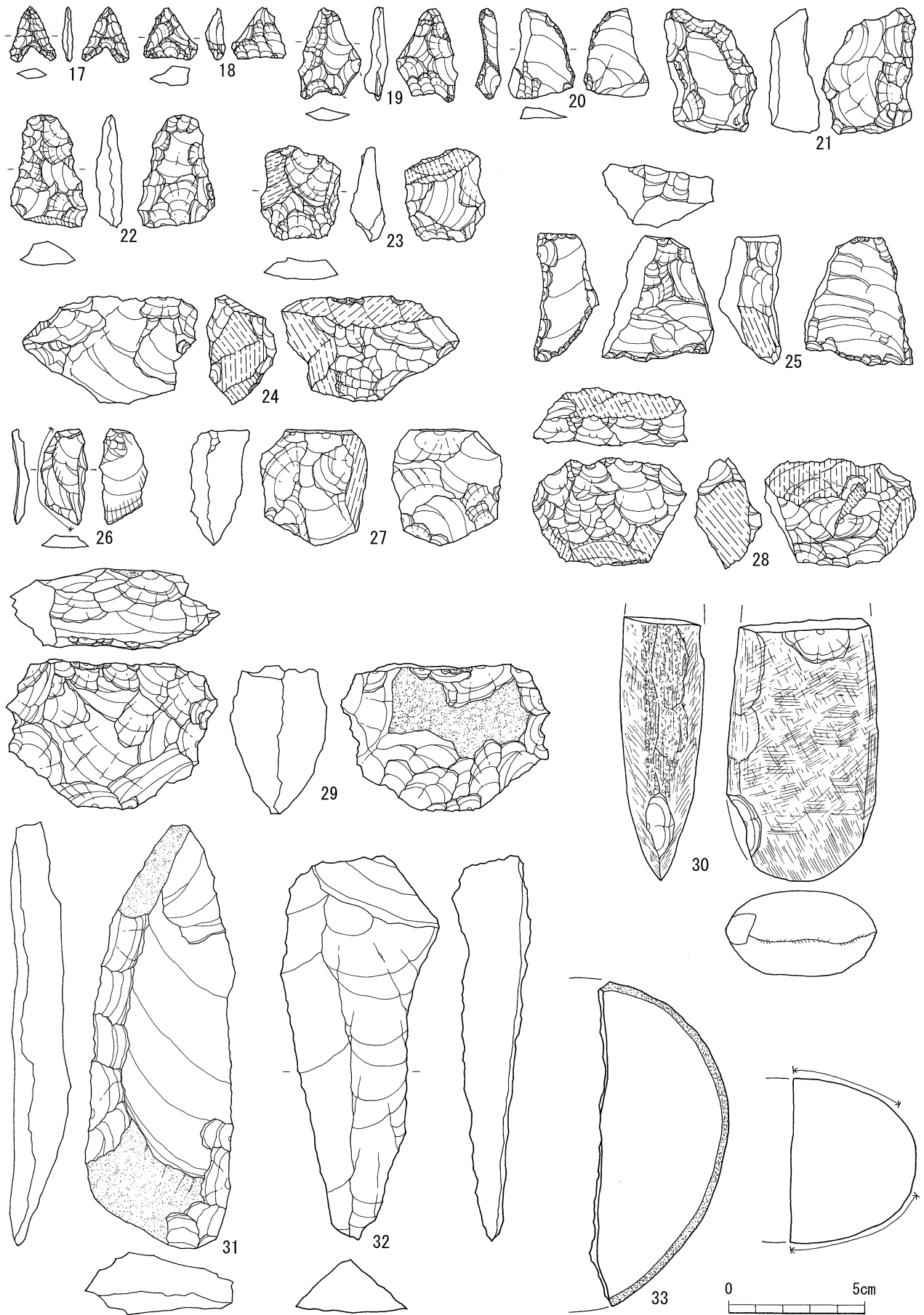


第27図 大野原遺跡 包含層等出土縄文土器・弥生土器・中世陶磁器 (1/3)

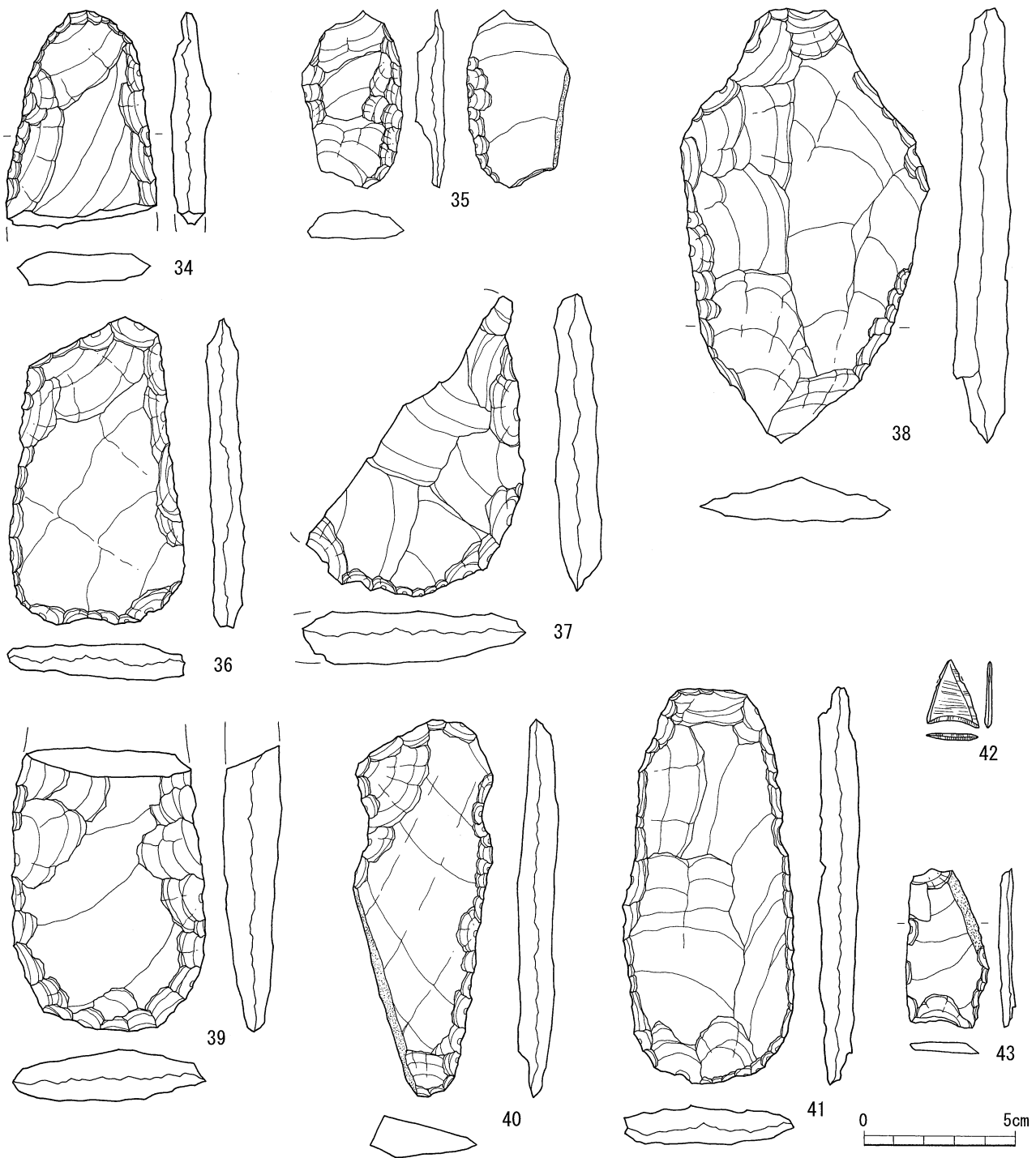
る。わずかに内湾しながら立ち上がる波状口縁と入組文によって区画された磨消縄文が確認できる。4は、3同様、縄文時代後期の磨消縄文系土器の胴部である。2本の平行沈線により区画された磨消縄文が確認できる。5は縄文時代後期の精製磨研系土器の口縁部である。口縁部が「く」字状に内向し、口唇部に1条の沈線で区画された磨消縄文を施している。6は縄文晩期の精製磨研系土器の口縁部である。大きく外側に開く器形と内面上部に1条の沈線が確認できる。7は縄文晩期の精製磨研系土器の胴部である。頸部で短く屈曲する器形であり、内外面に丁寧なミガキを施している。8～10は縄文時代晩期の粗製土器の口縁部・胴部である。8・9のように、口縁部から頸部にかけて細沈線による条痕文が確認できる。器形は、頸部と胴部の2カ所で「く」字状に屈曲し、口縁部で大きく開く。11～13は縄文時代晩期の粗製深鉢の口縁部～胴部である。口縁部には刻目のない突帯をもち、11・12の胴部には条痕文をもつ。

14は、弥生時代後期の甕の口縁部であり、内外面に丁寧な横ナデを施している。口縁の器形は、細片であるので判断に窮するが、逆L字状を呈すると考えられる。

15・16は、青磁碗の体部である。15は、内外面に緑色の釉がかかり、外面に鎬連弁を有する。16は、内外面に灰味がかった釉がかかり、外面は回転ヘラケズリ痕が認められる。15・16ともに龍泉窯系青磁と考えられ、13世紀末～15世紀頃に年代比定される。



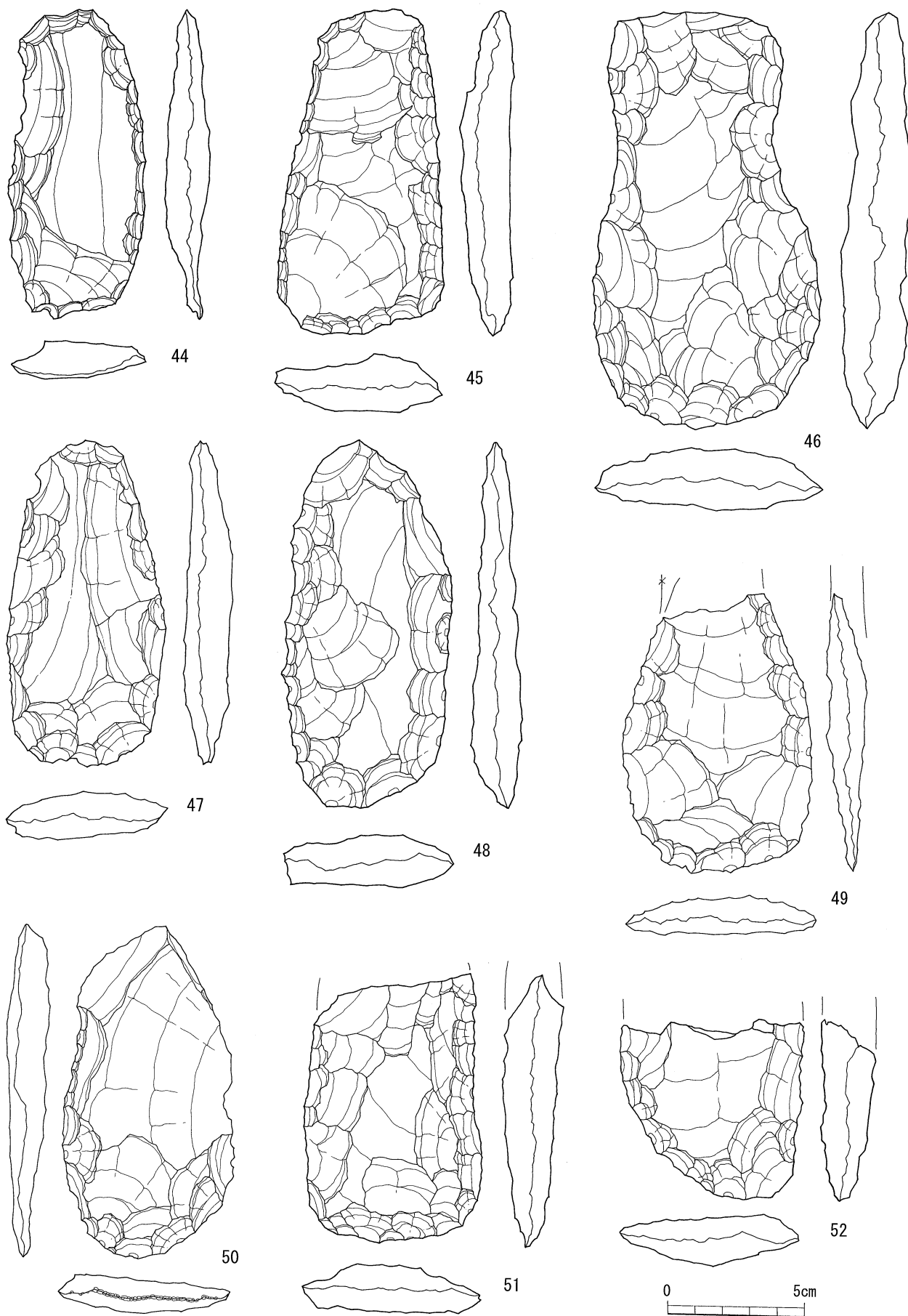
第28图 大野原遺跡 包含層等出土石器① (1/2)



第29図 大野原遺跡 包含層等出土石器② (1/2)

■石器 (第28～30図-17～52)

17はサヌカイト製の打製石鏃である。18～25・28はチャート製石器群である。18・22は打製石鏃未製品、19は未製品の可能性があるものである。20・21・25はスクレイパーである。20は小形不定形剥片の末端に細かな剥離を入れて刃部を作出している。21は、石器上面に鈍角の細かな剥離が入り、ここを刃部としたと考えられる。25は石器下縁と左側縁に細かな剥離が入れられる。23・24・28は石核である。いずれも小形不定形剥片が剥離される。26は黒色黒曜石製の微細剥離ある剥片である。素材剥片のバルブは発達せず、また背面の剥離面の構成から、パンチを用いて同一打面からの連続した剥離が想定される。微細剥離は石器左側縁を中心に見られる。27・29は流紋岩製の石核である。いずれも小形不定形剥片が剥離される。29は残核が礫器状になっている。



第30图 大野原遺跡 包含層等出土石器③ (1/2)

31・37は玄武岩など火成岩系のやや緻密な石材が用いられる。31は剥片様の大形の石片に二次加工が施されたものである。37は打製石斧の刃部周辺である。大きな剥離で成形されたのち、小さな剥離で整形される。

30は堆積岩系（砂岩か）製の磨製石斧である。基部を欠損するが鈍重な印象であり、刃部は蛤刃状に研磨される。

34～36・38～41は緑色～青色味を帯びた黒色変成岩系石材が用いられた石器である。34～36・39～41は打製石斧である。そのうち34・36・39・41は平面短冊形を呈する。40は、抉り部と直線的な刃部で構成され、石鎌とも呼べるような形態を呈する。38は変成岩系石材の中でも薄く剥落するような石質である。石片周縁に細かな剥離が見られるが、その要因は明確ではない。

42は磨製石鎌、43は磨製石鎌未製品である。赤みを帯びた暗い色調の石材が用いられる。

44～52は、班晶の発達した火成岩系石材（安山岩・凝灰岩など）が用いられた打製石斧であり、平面短冊形を呈し、刃部は緩やかに弧を描くものが多い。不定形な剥片様の石片を素材とし、大きな剥離で成形されたのち細かな剥離で整形される。46は基部付近に浅い抉りが作出される。33は凝灰岩製の磨石である。表裏面に磨痕が残される。

遺物番号	種別	器種部位	出土地点	手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
				外面	内面	外面	内面		
1	縄文土器	深鉢口縁部	XIV層	精円形押型文	精円形押型文・ナデ	橙	橙	2.5mm以下の黒色角閃石・無色透明粒・白色粒、3～9mmの灰色・褐色粒を含む	
2	縄文土器	深鉢？口縁部	VII層	口唇部に押圧刻目文・凹線による流水状の表現	横方向の条痕文	にぶい黄褐	にぶい黄褐	1mm以下の黒色角閃石・無色光沢粒、3～5mmの黄褐色・黒色半透明粒を含む	
3	縄文土器	浅鉢？口縁部	VIII層	口唇部は丁寧なナデ・縄文の後沈線による入組文（磨消縄文）	丁寧なナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	1mm以下の黒色角閃石・白色粒を含む	
4	縄文土器	深鉢？胴部	VII層	縄文の後2本の沈線文（磨消縄文）	丁寧なナデ	にぶい褐	にぶい黄橙	1mm以下の黒色角閃石・黄褐色・無色透明光沢粒、2～3mm褐色・黒色粒を含む	
5	縄文土器	浅鉢？口縁部	VIII層	口唇部は縄文の後1条の沈線（磨消縄文）・丁寧なナデ	丁寧なナデ	にぶい赤褐	灰褐	1mm以下の黒色角閃石・黄褐色粒を含む	
6	縄文土器	深鉢口縁部	VIII層	ミガキもしくは丁寧なナデ・穿孔あり	口唇部近くに1条の凹線文・丁寧なナデ	にぶい褐	にぶい褐	1mm程の黒色角閃石・無色透明光沢粒を含む	
7	縄文土器	深鉢口縁部	VIII層	横方向の細沈線・丁寧なナデ	丁寧なナデ	にぶい褐	にぶい褐	2mm以下の黒色角閃石、1mm以下の無色透明粒を含む	8と同一個体の可能性あり
8	縄文土器	深鉢胴部	VIII層	上部に弧状の細沈線・丁寧なナデ	丁寧なナデ	にぶい褐	にぶい褐	2mm以下の黒色角閃石、1mm以下の無色透明粒を含む	7と同一個体の可能性あり
9	縄文土器	深鉢胴部	VIII層	ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	2mm以下の黒色角閃石、1mm以下の無色透明粒を含む	内面に炭化粒らしき粒子付着
10	縄文土器	浅鉢胴部	VIII層	横方向のミガキ・頭部に沈線	横方向のミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1.5mm以下の灰白・褐・赤褐・灰・黒色角閃石・無色透明粒を含む	
11	縄文土器	深鉢口縁部	VIII層	貼付突帯・横方向の条痕の後ナデ	横と斜方向の条痕の後ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	4mm以下の灰白・褐灰・灰色粒、2.5mm以下の黒色角閃石、1mm以下の無色透明光沢粒を含む	
12	縄文土器	深鉢口縁部	VII層	貼付突帯・横方向の条痕の後ナデ	横方向の条痕の後ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	1.5mm以下の灰白・黒色角閃石・無色透明粒を含む	
13	縄文土器	深鉢口縁部	VIII層	貼付突帯・横方向の条痕の後ナデ	横方向の条痕の後ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	2mm以下の黒色角閃石、1mm以下の灰白・灰黄・褐灰・無色透明光沢粒を含む	
14	弥生土器	壺口縁部	VII層	横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	2mm以下の灰褐・褐・赤褐・黒褐色粒を含む	
15	陶磁器	碗体部	VII層	施釉・鍍連弁	施釉・横ナデ	灰	灰		灰オリーブ色釉
16	陶磁器	碗体部	VII層	施釉・回転ケズリ痕	施釉・横ナデ	灰白	灰白		明オリーブ灰色釉

第15表 大野原遺跡 出土土器観察表

番号	器種	石材	出土位置	注記番号	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)
17	石 鏃	サヌカイト	XII層	303	2.1	1.7	0.4	0.8
18	石鏃未製品	チャート	VII2層	72	1.9	1.9	0.8	1.7
19	石鏃未製品	チャート	XII層	302	3.2	2.1	0.7	4.0
20	スクレイパー	チャート	VIII層	283	3.3	2.3	0.7	4.9
21	スクレイパー	チャート	—	—	4.5	3.2	1.5	29.5
22	石鏃未製品	チャート	VIII層	232	4.1	2.3	0.8	8.9
23	石 核	チャート	XII層	302	3.4	2.8	1.2	10.4
24	石 核	チャート	XII層	1	4.0	6.3	2.0	46.3
25	スクレイパー	チャート	VII1層	34	4.7	3.9	1.8	36.6
26	微細剥離ある剥片	黒色黒曜石	VIII層	161	3.5	1.7	0.5	2.5
27	石 核	流紋岩	XII層	302	4.3	3.9	1.6	34.9
28	石 核	チャート	VIII層	186	3.9	5.4	2.0	46.2
29	石 核	流紋岩	VIII層	298	5.3	7.3	3.1	145.2
30	磨製石斧	砂 岩	VIII層	11	9.6	5.5	3.1	241.6
31	二次加工ある剥片	玄武岩	VIII層	169	15.5	5.3	1.9	167.4
32	剥 片	火成岩系	VIII層	245	14.0	5.5	2.8	135.3
33	磨 石	凝灰岩	VIII層	242	11.8	4.6	6.2	432.0
34	打製石斧	変成岩系	VIII層	222	7.9	5.0	1.1	42.7
35	打製石斧	変成岩系	VIII層	285	5.8	3.3	0.9	17.6
36	打製石斧	変成岩系	VIII層	210	10.0	5.7	1.0	80.0
37	打製石斧	玄武岩	VIII層	151	10.6	5.4	1.5	91.0
38	打製石斧	変成岩系	VIII層	253	14.2	8.0	1.5	179.8
39	打製石斧	変成岩系	VIII層	167	9.2	6.3	1.7	120.0
40	打製石斧	変成岩系	VIII層	163	12.4	4.4	1.1	64.1
41	打製石斧	変成岩系	VIII層	252	13.0	5.6	1.2	100.5
42	磨製石鏃	暗灰色頁岩	VIII層	147	2.3	1.7	0.2	0.7
43	磨製石鏃未製品	赤色頁岩	VIII層	133	5.1	2.7	0.4	8.3
44	打製石斧	火成岩系	VIII層	269	11.2	4.9	1.5	76.1
45	打製石斧	火成岩系	VII2層	20	11.9	6.1	2.1	152.3
46	打製石斧	火成岩系	VIII層	168	15.4	8.3	2.3	305.7
47	打製石斧	火成岩系	VIII層	294	12.0	5.7	1.6	116.9
48	打製石斧	火成岩系	VIII層	197	13.5	6.0	1.8	152.4
49	打製石斧	火成岩系	VIII層	212	9.8	6.9	1.3	100.4
50	打製石斧	火成岩系	VIII層	292	12.0	6.2	1.5	108.1
51	打製石斧	火成岩系	VII1層	75	9.4	6.5	1.8	136.0
52	打製石斧	火成岩系	VIII層	208	6.6	6.7	1.8	77.2

第16表 大野原遺跡 出土石器観察表

第4節 調査のまとめ

大野原遺跡では、縄文時代早期・縄文時代後期～晩期・弥生時代中期末～後期前葉・中世の遺物と縄文時代早期以前と考えられる土坑が検出された。

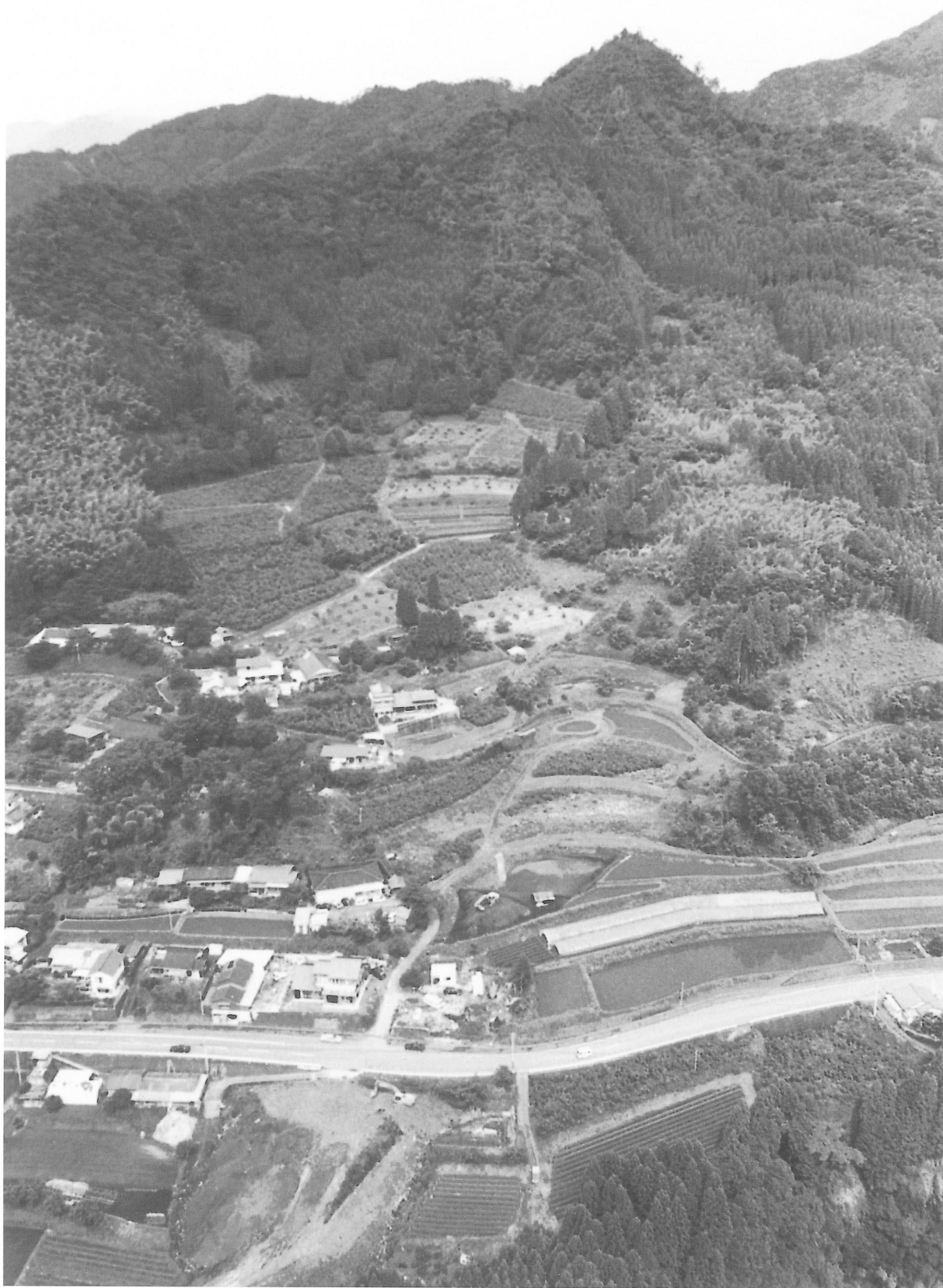
縄文時代早期に属すると考えられる遺物は、1の楕円形押型文土器と23・24・27のチャート製品石器群が推定でき、主に第Ⅱ層～第Ⅳ層にかけて出土した。押型文土器群とチャート製主体石器群が共伴することは、前章の五ヶ村遺跡で述べているように高千穂盆地内ではよくみられる傾向である。

縄文時代後期～晩期に属すると考えられる遺物は、2～4（磨消縄文系）5～10（黒色磨研系）11～13（粗製深鉢系）の土器群と26の黒色黒曜石製剥片類・34～41・44～52の打製石斧であると推定でき、第Ⅷ層中心に出土した。磨消縄文系土器は後期に、黒色磨研系土器と無刻目突帯文をもつ粗製深鉢形土器は晩期に属する。一方打製石斧が、後期・晩期どちらの土器群に属するかという判断は難しい。また、大野原遺跡において、他の遺物と比して打製石斧の出土割合が高い。

弥生時代に属すると考えられる遺物は、14・42・43であり、第Ⅶ・Ⅷ層から出土した。14は、甕の口縁部片である。鋤先口縁を特徴とし、黒髪式土器の範疇に入ると考えられる。磨製石鎌とともに弥生時代中期末から後期前葉に属すると考えられる。

中世に属すると考えられる遺物は15・16の龍泉窯系青磁である。高千穂盆地内は当期の龍泉窯系が比較的多く発見される土地であり、神殿B地区遺跡などで確認されている。

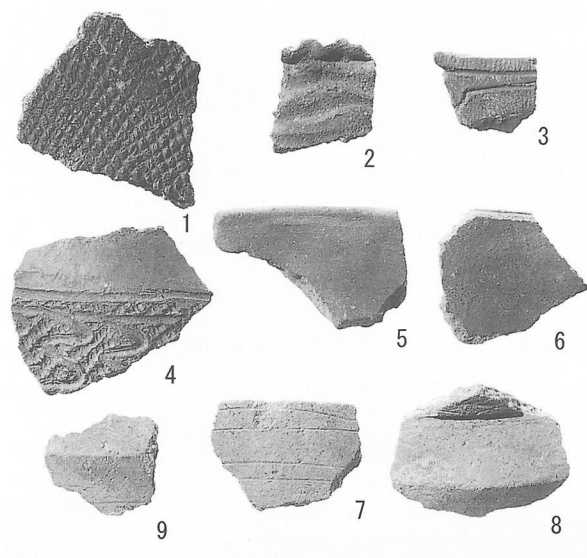
調査当初、大野原遺跡は、遺構が土坑1基のみ検出であり、遺跡の性格が見えにくいと感じた。しかし、数少ない一つ一つの遺物を観察すると、大野原遺跡は、①縄文時代早期の押型文土器群とチャート製主体石器群との共伴・②縄文時代後晩期の打製石斧と黒色黒曜石製剥片類・③黒色磨研系土器と無刻目突帯文土器の共伴・④弥生時代中期末から後期前葉頃の黒髪式土器などの特徴をもつ。これらは高千穂盆地内の遺跡でよく看取できる傾向であり、遺跡周辺で幾度となく人々の営みが展開されてきたことを物語っている。



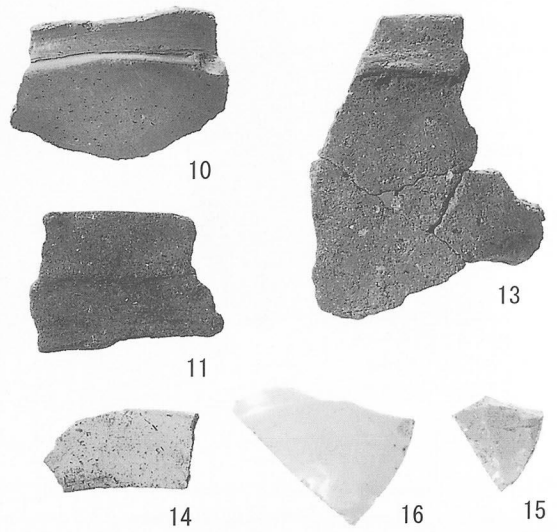
①大野原遺跡と遠景（北方向を望む）



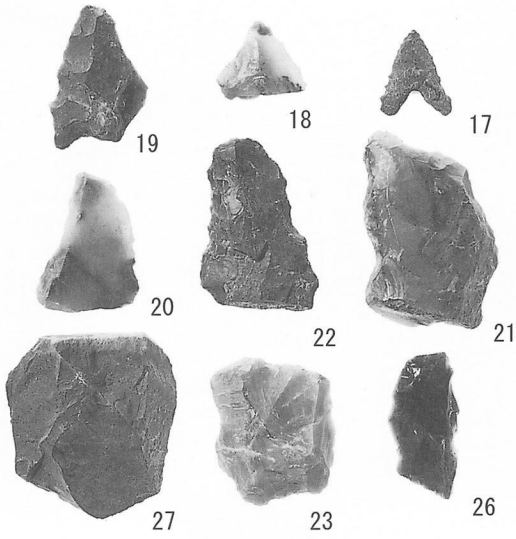
①大野原遺跡（西半分）



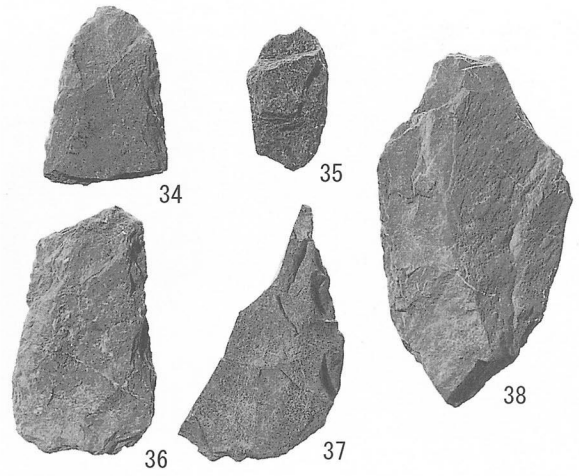
②包含層等出土縄文土器（1）



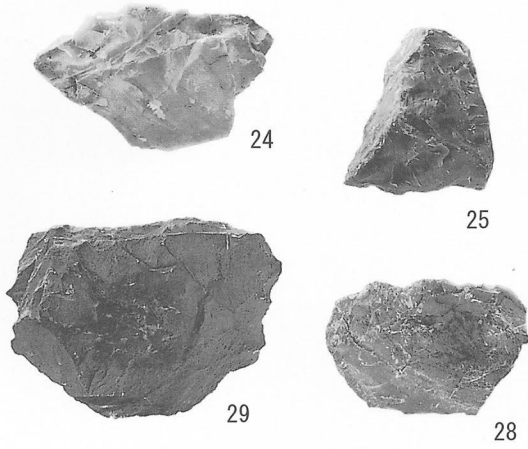
③包含層等出土縄文土器（2）



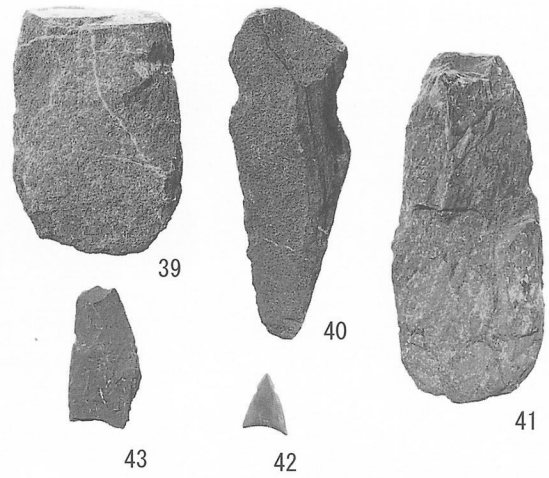
①包含層等出土石器 (1)



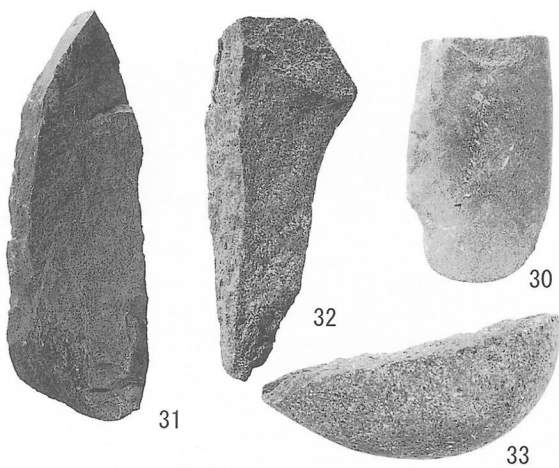
④包含層等出土石器 (4)



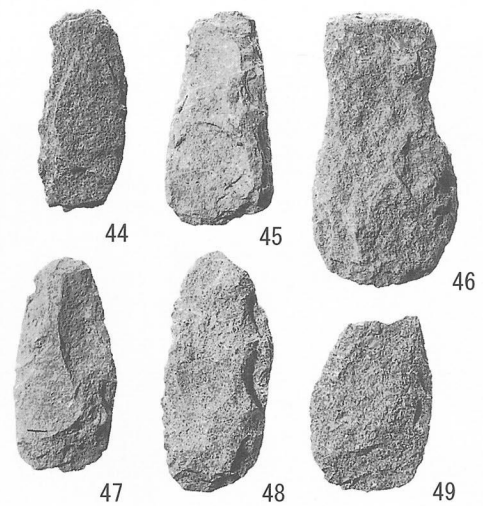
②包含層等出土石器 (2)



⑤包含層等出土石器 (5)



③包含層等出土石器 (3)



⑥包含層等出土石器 (6)